

シュラアート・オンライン

メガネザル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兄が殺された。

死んだのではない。殺されたのだ。

それでも、少年は殺した人を恨まなかった。

ただ、それを受け入れたのだ。

負を全て飲み込んで微笑んだのだ。

それが、死んだ兄が望む顔だと分かっていたから。

何者にもなれず、何かにもなれず、何も無い少年の物語。

処女作です！文才ゼロです！

修羅の門とS A Oのクロスです！

ということでS A Oのゲーム設定を自己解釈&リアルに近付ける為に改定もしくは改竄しております。S A Oの設定変更能耐えられない方はブラウザバックをお願いします。

戦闘描写は頑張りますが修羅の門を読んでいると分かりやすいかと思えます。

オリ主ですがラスボスは陸奥九十九を予定して・・・そこまで続けられるかな・・・

時間系列は第壹門ヴァーリ・トワード編の後ですが、年号と月日ともにS A Oに合わせる為にヴァーリ・トワードが12月23、24日でS A Oが11月6日に正式サービスがスタートなので合わせる為にヴァーリ・トワードが二ヶ月早くなった10月23、24日に行った事になっています。

自動的に陸奥九十九の失踪期間二年十ヶ月が二ヶ月延びてピッタリ三年にしました
！（偶然たまたま奇跡的に）

最後に本当に作者の文才はゼロです。見切り発車する馬鹿なので亀更新です。ソレ
でも構わないという心の広い優しい方が居てくださると嬉しいです。

目次

プロローグ	1
戦うとは	10
デスゲームで出来る事	20
始まりの日	29
獣人の王	48
同じ世界で(前)	64
同じ世界で(中)	73
同じ世界で(後)	85
同じ世界で(終らず続く)	101
また明日……は	112
助ける理由	122
騒がしい夜	135

嘘吐きは誰?	151
本物と偽物と嘘と真実	169
聖堂へ	183
早く速く迅く	197
何もしない	210
望んだ世界	227
出来損ない	241
設定	258
認識の違い	278
光景	290
この世界は	304
攻略組	325
攻略の鬼	338

こんなトコロで

犯罪者だ

邪魔をするな

352

365

382

プロローグ

修羅がいた。

千年ほど昔から歴史の中にいた。

鬼神や化け物、果ては軍神とまで呼ばれていた。

しかし、その存在は光を浴びる事は無く、影に生きていた。

故に極一部の者しか知られる事はなかった。

曰く、人殺しの武術である

曰く、人ではなく化け物である

曰く、千年もの間で敗北は一度もない

半ば物語だけの存在のようなモノが

世界に知られる事になった。

その名も——陸奥圓明流——

歴史の影に生きていた存在を光の中に引きずり出した者

陸奥 九十九

その男は日本で、世界で、見る者全てを魅せた。
そう、魅せられた人達の中に・・・天才も居た。
小石が投げられた水面の様に、何かが変わり始めた。

2022年11月1日

人も疎らな公園で黒い学生服を着た少年が、着物にコートという変な格好をした糸目の男に声をかけた。

「ゲンさん、久しぶり。毅波さんは元気？」

少年の微かな笑みを浮かべながら言う姿を見ると、少年と男の関係が親しいモノだと分かる。

「元気も元気、あいも変わらず尋常じゃない量の修練を積んでる。全くもって大した執念だよ」

男は糸目のまま何処か可笑しそうに口元に笑みを浮かべていた。

「そっか、それで今回の用件は？また仕事？」

「いきなり本題かい？つと、いつもなら言う所だけど今回はちよつと困ったことになっ

てねえ」

糸目のまま舌を出して笑っている男を見て少年は呆れたように溜息を吐いた。

「困ったことって、また受けた事を忘れてた依頼の期限がギリギリですか？ もしくは結構大も「僕と陸奥九十九の関係がバレた」

少年の言葉に被せながら言った言葉に周囲の音が消された。

「……そうですか、俺には関係ないですね。ご自分で何とかして下さい」

そう言つて背を向けて去ろうとした少年の袖を男が掴んだ。

「まあ、そう言わずに。君も誰にバレたのかくらい知つても損は無いだろ？」

少年は更に大きな溜息を吐きながら男の方に向き直つた。

「別に知られてもいいんじゃないですか？ そんな理由で殺しなんてアホらしくて俺は嫌ですよ」

あまりに自然に殺し——誰かの命を奪う事を言つた少年に男は当たり前のように聞き流して笑みを浮かべたまま舌を出した。

「さすがに目立つことは勘弁したいかな？」

「でも、前に役者に向いてるかもつて言つてたような、陸奥九十九のネームバリューがあれば何処のテレビ局でも引つ張りどころですよ」

少年がそう言うのと男は舌を出したままばつが悪そうに顔を逸らした。

「は、はは……役者にはなってもいいけどソレは流石に……知ってるでしょ、陸奥と不破はそんな簡単なモノじゃないって」

男の糸目が薄く開いて何かを思い出している様に見えた。

「もちろん分かかってて揶揄ったに決まってるじゃないですか」

呆気カランと言い放った少年に男は一本取られたと言わんばかりに額に手をやった。

「君くらいだよ、僕に口で勝つのは……」

「素直に喜べない褒められ方ですね」

男は糸目を薄く開けて少年の顔を見た。

「素直に喜べば良い、僕に口で勝つのは頭が要る。僕と陸奥九十九の関係が分かるくらいにね」

「アレはただの勘です。カマを掛けるとアツサリとぼろを出したゲンさんが迂闊だっただけです」

少年が男と同じように舌を出して惚けると男は糸目に戻って笑みを浮かべた。

「それでゲンさんと陸奥九十九の関係を知った頭の良い方は誰なんですか？」

「ああ、コレを作った人だよ」

男は何処か誇らしげに横に置いていた大きな紙袋の中から何かのソフトを取り出した。

「・・・S・・・A・・・O?何ですかソレ?」

男の誇らしげな顔が呆れからか固まった。

「・・・うん、予想してたけど本当に知らないとは思わなかった。ここ二、三日ニュー
スとかで話題にもなってた筈なんだけど・・・」

少年は、手渡されたソフトを手にしながら首を傾げていた。

「つい一週間前にヴァーリ・トワードがありましたからね。そのせいで他への関心が薄
くなっちゃって」

「分からなくもないけど・・・これはSAO、ソードアート・オンラインというモノだ
よ」

その言葉を聞いて少年は何か思い当たったのか顔を上げた。

「そういえばクラスの男子が同じ言葉を言ってたような気がします」

「気がします・・・って、学校で親しい友人とか居ないの?」

まさに呆れたと言わんばかりの男の態度に少年はムツとした。

「別れる前から数えて千年前からマトモに勉強したことのない家系から、中学だけとは
いえ初めて義務教育を受けている子孫に向かって何を言ってるんですか?」

その言葉を聞いた男が参ったと舌を出して両手を上げた。

「僕も受けたことないからなあ、出来れば感想を聞かせてくれないかな?」

「本音を言うと、実にくだらない。教える側の人間すら外部の目に怯え常識すらも録に教えない始末……行くだけ時間の無駄です。中学が終わり次第、俺も裏の世界に完全に入るつもりです」

そう言った少年の目は人に恐怖を与えるくらい冷めていた。

「ははは、だろうね。いつでも紹介してあげるから期待しているといい」

笑う男を見て少年は話を変える為に手にしたソフトを強調するようにブラブラと揺らした。

「それでコレを作った人は誰ですか？ちようど仕事を受ける気になった所ですから」

少年の冷えた目から光が消えていた。

そんな目を見ながらも男は少しも動じないで首を横に振った。

「やだなあ、早とちりしないでよ。今回は仕事というより頼み事って言った方がしっくり来るモノだからさ」

その言葉を聞いた少年は訳が分からないのか再び首を傾げた。

「頼みってというのはね、このソードアート・オンラインをやって欲しいんだ」

「……どうしてゲンさんがそんなことを？」

「実は僕だけの頼み事じゃないんだよ。ソードアート・オンラインの製作者——茅場晶彦——からの頼み事でもあるんだ」

少年は怪訝そうな顔をしながら目を細めた。

「ゲンさん、その茅場晶彦と知り合いですか？」

男は更に笑みを深くして頷いた。

「うん、一年くらい前かな。色んなパイプを作る為にウロウロしてた時に声を掛けられたんだ」

「その時に話をして、残った髪の毛か唾液から遺伝子情報を記録されたつて所ですか……」

少年の呆れた表情に男は自分の失敗を認めるかのように舌を出した。

「その通り、油断してたよ。まさか何も無い状態で僕と陸奥九十九の関係を疑うなんて欠片も考えてなかったし、彼からは強者の気配がしなかったしね」

「なるほど、確かにそれは天才と呼ぶに相応しい人ですね。その茅場晶彦の頼みがゲームのプレイですか……これ、本当は陸奥九十九にやって欲しがってると思うんですが」

「まあまあ、そこで僕からの頼み事があるんだよ。それに君にも参加資格はある。茅場晶彦から贈られてきたナーヴギアとソフトと一緒に手紙も付いてきたんだよ」

男は紙袋から出した手紙を少年に手渡した。

「拝啓 突然このようなモノを贈られ、さぞ驚かれていますかと思ひます。」

私は茅場晶彦という者です、恐らく貴方は覚えではないでしょうが一度お話をさせていただき、その時に得た遺伝子情報を使って貴方と修羅である陸奥九十九殿との関係を知ることが出来ました。

そこで貴方に一つお頼みしたい事があります。

修羅の血を引く者を私の作った世界へと招待したいのです。

ゲームなどと一笑に付するかも知れませんが必ず身に宿る修羅が血を滾らせませす。

最後にこの言葉を『これはゲームであつて遊びではない』この言葉通りになりますので是非ご参加の程をお願い致します。 茅場晶彦

少年が、声に出して読み上げると男は嬉しそうに頷いた。

「何を頷いているんですか、俺は圓明流史上最高の駄作。たしか、ゲンさんも言つてましたよね」

男は笑みを浮かべたまま、薄く目を開けて少年を見つめた。

「だからだよ、このゲームは必ず君にとつて一種の機転になるだろうと思つてね。だから僕から君への頼み事なんだよ」

しばらくの間、二人は無言のまま対峙し続けると少年が諦めるように溜息を吐いた。

「分かりましたよ。このゲームをやればいいんですね？飽きやすい性格ですから続くかどうかは期待しないで下さい」

少年は紙袋を拾い上げてソフトと手紙を中に入れて歩き出した。

「次に会う時を楽しみにしてるよ、年相応に楽しんでくるといい」

少年は生返事を返しながら家路についた。

戦うとは

2022年11月6日

土曜の三限目が終わりクラスが騒々しくなり、この後どこに遊びに行くかを話し合っている。

『そういえば、今日の1時からだっけ……。家に帰ったらやつてみるか』

少年はそんなことを考えながら帰り支度をしていると、不意に教室が静まり返った。眼鏡をかけ顔の横で左右の髪を結んでいる少女が少年の前に立ったからだ。

「山田君、今日もいい？」

少女は何処か申し訳なさそうなにしているが少年は気にした風もなく立ち上がって視線を向けた。

「別に気にしなくていいよ、今日は少し用事があるから帰るだけになるけど」

少女が黙って頷くと二人は一緒に教室から出て行く、その二人を周囲は気持ち悪いモノを見る目をして見ていた。

「……今さらだけど、本当にいいの？」

人通りの少ない閑静な住宅街を二人で歩いていると、少女が不安そうな顔をしながら山田と呼んだ少年を見ている。

「いいも何も俺から声を掛けたんだし、むしろ俺が君に本当にいいのか聞きたいくらいだよ」

「……掛けてくれたんでしょ。帰り道でイジメを受けていた私を見て」

少女は思い出すように語り出した。

「初めは安い同情かと思つてたから少しでも私に向いた矛先がアンタに向かえばいいと思つて一緒に帰つていたけど……」

二人は歩を止めることなく話を続ける。

「よく言うよ、いざ俺にも矛先が向き出したら誰よりも気にしてる癖に」

「向き出したらすぐに離れると思つてたのよ、なのに気付いた時には私と同じように孤立させられてた」

「元から孤立してたようなモノだし、むしろ一人じゃなくなつたかも」

少女は一瞬だけ止まつた後、ホンの少しだけ顔を赤くしながら少年から顔を背けた。

「ば、馬鹿じゃないの!? 私とアンタの関係は最初っから変わつてないわよ!」

そんな少女の反応を見て少年は笑い出した。

「別に朝田さんとは誰も言つてないんだけどなあ」

「クラスから孤立させられているアンタが私以外に友達がいるとは思えないからよ！」
「ほら、俺にも一人は友達がいるって言ってくれた」

「っ」

少女の顔が今度は怒りや恥ずかしさで真っ赤になっている。

「も、もういい!!」

「だよね、もういいわ。臭過ぎて堪えられないわ」

少女の言葉に被せるように間延びした不快な声が響いた。

「そうそう、もう気持ち悪くて吐きそうなんだけど」

「自分達がどれだけ気持ち悪いか分かってない所とかマジキモいよね」

二人の退路を塞ぐように前方に図体がデカイ男と学生と思われる女二人の三人、後方に前方の男よりは劣る二人と前方と同じ学生の女が一人の三人が立っていた。

「アレが前にお前の邪魔をした男か？」

「そうだよ、伯父さん、正義の味方気取りなのかしらないけどウザくてさ」

図体のいい男が怯えた少女といつも通りの少年に目を向けた。

「運が無かったなガキ共、鬼道館No. 2奥寺って言えば分かるか？」

鬼道館と言えば実戦空手で日本では一、二を争うほど有名な所だ。

「っ」

完全に怯えてしまった少女は震える手で少年の裾を握った――が、
「鬼道館つて片山右京さん以外は大したことない集まりだし、悪いけど運が無いとは思えないな」

少年は挑発とも取れる言葉を言い放った。

「お、奥寺さんに向かつて何て言っただんだ!? つのガキイ!!」

奥寺は青筋を立てたが動かず後方にいる男の一人が少年との間合いを走って詰めて右の拳を突き出した。

「――つたく、遅い・・軽い・・」

少年は左手で相手の右拳をボールをキャッチするように捕まえた。

「なっ! つあぎあつ!」

辺りに虫が潰れたような音が響き、男の拳が握り潰された。

「そして脆い。ホントに鬼道館の人達? これじゃ一般人と大して変わらないよ」

少年の態度は期待ハズレと言ってるようなモノになった。

「ああああああ「五月蠅い」

少年の目の前で跪き痛みで呻いている男の顔面を蹴り飛ばして黙らせた。

「ひっ――」

少女は小さく悲鳴を上げた。蹴り飛ばされ地面に叩き付けられた男は顔が醜くひ

しゃげていたからだ。

「朝田さん、今さらだけど危ないから少し離れ……」

少年は見た瞬間に理解してしまった、少女が自分に向ける視線の意味を。

「もう許さねえぞ、糞ガキがあ！その澄まし顔切り刻んでやる!!」

もう一人の男が小さなナイフを取り出して走り出すと少年はスルリと上着を脱いで自由になり迷うことなく男との間合いを詰めた。

男のナイフを持った右手の手首を途中で受け止めると同時に左足で男の右足を踏み抜き右膝で金的を蹴り上げた。

「うっ
!?!」

右足が地面に固定されている状態で金的を蹴り上げられ衝撃を逃がすことも出来ず、男は痛みのみあまり失神した。

「……ここまで感想を聞かせて貰ってもいいですか?」

少年は失神した男に見向きもせず振り向くと奥寺は咄嗟に身構えて焦りを隠す為に作り笑いをした。

「つ……ふ、不意を突くのは中々上手いが「アンタに聞いてない」は?」

奥寺は言葉の意味が分からず少し呆けたが直ぐに理解し、後ろを見て尋常じゃない量の汗が吹き出し顔を青くさせた。

「か、カツコイイ……」

奥寺の事を伯父さんと呼んでいた女が同じように後ろを見て無意識の内に言葉が出た。

「ね、ねえ伯父さん。あのカツコイイ人……は？」

カツコイイ人に見惚れて気が付かなかつた奥寺の様子にようやく気が付き女は言いようのない不安に襲われた。

「寒気はしますが熱くはなりません。陸奥とは真逆な感じがすると云つた所でしようか」

少年はその言葉を聞いて笑みを浮かべた。

「そこまで言い当てるとは、さすが片山右京さん。本当に天才と呼ぶに相応しい人だ」

片山右京、天才の名を欲しいままにした男は女性ですら憧れる綺麗な顔に菩薩のような柔らかな笑みを浮かべていた。

「まさかとは思いますが今ここで——戦る——なんて、言わないですよね？」

そう云つた少年の顔は何も無く、どっちでもいと言っているようなモノだった。

「ええ、館長の頼みで元N.O. 2の処理をしに来ただけなんですよ」

片山が視線を少年から若干横に移すと奥寺は身体を硬直させた。

「まったく落ちぶれたモノですね奥寺さん。陸奥に負けてからですか？」

「うっ……っ！」

片山がゆっくりと奥寺に近付くと奥寺は耐え切れず片山から逃げ出した。

「ちよ!?!お、伯父さ——!?!」

既に女の声も聞こえてないのか必死の形相で逃げる——少年と少女が居る方向に。

「邪魔だ!どけえっ!!」

そう、進路にいた少女を突き飛ばして——

「っ——ろす」

突き飛ばされた少女を片山が受け止めるのを視界に収めながら、少年はわざと奥寺の進路を潰すように立った。

「どけって言うてんだろ!!」

奥寺は走りながら右拳を振りかぶり繰り出した。

少年は紙一重で避け懐に入ると同時に右拳を頭の上に構え身体ごと構えた拳を奥寺の顎に叩きつけた。

「るぎゅっ!?!」

奥寺の顎は砕けて陥没し身体が浮き上がり、既に意識がない状態だが少年は止まらなかつた。

奥寺がまだ浮き上がっている状態で奥寺の繰り出した右手を取って投げた。

奥寺が浮き上がっていた分、更に高い所から落ち地面に付く前に少年自身も膝を曲げ二人分の勢いでコンクリートの地面に顔から叩きつけた。

「へえ、まだ息があるなんてな。腐つても元No. 2つて所か……」

少年が止めを刺そうとする前に片山が少年の肩に手を置いた。

「すまない、コイツは私に任せてあの子の所に行つてくれ」

少年は数秒だけ止まった後、突き飛ばされた少女の所に向かった。

「大丈夫？ 何処か痛い所とか……」

座り込んだままの少女はまだ震えが収まってない手で少年の服を掴んだ。

「なあ、コソコソ逃げようとしてるアンタ等。次に俺達に絡んだらアイツ等と同じ目に会わせるから覚悟してね……」

逃げようとしてた女達は何度も頷きながら必死の体で逃げ出した。

「……立てそうにないか、ほら肩を掴んで」

少年は少女をおんぶして再び家路につこうとした時、片山が声を掛け少年は顔だけを向けた。

「参考までに今の技の名前を教えてくださいませんか？」

「拳を身体ごと突き上げたのを《浮嶽》、その後の投げが雷の変型で《落雷》」

「そうですか、まだ圓明流を継ぐ者がいたとは……道理で寒気がする訳だ」

少年は前を向いて歩き出した。

「使っているだけ……継げはしない」

その言葉は誰にも届く事はなかった。

おんぶされたままの少女は家に近付くと静かに口を開いた。

「……山田君、聞いてもいい？」

「何を？」

少女は自分の恐怖を押さえ込み、息を止め、そして吐き出した。

「……山田君は人を……人を殺したことがあるの？」

「あるよ」

「……えっ」

少年があまりに呆気なく言い放ったので少女は言葉を理解するのに時間がかかった。

「それがどうかしたの？」

「え？どうしたのって、罪悪感や……こ……殺してしまった人の顔とか！アナタは苦しん

でないの!？」

少女の声が苦しみで張り裂けそうなモノに変わっていった。

「……やっぱり君は俺とは違う」

少女は言葉の意味が分からなかった。

「君は殺してしまった、俺は殺した。そこに自分の意思が在るか無いかが違うって話」
少年の肩を掴む少女の力が何かを思い出したのか強くなった。

「だから君は罪悪感から色々抱え込んでしまふ、でもソレは恥じることじゃない。君が人である限り正しい姿なんだから」

その言葉を聞いた少女は収まった筈の身体の震えを再び出た。

「で、でも私は逃げたくない。変わりたいの——強くなりたい——」

次第に少女の震えが収まり、声も力が籠ったモノになつていった。

「だから！」「戦うって事は怖い・そして、そこから逃げない事だ。だから朝田さんは大丈夫、戦えてるから」

二人の間から会話が無くなり沈黙が支配して少女の家に到着した。

「それじゃまたあ——」

少年はその続きを言わないで帰ろうとした。

「また明日」

その少年の背に少女が先程の言葉の続きを紡いだ。

「……ありがと」

その言葉はどちらが言ったものかは当人にしか分からない。

デスゲームで出来る事

「色々あつてちよつと遅れたけど始めますか」

時刻は午後三時前、少年は一息ついていた。

茅場明彦から貰ったナーヴギアの説明書を読みキャラブレーションで身体的特徴などを記録してからナーヴギアを被ったままベッドに倒れ込んだ。

「リンク・スタート」

閉じた筈の目に様々な光の群れが飛び込んで流れていき、

最後に《Welcome to Sword Art Online!》という文字が現れて自分の分身であるキャラクター設定画面へと移った。

少年はキャラクターの容姿をキャラブレーションで設定したのをそのまま使う事にした。

このゲームは実際に身体を動かすのと変わらないから・・・とかではなく、設定するのが面倒くさかったただけであるが。

次にプレイヤー名の設定に映った。

「……どうせ、ゲームの中だけだし……」

少年は少し悩んだ後、プレイヤー名を「H u w a」にした。

そして設定の確認ボタンを押すと今度は青い光が視界一杯に溢れて少年を飲み込んだ。
だ。

寝ていた筈のフワの身体は立った状態になり、周りから様々な音が一気に雪崩れ込んだ。
だ。

「……これがゲームの中……」

周囲の景色が中世のヨーロッパ風なモノで多くの人が行き合っている。

一通り周囲を見回した後、ようやくフワが動き出すと何か違和感を感じたのか首を傾げた。

『あれ？身体が重く感じる？まあ、ゲームだし完璧に再現出来る訳じゃないのかも』

フワは感じた違和感を無理やり納得させて何をするか考えていると視界の端をフードを深く被った人が路地裏から飛び出すのを捉えた。

「うあっ!!」

「つとつ!!」

ぶつかかる寸前でフードを被った方が驚きの声を上げ、フワは受け止めるつもりだったがバランスを崩して一緒になって倒れ込んだ。

『今の・・・身体に力を入れたつもりが普段の十分の一も入ってなかった？コレもゲームだからか？』

フワにぶつかって倒れたフードを被った人が頭を掻きながら身体を起こした。

「いやあ、すまないネ。少しはしゃぎ過ぎてて周りが見えてなかったヨ」

声で分かっていたがフードの中には左右の頬に三本ずつヒゲをペイントしてある女の人だった。

「（こちらこそ、本当は受け止めるつもりだったのですがVR体験自体が初めてなモノで上手く動く事が出来なくて」

フワも身体を起こしながら答えるとヒゲをペイントした女の方が更にすまなさそうにした。

「あちゃー、ホントのビギナーに酷い事したナ。お詫びにオネーサンがこのゲームについて教えてあげるけど、どうすル？ちなみに初回サービスだから次からはしっかりお代は頂くことになるヨ」

フワにとっては願ってもない事だったのでアッサリと提案を受け入れた。

「ありがとうございます。山ほど聞きたい事があるので広場の座れる所にも行きませんか？」

そう答えながら立ちあがったフワは座ったままの女の人に手を差し出した。

「ニヤハハ、上手い事返すじゃないカ。今回だけダゾ」

女の人は笑いながらフワの手を取って立ちあがった。

「はい、俺のプレイヤー名はフワです」

「オレツちはアルゴ、鼠のアルゴって呼ばれている情報屋ダヨ。サービスとはいえ情報をタダで教えるんだ、これから御贖罪にしてくれヨ」

もちろんです。フワはそう言いながら座れる場所を探した。

かれこれ二時間近く話しただろうか、フワはこのSAOというゲームの基本的な部分どころかボスの隠しデータまでも得ていた。

「ありがとうございます。これで大体聞きたい事は聞けたかと」

「よ、ようやく終わつた。タダで教えると言った過去の自分の首を絞めたくなつたヨ」

フワは笑いながらアルゴに向かって指を一本立てた。

「俺へ貸しを作つたと思つて下さい。いつか必ず返しますから」

「期待して待つてるヨ、オレツち将来性がある少年は好きダゾ」

そう言つて別れる寸前、周りのプレイヤー達が悲鳴を上げると次々と光に包まれて消えていった。

「これは転移する時の光ダヨ！一体なにが」

アルゴが話している途中で光に包まれると何処かに消え、次にフワも同じように光に包まれると見覚えのある広場へと移動していた。

「……………」

フワの目の前には両手の指を突き合わせてモジモジしているアルゴが居た。

「焦った割には2、3メートル位しか移動しませんでしたね」

「耐え切れなくなったのか真つ赤になった顔を両手で覆った。

「言うなヨ！凄く恥ずかしいンダ！忘れようと必死なんだからナ!!」

周りのプレイヤー達が不安や恐怖で騒ぐ中、この2人だけは何かが違った。

「え？今、ログアウト出来ないって聞こえませんでしたか？」

赤くなった顔を両手で隠しているアルゴにフワが懐疑的な声色で聞いた。

「なっ、何だって？そんなバカな話がある訳—— ホントにない——」

「なるほど、だから周りの奴等は何かに怯えているのか」

あのままだと取り乱しかけたアルゴは周りから浮くフワの落ち着きようを見て落ち着きを取り戻した。

「ず、随分落ち着いているんだナ」

「ん？まあ、大丈夫ですよ。プレイヤー全員を此処に集めたんですからゲームマスター

から何らかの説明があると思いますよ」

アルゴが頷くと上空から血のようなモノが流れ出た後、何かを形作る様に1つに纏まると20メートルはある中が空洞の赤いローブが出来上がった。

「アレは、βテストの時に――」

アルゴの呟きからフワの考えが合っている事が分かる。今から何かしらの説明が入るのだろう。

――プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ――

この言葉からチュートリアル終了までの流れで一体どれくらいの不安を、どれくらいの怒りを、どれくらい絶望を、今ここに居るプレイヤー全員が受けただろうか。

その中でフワは1人だけ、笑みを浮かべていた。

「ああ、これが『これはゲームであっても遊びではない』って意味か」

その笑みはあまりにも獯猛であり、その顔はまさしく修羅と呼ぶに相応しいモノだった。

「大したモノだよ――天才――」

既に200人以上の死者を出しているデスゲームの始まりだった。

チュートリアルが終わり赤いローブが消えた瞬間、広場は阿鼻叫喚の地獄絵図へと変わった。

「あつ」

先程のチュートリアルを信じきれないのか理解しきれなかったのかは分からないが何も言わず立ちつくしているアルゴの手をフワが掴んで広場から引つ張りながら出た。

「しっかりと下さい！これからどうするか考えないと死にますよー！」

フワがアルゴの肩を掴んで強めに揺らすと焦点の合つてなかった目が戻っていった。

「す、すまない……でも、いきなり死ぬなんて言われテ」

「死ぬのが怖いのなら始まりの場所に居ればいい、それは恥じる事じゃない。」

『ま、正直言えば他のプレイヤーが幾ら死んでもいいけど……』

フワの目の前には今にも死にそうな顔をしているアルゴがいた。

『借りがあるこの人の為に精々利用させて貰うか』

「ですが、貴女なら多くのプレイヤーの命を助ける事が出来るかと俺は思っています」

言葉の意味が分かっても納得できないのか何かに怯えた目でフワを見た。

「貴女の持つている情報には死なない為のモノが沢山ある。ソレを多くの人に知らせる事が出来れば多くプレイヤーを救うことが出来る筈だ」

「で、でもどうやって……」

「例えば死なない為の知識や助言を薄いガイドブックなようなモノに纏めて配ればいい」

完全にフワの言葉を理解したのか抜けていた生気が戻っていく。

「そして、それはきつと貴女にしか出来ない事だ。他の誰でもない、SAO内で一番の情報屋である貴女にしか出来ない」と俺は思っています」

全てを聞き終えたアルゴは静かに震えた後、ゆっくりと立ち上がって満面の笑みを浮かべた。

「オネーサン煽てられたら空だって飛べるって事を見せてあげるヨ!!」

アルゴのそんな顔を見てフワは思惑通りだったのか安心したのかは分からないが傍から見れば優しい笑みを浮かべていた。

「アルゴさんは始まりの街で情報収集と持っている情報との差異を探す所ですか?」

「それと元βテスター達を探して一緒にガイドブックを作るつもりだ」

フワの質問に答えたアルゴはやる気に満ちていた。

「そうですか、なら俺は先に進みます。アルゴさんと一緒に居ても邪魔になると思うので」

アルゴは一瞬だけ表情を歪ませたが直ぐに笑みを貼り直した。

「———そうだな、死ぬんじゃないゾ。まだ貸しを返して貰ってないんだからナ」

「ええ、誰かさんから貰った情報があります。そう簡単に死にませんよ」

そう言って踏み出したフワの歩が止まった。

「そういえば、アルゴさんはリアル顔の顔をそのまま使ってたんですね。可愛い顔立ちのまままでホツしました」

茅場明彦のプレゼントにより、広場では女の恰好をしたモヤシみたいな男や服にフリフリをつけた図体がデカイ女が沢山いて見ているだけでも吐き気がする人外魔境になっっていた。

「ナっ!?!」

いきなり容姿の話をされてアルゴは驚いた。何故なら今の容姿がそのままリアルに直結しているのでは仕方がない事だった。

「それじゃ俺は行きますね。ガイドブック作成の為の資金なら幾らでも出しますので頑張ってください」

今度こそ先に進む為に走り出したフワの背にアルゴは顔を赤らめたまま大きな声を掛けた。

「フワっちもカッコいいままでオネーサンうっかり惚れそうになったゾ!!」

フワは振り向きもせず走っていった。

始まりの日

周囲には興奮した4匹のイノシシ《フレンジーボア》が1人のプレイヤーを囲んで何度も突進を繰り返していた。

『この状態を確かアクティブって言うんだっけ』

ビギナーなら確実に死ぬ状況でフワは考え事をしながら四方からの突進を避け続ける。

デスクゲームになり、フワのように満足に動けるプレイヤーがビギナーβテスター問わず何人いるだろうか。

そして、突進方向を巧みに操り同志討ちを誘い、4匹全てのHPを赤くさせるプレイヤーが

『さてと、この身体の調子も分かってきたし・・・「殺すか」

最後だけ声に出したフワはフレンジーボアの突進を必要最低限の動きだけで避けると同時に下腹に蹴りを叩き込んだ。

既に赤くなっていたフレンジーボアのHPはゼロになってポリゴンになって砕け散

り、ポリゴンを掻き分けるように突進した2匹も蹴りを叩き込まれポリゴンとなって砕け散った。

最後の一体だけ残したフワは右逆手に短剣を持って構えた。

「初動のモーションを感じして……こうか！」

短剣ソードスキル《エッジ》短剣の刀身が紫色の光が包み、一拍すると紫色の閃光を残してフレンジーボアとの間合いを詰めて斬り付けた。

当然、フレンジーボアは砕け散り。フワの前にリザルト画面が表示された。

「今のがソードスキルか、モンスター相手には有効かもしれないが対人で使えるのか？」
フワは初めての戦闘に勝利したにも関わらず喜ぶ事もなく身体の調子とソードスキルの考察を始めた。

「スキルの一つに《軽業》を入れたら少しだけ動きやすくなったけど……」

まだ動きずらいのかフワは首を傾げながら考察を続けるが分からないままだった。

「そう言えば上手い人はソードスキルにブーストを掛けられるって言ってたな」

フワはアルゴに教えて貰った情報を思い出しながら次の村へと向かっていった。

その後、フレンジーボアを相手に何十回もソードスキルの練習をしているとレベルが上がった。

「えーと、レベルアップ時のボーナスポイントをステータス値を振り分ける……と」

フワはステータス値を筋力6と敏捷4に振り分けた。

「イノシシの次はオオカミか……」

オオカミ《フラジールウルフ》が3匹フワに跳びかかった。

左方向から跳びかかったフラジールウルフを左肘で叩き落とし、右斜め前からの右拳を下から腹に突き刺して浮かせ、上から跳びかかったのを右足の前蹴りで更に上に弾き返した。

フラジールウルフの鳴き声を聞きながらフワは右拳を下から突き刺し浮かせたフラジールウルフの前足を右手で掴んで投げ、左肘で叩き落としフラジールウルフへと叩きつけた。

重なり合った2匹を足で踏みつけて右手の短剣を2匹とも地面に縫い付けるように突き刺し、左足で突き刺した短剣の柄を踏み込んで固定した。

蹴りあげられHPが3分の2程になったフラジールウルフを見てフワが首を傾げていると喉元目掛けて同じように跳びかかった。

フワは先程と同じように右拳を突き、浮かせたフラジールウルフを右手で掴んで左足を柄から退かすと同時に短剣めがけて叩きつけた。

その一撃で3匹のフラジールウルフは仲良くHPがゼロになり砕け散った。

『さっきのイノシシを蹴った時には4分の1しか減らなかったのに今回は3分の1……』

オオカミの方が体力が低いのか?』

「……あれ?」

フワは考察に一段落ついて短剣を拾う為に辺りを見回すが短剣が見当たらない事に気が付いた。

「まさか、さっきのアレで武器耐久値がゼロになったのか?」

自分のステータス画面を開いて確認すると装備していた短剣の欄が消えていた。

「……早く次の村に向かおう」

午後6時25分

あの後フワは《ホルンカ》という村に着くまでに5回戦闘を行った——武器無しで。フワは5回で済んで良かったと考えているが何処か間違っている気がする。

「とりあえず、新しい短剣が要るし武器屋を——」

辺りを見回すフワの視界に茶革のハーフコートを着た少年が入った。

少年もフワに気が付いたのか2人の視線が合わさった。

「えーと、武器屋の場所を教えてくださいませんか?」

フワは近づきながら少年に話しかけた。

「え?あ、アンタ……ピギナーなのか?」

少年はフワの質問に驚きながらも逆に質問を返した。

「一応そうだけど、ある情報屋から基本的な事を教えて貰ったから此処まで死なずに来ただけ」

「そ、そうなんだ。こんなに早く誰かが来るとは思わなくて……少なくともβテスターだろうと思ってたから……」

少年は驚きながらも罪悪感を滲ませた顔で何かを思い出していた。

「それで、武器屋の場所と……出来れば金や経験値を稼げるクエストを教えてくださいと助かるんですけど」

「わ、悪い。とりあえず武器屋まで案内しようか？その途中で俺が知ってるクエストを教えるから」

正気に戻った少年の親切な提案にフワは喜んで乗った。

「ありがとう、俺のプレイヤー名はフワって言うんだ」
そう言ってフワは右手を差し出した。

「え？あつ！俺はキリトだ。お礼とか気にしなくていいから」

キリトは差し出されたフワの手を取って握手をした後、2人で武器屋へと向かって歩き出した。

「——えっ!?此処に来る途中で武器が無くなった!？」

武器がない状態のフワに驚いたキリトが大きな声を出した。

「まあ、何度も戦闘してたし……なによりも武器の耐久値を忘れて無茶な使い方した俺が悪い」

フワの言葉を聞いてキリトが顔の前で手を振った。

「いやいや！そんな事に驚いたんじやなくて！よく死なずに此処まで辿り着いたな！」
「いやはや運が良かったよ。武器が壊れた後は殆ど戦ってないし、迷わずに此処まで来れたし」

武器を持ってない状態で5回という数字をキリトが聞いたなら再び大きな声で驚くだろうがフワは本当に運が良かったと考えている。

「そ、そうか。何はともあれフワが死ななかつた事が嬉しいよ俺は」

「……良い奴だなキリトは」

そんなこと無いと言い張るキリトだったが此処ではフワの言うことが正しかった。

武器屋で初期装備の《スモールダガー》より強い《ブロンズダガー》を買おうとしたフワにホルンカ周辺に出る植物モンスターが放つ腐蝕液が耐久値を削り、元の耐久値が《スモールダガー》より低いからお薦めしないとキツチリ教え、フワは《スモールダガー》を2本と回復ポーションや解毒ポーションを買って店を出た。

「なあ、ホントにいいのか？このクエは短剣使いには旨味が少ないと思うんだけど……」

《森の秘薬》というクエストを受けたキリトとフワはクエスト受注場所である民家を出て夜の森へと歩を進めていた。

「元からこの辺でレベル上げするつもりだったし、レベル上げのついでにクエストをやる、報酬の片手剣は売ればそれなりの金になる、旨い事だらけだと考えているんだけど」「た、確かに……それじゃ知ってるかもしれないが確認の為に今から戦う《リトルペネット》について話すから」

助かるとフワは言っただけでキリトからリトルペネットの攻撃方法や弱点、そして特性を教えるまで、一緒に夜の森へと足を踏み入れた。

『なるほど、確かに戦い慣れてるな。特に経験からくる見切りが上手い、確実に避けてから攻撃を当てている』

キリトがまずは俺が戦うから敵の動きとか見て参考にしてくれと言っていたがフワの視線はキリトしか捉えてなかった。

壺のような胴体の下に根が蠢いており左右に長く先が鋭い触手を持つリトルペネットはキリトに攻撃をかすらせる事すらさせず、攻撃後の出来た隙をソードスキルを叩き込まれて碎け散った。

「凄いな、戦い慣れてるから動きに迷いが無い」

「いや、それ程でもないよ。次はフワがやってくれないか？」

もちろんとフワは言つて次のリトルペネントを探し出して対峙した。

「さてと……」

新しく買った《スモールダガー》を右手に構えるとリトルペネントは右の触手を突き出した。

少し離れた間合いで突き出された触手を紙一重で避けながらリトルペネントとの間合いを詰め短剣のソードスキル《ピアース》を発動させ弱点の胴体と茎の境目に突き刺した。

弱点をソードスキルで攻撃されたリトルペネントはHPが半分以上減り、ノックバックで行動が止まった。それはフワのソードスキル後の硬直を十分に補った。

ノックバックから回復したリトルペネントは腐蝕液を吐こうと行動が止まった瞬間、フワは短剣を右逆手に持ち直してソードスキルの《エツジ》を発動させ、出来るだけブーストを掛ける事を意識しながら間合いを詰めて弱点を斬り裂いた。

それでリトルペネントのHPはゼロになって碎け散り、フワは驚いた顔をしているキリトの元に向かった。

「つ、強いんだな。フワが本当にビギナーか疑ってしまう程だ」

「戦闘に慣れてるだけ、真正正銘ビギナーだよ。VR初体験がデスゲームのな」

そう言つて笑みを浮かべたフワをキリトは氣丈に振る舞っているように見えたのか

申し訳なさそうに目を伏せた。

「そ、そうか……すまない」

「なんで謝るんだ？別に気にするようない事でもないだろ」

この2人のズレとも言わべきモノにキリトは気付いていなかった。

2時間後、リトルペネントを狩った数が百を超えた所でフワが溜め息を吐いた。

「まだ一体も出ないとか確率低すぎ……」

「βテスト時で1%位だったけど、正式サービスでは更に低くなってるかも……」

βテストで事前に情報を知っていたキリトでさえ少し疲労が見える。

2人のレベルも一つずつ上がり、フワが3キリトが2になっていた。

「はあ、そろそろ再開する？」

フワは動く為に一息入れてキリトに提案した。

「ああ、俺は大丈夫だけどフワは大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃなかったら言わないって……まあ、その前に——そこに居るの分かってるからコソコソしないで出て来い」

フワが視線を横に移して声を掛けると木々の間から小さな木の盾と片手剣を装備した少年が出て来た。

「ご、ごめん。声を掛けるタイミングを計って……」

「あそ、それで何か用か？」

キリトは驚いていた。申し訳なさそうにする少年に対して余りに素っ気ない態度を取るフワの声色が異常に冷めていた事に。

「《森の秘薬》ってクエストの途中だよ。僕も一緒に狩りをしてもいいかな？」

「それは俺じゃなくてキリトに聞いてくれ」

フワがキリトに目をやった。

「え、俺は別に構わないけど……」

「だとよ、良かったな」

フワは素っ気ない態度のまま、次のリトルペネントへと襲い掛かった。

「僕はコペル。ありがとう、入れてくれて」

「キリトだ、別に気にしなくていいから」

名前を教え合い、コペルが戦っているフワに聞こえないような声でキリトに話しかけた。

「あの人は一体……？」

「名前はフワ、一応ビキナー」

その言葉を聞いてコペルの目が見開いた。

「び、ビキナー？ 下手な冗談は止めてくれよ。あの戦い振りでビキナーなんて……」

コペルの視線の先には3対1でも危なげなく一つずつ倒しているフワの姿があった。
「でも、本人がビキナーだって……」

キリト自身もフワがビキナーとは思えないと考えていた。

「……気を付けた方がいいかも」

「な、何を？」

キリトは何かが分かっていたが聞き返さずにはいられなかった。

「彼がビキナーだと嘘を吐いている理由だよ」

キリトは息苦しさを感しながらも否定を口にした。

「そ、そんな嘘を吐くメリットがないぞ」

「……例えば、無知の振りをして《実付き》を攻撃して自分だけは逃げたり……」
リトルペネントを使ったMPK《モンスター・プレイヤー・キラ》を想像したキリトは更に息苦しさを感じた。

「何をしてるんだ？早くしないと終わらないぞ」

更に2体増え、計5体になったリトルペネントを狩りながらもフワはダメージを負っているようには見えず、キリトは不安が現実のモノになる嫌な予感がしていた。

「これは厄介だな、どうするキリト？」

フワがそう呟くのも無理はなかった。

左右に別れてはいるが左に5体のリトルペネント、右に4体のリトルペネントが付かず離れずの距離でいるからだ。

「しかも左には花付きと実付きが一体ずつ……俺とコペルが実付きの実を割らないように花付きの一団と戦うからフワは4体の方を頼んでもいいか？」

片方から襲うと下手をすると背後を突かれるかもしれないからキリトの提案は間違っていないかった。

だが、左の4体を3人でなら背後を突かれる前に倒し切る事も不可能じゃなかったが、キリトはフワに実付きの相手をさせる事が不安になったのだ。

「……分かった。ただ、最初に実を手に入れるのはキリトだ。アンタもソレでいいな」
フワの言葉にもちろんとコペル頷き、二手に別れた。

「僕が実付きを引き付けるからキリトは花付きを頼む！」

コペルが盾を構えて実付きのタゲを取ったのを見てキリトは花付きへと向かった。

「セイヤアツ！」

リトルペネントが5体から3体に減り、キリトは気合いを入れた片手直剣の《ホリゾンタル》で花付きを弱点を斬り付けてポリゴンの欠片へと変えた。

「よし！花付きを倒したぞ！今すぐ実付きを後ろから——」

キリトが言い切る前に何かが破裂する音が響いた。

「なんで――」

音の正体はコペルが実を割った音。リトルペネントの実は言わばトラップ、割れた実の匂いに誘われて大量のリトルペネントがポップする。

コペルが言ったMPKをコペル自身が行ったのだ。キリトが何かを言う前に隠匿のスキルを使つてコペルの姿が消えた。

『そうか、そういう事だったのか……』

キリトは全てを理解した。最初にコペルに気が付いたフワは俺よりもレベルが高かったから索敵でコペルの隠蔽を見破ったんだ。

でも、それだけじゃ疑いを口に出せずに素っ気ない態度を取っていた。コペルがぼろを出すと思つて――

その時、キリトに雷が落ちたようにハツとした。

「ふ……わ……フワアアアツ!!」

それは絶叫と呼ぶに相応しいモノだった。

カーソルにリトルペネントを表す赤い点が数え切れないほど表示されていてフワを表す点が埋もれていた。

「アアアアアアアアツ!!!」

リトルペネントの群れを突つ切ろうと絶叫を上げながら突つ込んだ。

『俺のせいだ！俺のせいだ！俺のせいだ！俺のせいだ！俺のせいだ！』

キリトは正気でいられなかった。自分のせいで人が死ぬ——いや、自分が殺したにも等しい状況に——

四方を囲まれている事にも気付かずに前に進むキリトの目の前に並んでいたリトルペネント達が横に吹き飛んだ。

「生きてるよ！キリトも半分死にかけてるけど無事だな！」

こんな状況なのにフワは嬉しそうに愉しそうに笑っていた。

「ふ、フワ……」

フワの姿を見て呆けているキリトの横をフワが駆け抜けて、キリトの背後に忍び寄っていたリトルペネントを攻撃した。

「どうした？半分死にかけると怖くて動けなくなったか？」

フワの挑発的な言葉にキリトは正気に戻った。

「たかがHPが半分になったただけだ！こんな事で怖じけづくか！」

「なら、早いとこ終わらせようか！」

フワが《エッジ》でリトルペネントのツタを斬り落とす

「ああ！」

キリトが《ホリゾンタル》でリトルペネントの弱点を斬り付けて倒した。

「ところで、さっきはどうやってリトルペネントを吹き飛ばしたんだ？」

「別に難しい事じゃない」

フワはそう言つて短剣を腰に仕舞い、突き出されたツタを避けてから両手で掴んだ。

「キリト！伏せろ！」

「な、なるほど……」

キリトが感心しながら伏せると頭上をリトルペネントが通り過ぎた。

「うおりゃああ！いつけえっ！」

ツタを掴んだフワはジャイアントスイングのようにリトルペネントを振り回してから他のリトルペネント目掛けて投げた。

先程と同じように何体かのリトルペネントが吹き飛んだ。

「こんな方法があるとは、ゲームマーじゃ思い付きもしないだろうな」

こんな自由な方法を思い付く時点でゲームをやった事がない証拠だ。

「ごめん、疑つてた」

「何が？どうでもいいから早く狩らないか？数だけ多いせいで気持ち悪いつたらないんだけど」

キリトは同意しながらフワと一緒に次のリトルペネントへと向かった。

全てのリトルペネントを倒すまで1時間弱、キリトの体感では2時間もしくは30分

と、時間感覚が曖昧になっていた。

視界に映る全てがスローモーションに見える中、剣と身体が一体化し、更に更にと加速していく思考と動き。

そして、自分に遅れる事なく——いや、自分に合わせながら徐々に速度を上げて更に高みへと導いてくれるフワの存在。

命が懸かっている状況な筈なのに、今まで生きてきた中で一番充実しているのを実感していた。

だから、目標という名の欲が生まれた。この戦闘が終われば終わる感覚を——再び味わう——そんな狂人めいた欲が。

「これで終わり。まさか花付きが2体も出るとは思わなかった」

そんなフワの言葉が聞こえてキリトの高ぶっていた気分が沈んだ。

「俺のせいで危ない目に会わせて「謝らなくていいぞ」

キリトが謝罪を口にする前にフワは言葉を被せた。

「相談してただけで実付きは割るつもりだったんだ。俺とキリトなら捌けると思ってたし」

「実付きのトラップを知っていたのか!？」

キリトの言葉にフワは呆れながら答えた。

「キリト、お前が俺にリトルペネントの特性について教えたんだろ……」
「あつ……そういえば教えてた……」

今更ながら思い出した事にキリトは一気に疲れがのしかかって来た。

「……視界が無いリトルペネントに隠蔽は無意味。そして30分程前に聞こえてきたポリゴンの爆散音から考えると……」

その続きを言う必要は無い。キリトも既に分かっている事だった。が――

「既に死んでるか――」

フワは何の感慨もなく言い切った。

あまりに呆気なくフワは言い放ち、キリトは頭が真つ白になった。

「りと――きり――おい――キリト!」

フワが怪訝そうな顔をしながらキリトの名を呼びながら顔を覗き込んでいた。

「本当に死にかけたせいで気分が悪くなったのか? それなら先にクエストクリアしてくればいい」

キリトは意識がハッキリしないままフワに連れられて村の近くへと来ていた中、フワの言葉に驚きながら答えた。

「そ、その言い方だとフワはまだ戦うつもりなのか?」

「まあな、もうすぐでレベルが上がりそうなんだよ。それにキリトの武器は限界だろ?

俺はもう一本あるから続けるよ」

キリトは自分の握った《スモールソード》が消耗している事に気付いた。

「そ、そうだな。すぐに替えて来るから少しの間待っててくれ」

キリトもレベル上げの続きをするつもり——という訳ではなく、ただ一人になるのが怖かっただけ。

デスゲームが始まったばかりで、騙されて殺されかけたとはいえ言葉を交わした人が一人死んでしまった。こんな狂ってしまった世界で一人になってしまいう事が。

「……もう、今日は休んだ方がいい。生き死にの世界になつたばかりで精神的な疲れが分かっていない。そんな状態だと死ぬだけだ」

キリトは頭では理解しながらも否定を口にした。

「その言い方だとフワは生き死にの世界に慣れてるみたいなの言い方じゃないか」

「ああ、慣れてる。だから経験者としての助言だ。別に意地悪で言ってる訳じゃない。まだキリトが死ぬには早過ぎると思ってるからだ」

その言葉にキリトは否定を口に出せず、静かにフワにフレンド登録の申請を出した。

「そういえば、フレンドがあつたな。アルゴさんともフレンド登録しておけば良かった」

フワは聞き覚えのある名前を口に出しながらフレンド登録をしてくれた。

「……フワもあんまり無茶し過ぎるなよ」

キリトは既に疲れを感じ始めているのか反応が鈍いまま村へと戻って行った。

「もう一つ経験者としての助言だ。戦うって事は怖いって事だ。そして、そこから逃げないって事だ」

キリトは意識が朦朧としている中でもフワの言葉が頭に響いた。

「逃げてもいい。だが、恐怖から逃げたまま戦うな」

そして月明かりが照らす中、フワは貰った情報通り《ラージペメント》がいる森へと足を伸ばした。

獣人の王

2022年12月2日

「キギャット！」

鎧を着た半獣人型モンスター《ルイン・コボルド・ランサー》が甲高い声を出しながら槍をフワの胸へと突き出した。

フワは突き出されている槍の柄を右手で横から掴んで左へ逸らしながら半身にして引つ張り前に出たコボルドランサーの喉元へ右足で横蹴りを放った。

「グゲエツ!？」

コボルドランサーは弱点の鎧の隙間の喉元をカウンターで蹴られHPが半分以上削られて苦痛の声を上げるが手にした槍は離さなかった。

「獲物を離さないとは……」

フワは感心しながら柄を左手に持ち直して後ろに投げ捨てるように引つ張りながら前へと出た。コボルドランサーも槍を引つ張られた事によりバランスを崩しながら前に出た。

必然的に二人の間合いが詰まり、コボルドランサーがバランスを取るために頭を下げた瞬間、計ったようにフワの左膝がコボルドランサーの喉元へと突き刺さった。

衝撃で跳ね上がるコボルドランサーの上半身、そして跳ね上がったせいでさらけ出された弱点に間髪入れず二段蹴りの二段目の右足が突き刺さりポリゴンの破片へと爆散した。

「たいした根性だったよ」

フワは何処か賞賛するような声を出しながら更に迷宮の奥へと歩を進めた。

デスクゲーム開始から約一ヶ月、外部からの干渉は一切無く、死者は1000を超え、第一層すらクリアされてなかった。

それでもデスクゲームは続いていた。

「第一層が一番広いとは聞いてたけど、予想以上に広い……」

フワはうんざりしながら歩いていると先に拓けた場所と大きな扉が視界に入った。

「もしかしなくても、この扉の先がボス部屋か。とりあえず、マップデータをアルゴさんへと送って……っつと」

フワはアイテムストレージを開いて空を確認するとボス部屋の扉へと手を伸ばした。

ピコンと軽快な音が響きフワの手が扉に触れる寸前でアルゴからメッセージが届い

うっわあああつとフワが叫んだのは仕方がない事だった。

30分後

一通り説教が終わるとアルゴは呆れていた。

「まったく、ソロでボスに挑もうなんて正気を疑うヨ」

「でも、ボスは部屋にいる人数に応じてHPが変わるってアルゴさんが言っていましたよね？」

フワの言葉にアルゴは感情を押し殺す様に答えた。

「確かにβテスト時に検証した結果、ボス部屋にいる人数に応じてボスのHPの増減を確認したヨ。だが！」

「変わるのにはHPだけですよね」

爆発しかけた感情をフワの言葉が遮った。

「そうだ・・・ボスの攻撃の威力も速度もAIのアルゴリズムでさえ何も変わらない。それどころか取り巻きにいたってはHPすらも変わらない」

「知ってます。それもアルゴさんから教えて貰いました」

アルゴの押さえこまれた感情が沸々と湧き上がっていく。

「それに！ソロだと回復も碌に出来ない！不測の事態に陥ったら誰もフォローしてくれない！！明らかにソロの方が厳しいなんて分かっている筈だ！！」

「でしようね。1人なんですから」

あまりに淡々としたフワの声色にアルゴの感情が反転して寒気を与えた。

「……ふ、フワっちは死にたいのか？」

ゲームの中で感じる筈の無い口渴感を感じながらアルゴは聞かずに居られなかった。

「別に死にたいとは思ってませんよ」

「そう、当たり前前の事を口にした筈なのに、自分が望んでいた言葉を言った筈なのに、アルゴは言いようのない不安を感じていた。

「な、ならどうし」「どうしてアルゴさんは俺に気を掛けてくれるんですか？」

本当に分からないと言った顔をしたフワにアルゴは固まってしまった。

「デスクゲーム開始から1週間後にガイドブックを作る為の資金として約5万コルを渡しましたよね。それで借りは返したと思ってたんですけど……いや、情報の価値としてはまだ足りないのかも……」

勝手に納得しているフワを見て、アルゴの感情が再び反転した。

「死ぬかもしれないからダ!!自分の目の前で死地に行こうとしているフレンドを止めない訳ないダロ!!」

「……そうですか、確かに知り合いが目の前で死なれるのは気分の良いモノじゃないですね」

フワの納得したような顔を見てアルゴはようやく通じたのかと思いきや息を吐いた。

「クリアを急ぐ気持ちは分かるが心配しなくても、ボス部屋が見つかった事をリーダー性があるプレイヤーに知らせれば夕方にも攻略会議が開かれて次の日にはレイドでボス部屋の攻略が始まるヨ」

「……次の日までに新しいガイドブックを出しますか？」

アルゴの言葉を聞いてフワは少し考えてから言葉を口にした。

「あ、ああ。βテスト時になるけど一層のボスの情報を纏めたモノを作るつもりだが……」

アルゴは急速に膨らんでいく不安、言い換えれば嫌な予感がした。

「偵察と言う事でボス部屋に入りませんか？もしかしたらβテストと正式サービスじゃ大きな違いがあるかも知れませんか」

アレだけ言ったのにコイツはまだ納得してなかったのかと頭に血を昇らせるとフワが言葉を続けた。

「情報は出来る限り正確に、その違いで誰かが死んでしまうかも知れませんか」

アルゴの昇った血が一気に冷めた。そうだ、たかが情報、されど情報、出来るだけ正

確に伝えなければならぬモノと気が付き沈黙してしまった。

「何も死ぬまで戦うつもりはありません。アルゴさんは扉付近で待機してボスと取り巻きの観察、そしてアルゴさんのタイミミングで撤退します。これなら大丈夫でしょ？」

具体的にどうするかすら決めていないが思考が鈍っている今のアルゴでは正常な判断が出来なかった。

「それじゃ、始めますか」

後は流される様に2人は扉の前に立ち、一歩前に出たフワが扉を押し開けた。

ボス部屋はβテスト時と同じで左右20メートル奥行きが100メートル程の長方形で奥に進んでいくに連れて松明に光が灯っていき、一番奥に粗悪で巨大な玉座があり何かが座っていた。

「βテストじゃ部屋の中程まで行くと玉座からボスが飛び出して戦闘開始、ボスと接敵すると取り巻きの《ルイン・コボルト・センチネル》が三体ポップする筈だ。ボスのHPバーが一本無くなる度に再び三体ポップされる。そしてボスのHPバーが最後の一本になると武器を換える……もちろん最後のを確認する前に撤退するぞ」

部屋に入って20メートル程でアルゴの情報を全て聞いたフワは頷いた。

「分かりました。言った通り撤退のタイミミングはアルゴさんに任せますので声を掛けて下さい」

そう言ってフワは一気に走り出した。

部屋の中程を越えると玉座に座っていた何か跳んで地響きを立てながら着地した。

「グリアアアアッ!!」

2メートルを越える赤い身体を震わせながら咆哮を上げた獣人の王《イルファング・ザ・コボルドロード》

演出なのか威嚇の為の咆哮かは分からないがフワは咆哮を全く気にせず更に加速して短剣を右逆手に持ち《エッジ》を発動させて不意打ち気味に右膝を斬り付けた。

ファーストアタックなのか本当に不意を突かれたのかは定かではないがコボルドロードはバランスを崩して右足を地に着けた。

「さあ、失望だけはさせてくれるなよ。獣人の王とやら」

コボルドロードが膝を着いた事で目線の高さが同じになったフワは壮絶な笑みを浮かべながら獣人の王を嗤った。

10分後

ボスのHPバーが一本なくなり次の取り巻きがポップされた。

本来なら取り巻きの再ポップが確認された時点で撤退すべきなのだがアルゴは取り巻きの再ポップすら眼中に無かった。

見惚れていたのだ。フワの戦いぶりに――ボスと取り巻きを含めて計4体からの

攻撃を紙一重で避け同志討ちを誘いながら3分で取り巻きを片づけるとボスとの一騎討ちでの戦いは更に一方的なモノになった。

ボスの武器である骨を削って作った巨大な斧を右手に、人が持つとタワシールドと呼びそうなバックラーを左手にして片手斧スキルを連発しているが一度もフワに当てていない。

確かに一度でも当てられたら死に直結するので避ける事は当たり前なのだが避け方が尋常じゃなかった。

ギリギリまで引きつけて避けると同時に踏みこんで斬り付ける。ボスが攻撃している筈なのにボスの体力がガリガリと削られていった。

そして再び取り巻きを含め4対1へと変わったがアルゴは声を出す事が出来なかった。

「キギイツー！」

フワの背後から取り巻きの内の一体がハルバードを腰に構えて突いた。

フワは後ろを見ずに回転しながら避けてセンチネルとの間合いを詰めて右手で頭部を掴み引き込みながら喉元に膝を叩き込んだ。

弱点を攻撃されノックバックで身を丸めたセンチネルを追撃せず、跳んでセンチネルの肩に乗った。

「グオオオオッ!!」

駆け寄る取り巻きごと薙ぎ払うつもりなのか、コボルドロードは憤怒に塗れた雄叫びを上げながら両手斧スキルの筈の《ワール・ウインド》を片手で放った。

取り巻きは全員巻き込まれ駆け寄っていた2体が吹き飛び、フワを攻撃していた1体は胴から真つ二つになって爆散した。

その中にフワの姿は無く、コボルドロードが視線を上げると空中で上下逆さになった状態のフワがコボルドロードに襲いかかった。

ソードスキルの技後硬直で動けないコボルドロードの顔、胸、腹と落下までに3回斬り付けて着地と同時に股の下をくぐり抜けながら右膝を斬り付けた。

技後硬直から解けたコボルドロードは振り向きざまに斧を振るうが当たる事は無く、再び出来た隙に斬り付けられてHPバーを削られていった。

「つまらないな」

フワは戦闘を始めた頃の笑みが消えており、心底つまらなさそうな顔をしながら呟いた。

小さく、アルゴには聞こえない程の声だったが獣人の王には聞こえた。

所詮データでありプログラムである筈の獣人の王は怒りに震え咆哮を上げながら再び斧を振るった。

アルゴは再び始まった一方的な戦いに見惚れていると何かが視界の端に移ると強烈

なノックバックが身体を貫き弾き飛ばされた。

「つくはあつ!?!い、一体何が・・・?!」

混乱する頭でなんとか今の何が何かを理解することが出来た。先程のボスの攻撃で弾き飛ばされた2体のセンチネルが自分に襲いかかった事を。

「ゆ、油断し過ぎタ。フワっちに任せきりにしてた罰かもナ・・・」

ボーナスポイントを耐久値に3敏捷値に7に振っていたアルゴはクリティカルヒットの一発でHPの半分を削られた。

「せめて一体くらい。フワっちの邪魔にならないように・・・」

静かに死んでやる。そう思いながらアルゴは愛用のダガーを構えた。

「……が限界か」

そんなアルゴの様子をしっかりと見ていたフワにコボルドロードは斧を握った右手を左へと引き絞りソードスキルを発動させた。

同じようにフワはバックステップで避けてからコボルドロードの懐へと入るがソードスキルはまだ終わっていないかった。

《ツイン・スラスト》コボルドロードが発動させたソードスキルであり、名前通り2連撃のスキル。単発のソードスキルばかり使い行動をワンパターン化させてAIとは思えないほどの狡猾な罠を張っていた。

獯猛な笑みを浮かべるコボルドロードの前でフワが一気に加速した。

《ツイン・スラスト》は左に引き絞った一撃目から左足を軸に一回転して二撃目を放つ、そして一回転した後で踏み込めるように右足は宙に浮いている。

その右足の着地する寸前目掛けてフワは《ピアース》を放った。

フワも最初の一撃以降ソードスキルを使わず、コボルドロードのアルゴリズムを一定にさせて突然の加速に対応させずにしていた。

狙いすました一撃がコボルドロードの右足に突き刺さり、コボルドロードは完全にバランスを崩し《ツイン・スラスト》はキャンセルされバッドステータスの《転倒》に陥った。

そんな状態のコボルドロードに見抜きもせず走り抜けたフワは跳び上がり、アルゴを襲っているハルバートを持ったセンチネルの後頭部へと右足での跳び蹴りを叩き込んだ。

コボルドロードの一撃を受けて既にHPが赤くなっていたセンチネルは爆散した。

仲間がやられた事に驚いたのかターゲットをフワに変えた瞬間、アルゴの《ピアース》が弱点の喉元に突き刺さり同じく爆散した。

「な、なんで「いいから撤退しますよ！走って下さい!!」お、おう!!」

2人して開き放しの扉に向けて走っていると背後からコボルドロードの咆哮が背

を撃つが2人は止まらなかつた。

コボルドロードが《転倒》から回復した時には既にボス部屋から出て扉が閉まりかけていた。

コボルドロードのHPバーは三本目に突入していて背後には新たな取り巻きがポツポツしている中でコボルドロードは一際大きな咆哮を上げた。

閉まりかけている扉から見える自分をコケにしたプレイヤーの姿を目に焼き付けるようにフワを睨みつけながら。

扉が閉まるまでの間、フワはボスと目を合わせていた。

『ここからでも分かる。憤怒に染まった殺気……ホントに良く出来たゲームだよ』

フワは獣人の王ではなく、この世界に対して感心していた。

フワは殺気を自覚しながらも、殺気を出している獣人の王は眼中に無く、創造主の茅場明彦を見ていた。

扉が完全に閉まるとフワは一息ついてから地面に座り込んで息を荒げているアルゴへと向き直った。

「アルゴさん大丈夫ですか？とりあえず回復を――」

フワはストレージからポーションを取り出してアルゴへと差し出したが、アルゴは微動だにせずに眩き始めた。

「……すまナイ、ソロなら倒せてたかもしれないのに……」

アルゴは後悔していた。あの時に自分が油断しなければと、扉付近で待つていなかったこと、一番始めにソロで挑もうとしていたフワを止めた事に――

「気にしなくていいですよ。むしろ倒さなくて良かったのかもしれないし」

「慰めにしても適当なこと言うナヨ、クリアするなら出来る限り早い方がいいダロ」

アルゴはフワの言葉を鼻で笑った。

「だからこそですよ。誰も彼もが訳も分からない内に第一層がクリアされました。なんて言ったらどうなると思いますか？」

「どうなるって……」

アルゴはどうなるか考える為に言われた状況に自分を当てはめてみた。

「どうしてクリアされたのかを調べるヨ」

その答えにフワは笑みを浮かべるが首を横に振った。

「それはアルゴさんだからです。その他大勢はどうなると思いますか？」

アルゴは少し考えた後、ハツとして顔を上げた。

「プレイヤーが何もなくてもゲームがクリアされると思う……」

「正解です。確かに始まりの街で引き籠っている人達は何も変わらないかもしれませんが、他は別です。今まさに最前線で攻略している人達や、その人達をサポートしたい

「と知っている人達までも……」

アルゴに答えを言わせる為にフワは言葉を途切れさせた。

「……何もしなくなるかもしれないナイ……」

そうなった時の事を想像してしまったのか、アルゴは微かに震えながら答えを口にした。

「もちろん全員が、とは言いませんが確実に攻略する人は減ります。その結果、相対的にゲームがクリアされるまでの時間が増えます」

話の結論を出す為にフワが一拍置いた。

「だから今はボスを倒さなくて良かった、と言ったんですよ」

そう言いながらフワは再びポジションをアルゴに差し出した。

「そうか……この場では間違っていたかもしれないが、全体からみれば間違っていないかったんだな」

アルゴはホンの少しだけ笑顔を浮かべながら差し出されたポジションを受け取った。

「それに今ボスを倒してしまつたらアルゴさんが皆に知らせるじゃないですか。そうなれば俺一人に押し付けられるかも……考えただけでも面倒で吐き気がしますよ」

フワは勘弁してくれと言わんばかりに舌を出して惚けた。

「確かに押し付けられるかも——ぶおあつ!!?」

アルゴは話しながらフワから貰ったポーシオンを口にした瞬間、口の中で一か月放置して腐りきった青汁みたいな味や匂いが炸裂して驚きと共に吹き出した。

「ど、どうしたんですか!?!まるで腐った牛乳を飲んだみたいな――」

アルゴは身体を震わせながら右手に握ったポーシオンのステータスを表示させてフワの目の前に出した。

「?・・・消費期限11月12日・・・そういえば、始まりの日で買ってから一回も使っていない、必然的に新しく買ってもないから・・・」

フワが恐る恐るアルゴの顔へと視線を向けると、口直しの為に自分のポーシオンを口に啜えながら般若のような顔になっていた。

フワは謝罪を言いながら逃げ出し、アルゴはポーシオンの瓶を噛み砕き怒りの言葉を叫びながら追いかけた。

同じ世界で（前）

2022年12月3日16時5分

トールバーナの噴水広場に40人弱のプレイヤー達が集まっていた。

その中でフワは辺りを見渡しながら満足そうに笑みを浮かべた。

「……さすがアルゴさん。ほぼ全員が攻略本を手にしてるよ」

今日の朝に無料配布された《アルゴの攻略本》の最新版に全てのプレイヤーが驚愕した。

《遂に第1層のボス部屋を発見!!今日の午後4時からトールバーナ噴水広場で攻略会議が!!》

デスゲームが始まった時とは違い、何処か希望が見えるモノだった。

「はーい!5分遅れたけど始めさせて貰いまーす!皆もう少し前に来てくれないか!」

明るい雰囲気の出した男はウェーブが掛かった青い髪で普段ゲームをしなさない感じがイケメンだった。

「今日の攻略会議に参加してくれてありがとう！俺は《ディアベル》職業は気持ち的に《ナイト》やってます！」

場に笑いが出て一部のノリの良い奴等が騒ぎ始める。ディアベルは言うだけあり、身体の各所をブロンズ系の防具で固めており、左腰には大振りの直剣、背に剣の絵が描かれた盾を背負っていた。

容姿の良さも相まってナイトと言っても違和感をあまり感じない。

「……今日、俺達のパーティが第一層のボス部屋を発見した」

真剣な声で話し始めたディアベルに誰もが真剣に話を聞いていた。

『ふーん、たしかに人を惹き付ける言葉の選択に雰囲気を持つている奴だけど……』
「始まりの街で待っている人達に希望を見せようと言っているディアベルの言葉を聞き流しながらフワはディアベルを見極めていた。

『大して強くないか……どうでもいいな』

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

そう結論づけるとフワは興味なさそうに目を閉じると耳障りな濁声が耳についた。

「わいは《キバオウ》つてもんや、こいつだけは言わして貰わんと仲間ごっこは出来へんな」

「キバオウさん、言いたい事とは何かな？」

そう言って言葉が続くたびに怒りで顔を赤くさせていたキバオウを見下す様にフワは嗤っていた。

「つの糞ガキイ！何が可笑しいねん！いつペン言ってみい!!」

「じゃあ言つてやるよ。アンタは死んでいった1000人に対して何かしたのか?」

フワの言葉は噴水広場を完全に凍り付かせた。例外なく、キバオウさえも――

「ほら、何も言えない。そんな事だと思ったよ、アンタ口だけで何も出来ない小物臭がしてるんだよな」

フワの言葉に凍り付いたキバオウはハツとして声を荒げた。

「お前も何もしてへん癖に勝手な事言うな!!」

「アンタと一緒にするな吐き気がするだろ。コレ、此処にいる全員が持つてるよな《アルゴの攻略本》を」

フワは手にした攻略本を全員に見えるように掲げた。

「デスゲーム開始から一週間で様々な場所で無料配布されていただろ?この攻略本が無ければ死者は倍になっていた筈だ。」

全員が頷く中、何人かが驚いていた。

「デスゲーム開始から一週間で5万コル、この攻略本を作る資金として情報屋のアルゴに渡した」

誰かが小さく5万と呟いた。

「そ、そんな話っ誰が信じるかあつ！出鱈目ばかり言うトンちやうぞ!!」

「出鱈目ねえ、アンタこの本を作るのにお金が掛かってないと本気で思ってるの？」

「そつちやない!!一週間で5万も信じられへんし！何よりお前が金を出した事が信じられへんつて言つとるんじゃ!!」

キバオウは汗を掻きながら否定の言葉を口に出した。

「初版本と今回の最新本には載せているつて言つてたつて、裏表紙に著者が書いてあるだろ」

広場にいる全員が慌てて取り出した本の裏表紙を見ると著者の欄にアルゴの名前と、その横にフワの文字が書かれていた。

「察しの通り、俺のプレイヤー名はフワだ。これで納得して貰えましたか？小物さん」

フワはそう言つて優しい笑みを浮かべながらキバオウに近づいた。

「ちなみに俺はビギナーだ。だからこそアンタと一緒にするな、吐き気がするだろ」

静まりかえつた広場では大きくなかつたフワの声でも全員に聞こえた。

「アンタ以外の人達は違う筈だ！既に死んだ人達に出来る事は無い！だけど俺達はまだ生きてる！生きてる人達に希望を見せる為に此処に居る！なら、後ろを見るな過去に囚われるな！ビギナーもβテスターも同じだ！誰もが誰かの屍を越えて生きてること

を忘れなければ誰もが同じだ!!」

フワの言葉が終わると誰かが小さな拍手をして、それを下火にして一気に雄叫びが広場を包んだ。

『少し耳触りの良い言葉を言うだけでコレか……どうやら俺にもゲンさんと同じ役者の才能があるのかもな』

「俺に出来るのは此処までです。ナイトさん、後は任せます」

フワはやるべき事はやったと言わんばかりに後の事をディアベルに任して再び隅に行った。

「たしかにフワさんの言うとおり、今はボスを倒す事だけを考えよう! とりあえず近くに居る仲間や知り合いと6人1組のパーティを組んでくれ!」

皆が思い思いにパーティを組んでいると灰色のコートを着た少年がフワに近づいた。

「久しぶりだなキリト、此処に居ると思ってたよ」

「やっぱりアレは俺の為に……」

キリトの憂いた顔を見てフワは引いた。

「俺はホモじゃねえから勘弁してくれ」

「っあ!?! 俺だってノーマルだよ!! 誰もそんなこと言ってねえよ!!」

焦るキリトの姿を見てフワは笑った。

「俺も一緒だ。別にキリトの為にやった訳じゃない。この方が士気が上がると思ったからやっただけだ」

辺りは異様な熱気を感じるほど全員の士気が高まっていた。

「ところで……ずっと俺達を見ている奴がいるんだけど、何か恨まれるような事でもしたのか？」

フワはキリトを後ろから見ているフードを被った奴を見ながら何処か呆れた声を出しながらキリトに訊ねた。

「人聞きの悪い事を言う——確かに知ってるプレイヤーだけど……」

反論しようとしたキリトは後ろを向くとフードを被ったプレイヤーはサッと顔を逸らし、それを見たキリトも顔を逸らした。

「もしかして女性プレイヤーか、女性プレイヤー自体珍しいのに最前線に居るとは恐れ入るよ」

「ああ、凄まじい《リニア》を使う凄腕だ。それより何で女性プレイヤーって気付いたんだ？」

キリトが感嘆すると共にフードを被り、顔も見えない状態で性別を言い当てたフワに質問をした。

「雰囲気もあるけど、身体つきを見て何となくだ。それよりパーティに誘ったら？俺は

構わないし、一応顔見知りなんだろう？」

「わ、分かった……」

キリトは返事をしながらも動こうとしなかった。

「おい、ラグってんのか？早く行けよ」

動かないキリトにフワは怪訝な顔をしながら促すと、キリトはフワに向き直って手をモジモジさせながら目を忙しなく動かしていた。

「た、頼む。一緒に来てくれ……1人じゃ怖くて……」

「恐怖から逃げていいけど、こんな逃げ方は勘弁して欲しいんだけど……って、向こうから来たぞ」

フードを被った女性プレイヤーが意を決したようにフワとキリトの方に近づくとキリトは平静を装いながら背筋を伸ばすが何処か怯えているように見えてしまった。

「どうかしましたか？お嬢さん」

フワの言葉に近づいた女性プレイヤーは驚いたのか一瞬だけ固まったが、すぐにキリトの方をフード越しに睨みつけた。

「え?!いや、俺が言ったんじゃない……!」

平静を装っていたキリトはすぐに取り乱しながら弁解を始めた。

「イチャイチャするなら俺は邪魔だよなあ!それじゃキリトまた明日な!!」

フワは既に走り出し、揉めてる2人に言いながら離れた。

「あっ!?!見捨てる気か!?!待ってくれフワ!!」

「えっ!?!ちよつと待って!貴方に言いたい事が!?!」

置いていかれた2人は何か言っていたが既にフワの姿が見えなくなった。

同じ世界で（中）

2022年12月4日

午前10時、総勢45人のプレイヤー達が和気あいあいとボス部屋へ向けて歩いている。

その中で最後尾を歩いている3人のパーティは空気がおかしかった。

「昨日、何かあったのか？」

フワはキリトと女性プレイヤーの間の空気が変で思わずキリトに聞いてしまった。

「さっさあ？昨日はスイッチやPOTについて教えたダケダヨ」

キリトの話し方が何かに怯えていて、その姿を女性プレイヤーが睨みつけていた。

「なんとというか、まるで男女が風呂場で遭遇するラツキースケベにあった後のような」

その瞬間、2人とも同時に固まり。キリトは半分意識を手放していて女性プレイヤーはフワを睨みつけていた。

「……え？ 凶星？ あー……お幸せに？」

顔を真っ赤にした女性プレイヤーの拳が腹に突き刺さった。

「分かった、悪かった、事故だったんだな……」

女性プレイヤーは意識を半分手放しているキリトに向かって低い声で言った。

「思い出した？」

「……」

無言のキリトに納得したのか1人だけ先を行くように歩き出した。

「キリト、本当に恨まれる事をするなよな……」

「……俺は悪くない……」

憐れな男2人はゆっくりと女性プレイヤーの後を歩いた。

誰1人欠けること無く45人のプレイヤー達がボス部屋の前に辿り着いた。

1人を除く全プレイヤーが初めてのボス戦に様々な感情を抱きながら緊張し、空気が張り詰めていく。

この中を知っているフワだけが大きな欠伸をしていると、扉の前で自分の剣を掲げていたディアベルと目が合った。

が、ディアベルは何も無かったかのように目を逸らした。

「皆……勝とうぜ!!」

言いながら振り降ろすと緊張で張り詰めていたプレイヤー達が雄叫びをあげ、ボス部屋へと雪崩れ込んだ。

恐怖を誤魔化す為か関の声を大きくしながら部屋の中程まで行くと、前と同じように玉座から獣人の王が跳び出して着地と同時に凄まじい咆哮を上げた。

「っひ……っ!?!」

走っていた何人かのプレイヤーが怯え、足並みを乱した。

攻略本の情報通り2メートルを超える身長に、それに似合う体格をしている獣人の王《イルファング・ザ・コボルドロード》

例え知っていたとしても実際に目の前にして凄まじい咆哮を浴びると、原始的な恐怖が湧き上がってしまうのは仕方ない事だった。

『なるほど、最初の咆哮は本来こういう効果を望んでいたのか』

フワは乱れかけた足並みを見て1人で納得していると、ディアベルが力強く言い放った。

「行くぞ!!」

ディアベルはその事を見越してか、勇ましい声を出しながらボスと相対すると怯えか

けていたプレイヤー達も立ち直してボスと相對した。

『アレを無意識の内に言つてボスと相對したのなら大したモノだが、ボスと相對した時の間合いを見ると全部予定通りつてとこか……』

「フワ！センチネルが湧いたぞ！」

フワは何処か冷めた目でボスと戦っているディアベル達を見ていると、キリトが声を掛けた。

「つたく、あの可笑しい頭のオッサンは何してるんだよ」

可笑しい頭ことキバオウ達は遊撃部隊で取り巻きの《ルイン・コボルド・センチネル》の排除をするのだが湧き出た三体の内の一体を六人で囲み、槍などを持った4人がもう一体を間合いを取りながら抑えていた。

「……やっぱり中身も可笑しいんだな……」

強固な鎧で身を固めたセンチネルは守りに入ると唯一の弱点である喉元を攻撃できない為、生存力が桁違いに跳ね上がる。

だが、キバオウが可笑しい訳ではない。死ねば終わりの世界の中でキバオウ達の取つた行動は当たり前のモノだった。

だからセンチネルはボスの取り巻きで強敵と呼ばれている。ただ、フワの感覚が可笑しいだけだった。

「キリトはアイツ等とは違うよな？」

「まあ、少し荒っぽいと思うけど・・・」

フワは期待の眼差しでキリトを見ると、キリトは頬を掻きながら答えた。

「なら合わせるから好きにやってくれ、お嬢さんも俺の事は考えなくていいから」

「・・・」

お嬢さんと呼ばれて女性プレイヤーは少し機嫌を悪そうにした。

「昨日、話した通りに頼む。心配しなくてもフワも強いからフォローはしてくれるよ」

「・・・必要ない」

キリトと女性プレイヤーがほぼ同時にセンチネルへと走り出し、その後ろを追いかけるようにフワも走り出した。

「——ふっ！スイッチ!!」

先行したキリトの斬撃がセンチネルの得物を上空に弾き返し、大きく隙を作るとキリトのすぐ後ろから女性プレイヤーが飛び出して細剣のソードスキル《リニアー》を繰り出した。

「はあっ！」

その《リニアー》は捻りを加えつつ真つすぐ突き出すだけのソードスキルなのだが、ブーストされたソレは全くの別物に見えるほど鮮烈なモノだった。

正確に弱点である喉元を突かれたセンチネルはHPの半分を削られながら強烈なノックバックで後ろに仰け反った。

「予想以上だ、俺も真面目にやるか」

フワは女性プレイヤーを跳び越えて、仰け反ったセンチネルの喉元に右足の跳び蹴りを放った。

仰け反っていたセンチネルは更にHPを削られながらバランスを崩し、着地したフワはソードスキルのモーションを取っており《ピアース》を再び喉元に突き刺した。

それでセンチネルはHPをゼロにされて爆散した。

「?どうかしたか?」

キリトは驚いた顔で女性プレイヤーは怪訝な顔で2人ともフワを見ていた。

「貴方、変な戦い方をするのね」

「そうか?この方が楽なんだけどな」

「怪訝な顔をした女性プレイヤーの質問に答えるとキリトが何処か悪そうにしながら口を開いた。

「スキル構成を聞くのはマナー違反なんだけど、もしかして《軽業》を取っているのか?」

「ああ、短剣と一緒に取ったかな?」

「い、一緒に?最初はスキルの空きは二つしかない筈、でもあの時……」

フワの答えを聞いてキリトは何かを思い出そうとしていると、女性プレイヤーが細剣を振るった。

「今、考えに耽っている状況？ 次の取り巻きかボスに向かわなくていいの？」

不機嫌な声で話す女性プレイヤーにキリトは思考を中断して慌てて答えた。

「下手に介入してタゲ・・・じゃ分らないか、ボスのターゲットを変えてしまうと戦線が乱れてしまうから下手に手を出さない方がいいんだ」

「そう、次からも一体倒せば暇な時間が来るってこと？」

その質問にはフワが答えた。

「心配しなくても次からは二体が増えるから忙しくなるさ。ボスの攻撃を受け止めている壁役の人達のHPの回復の為に、槍などの長柄武器を持った人達がフォローするから単純計算で一体フリーになる。ということは？」

続きを女性プレイヤーに求めると理解したわと言わんばかりに答えた。

「倒すまでの時間が圧倒的に短い私達が相手にするって事ね」

正解と言わんばかりに女性プレイヤーにフワが笑みを向けた後、つまらなさそうな顔をしながら戦っている人達へと視線を向けると呟いた。

「それにしてもトロくさい奴等だな。アイツ等の中ではターン制のゲームでもしてるのかね？」

「は、はは……まあ、そう言つてやるなつて。アレが一番安全な方法で手堅い方法でもあるんだから」

フォローを入れるキリトだが、女性プレイヤーは首を傾げていた。

「ターン制のゲームつて何？」

「有名どころで言えばポケオンとか一昔前のF〇とか……」

「なにそれ？」

キリトの答えに疑問を持ったのは女性プレイヤーではなく、フワだった。

「え？」

「ポケモンは私も聞いたことあるけど内容までは知らないわ」

「俺もそうだ。聞いたことあるだけ」

更に畳みかけるように答えられたキリトは気が遠くなつた。

「……フワにとつてのターン制のゲームつて何か教えてくれないか？」

「そうだな、将棋とかチェスとか」

「あつ！それなら分かるわ！確かにそんな感じよね、あの人達の戦いは」

フワの言葉に女性プレイヤーは思っていたイメーজと合致したのか何処か嬉しそう

に同意を口にした。

「……なんだろう、俺だけが間違っている気がする……」

そんな2人の横でキリトだけが項垂れていた。

少しするとディアベルの指示で長柄武器を持ったパーティがフォローに向かうと、ボスのHPが一本なくなり取り巻きが再び湧き出た。

「それじゃ、俺が一体を押さえておくから終わったらコッチに来てくれ」

「分かった、フワもあまり無茶するなよ」

「どうして？三人でやった方が早いでしょ」

キリトは分かっていたが、女性プレイヤーはフワの言葉の意味が分からず疑問を口にした。

「フリーの一体を野放しには出来ない、ボスと戦ってる奴等の後ろから襲われて戦線が崩壊されたら困るだろ？」

女性プレイヤーはハツとして静かに頷くとキリトと一緒に取り巻きの一体へと向かった。

「試したい事もあるし……」

フワも少し離れた位置のセンチネルに向かうと、同じようにキバオウと左手に盾を持った仲間の一人が向かった。

「邪魔やねん、余りモンは余所に行ってもらおか」

「分かった、俺の番が来るまで何もしない。アンタ等の好きにすればいいさ」

「はんつ、お前の番なんて来るかいな」

キバオウは鼻で笑いながら仲間の1人がタゲを取っているセンチネルへと片手剣のソードスキル《スラント》を放った。

しかし、横から放った《スラント》センチネルに直撃しても鎧の上からでHPが碌に削れていなかった。

『おいおい、そんな戦い方じゃ頭数が足りてないと思うんだけどな』

HPは碌に削れてないのに気にした風のないキバオウと仲間の一人を見て、フワは呆れながら結果が見えていた。

その結果は思った以上に早く訪れた。

ダメージが取れないキバオウにタゲが全く移らず、センチネルの猛功を連続で受けていたプレイヤーが体勢を崩した。

キバオウがフォローするようにセンチネルへソードスキルを放つが鎧の上を剣が滑り、全くダメージを与えられなかった。

そして、タゲは移ること無くセンチネルは片手斧のソードスキルを使い、体勢を崩したプレイヤーの剣を持っていた方の肩口へと吸い込まれるように直撃した。

盾で受けていたとはいえ、受け流す事もしなかったプレイヤーのHPは積み重なったモノとソードスキルの一撃で一気に減り赤く染まった。

「うつくうわああああっ!!」

自分の死が目の前に来た所為か、そのプレイヤーは以上に怯えてキバオウ一人を残して人数の多いパーティの元へと逃げていった。

「おい!!逃げるなや!!」

キバオウが慌てて声を掛けているとセンチネルは逃げていったプレイヤーを追わず、隙だらけのキバオウに向き直った。

「どうでもいいけど、アンタは見なくても見えてるのか?」

「あ?何を言っとんねっうづっ!!?」

自分にタゲが移ったと思わなかったのか、キバオウはセンチネルのソードスキルをまともに喰らいHPを半分ほど削られた。

「言わんこつちやない、ホントにどうしたいのアンタは?」

フワは呆れながらキバオウを見ると、動揺してか何も言わずに右膝を地面に着けていた。

「俺の番だよな」

フワは眩きながらキバオウに追撃を掛けようとしているセンチネルに《エッジ》を片手斧に叩きつけて上空に跳ね上げてノックバックを起こさせた。

「もういいから黙って見てろ。口だけの小物が……」

動かないキバオウに聞こえるように言い放ったフワはセンチネルと対峙した。

「さて、どうなるかな・・・?」

センチネルは右肩に片手斧を添えるように構えるとソードスキルを発動させた。

緑色の輝きを纏わせた片手斧はフワの左肩から右腰を両断するような軌跡を描くが、フワは体捌きだけで避けて更に踏み込んでセンチネルの背後を取ると同時に裸締めで首を絞めた。

「ふっ!」

フワが息を一瞬だけ吐きながら力を込めると、甲高くも鈍い音が鳴り響きセンチネルの首が九十度横に曲がった。その音は首の骨が碎ける音なのかポリゴンの破碎音なのかは誰にも分からなかった。

「なるほど絞め技も関節も一応効くみたいだな」

ポリゴンの欠片へと変わり爆散しながらフワは新しい発見に笑みを浮かべて喜んでいた。

ソレを見ていたキバオウは顔を真っ白にさせて微動だにしなかった。

同じ世界で
(後)

イルフアング・ザ・コボルドロードのHPバーが三本目になって3分が経過した頃

「フワ、キリト、女性プレイヤー」
三人は並んで静かに他のパーティの戦闘を眺めていた。

「……結局、暇になるのね……」

始めの取り巻きの対処法と同じで囲んで攻撃しているプレイヤー達を眺めながら、女性プレイヤーはウンザリしたように呟いた。

「べ、別にいいんじゃないか？それだけ順調ってことだろ」

不満たらたら女性プレイヤーをキリトが必死に宥めている横で、フワは大きな欠伸をしていた。

「もしかしたら、ボスのHPバーが最期の一本になったらボスの武器だけじゃなく、湧く取り巻きの数も増えるかもしれないし気を抜くのは早いって」

キリトの言葉に女性プレイヤーはフード越しからキリトを睨んだ。

「分かってるわよ、仮にも命が掛かっている状況なのよ……でも、隣で大欠伸している人を見ていると腹の虫が……!」

女性プレイヤーがキリトから視線を横に移すとフワは再び大きな欠伸をした。

「もうじき、ボス戦も終わるから我慢して下さいよ。お嬢さん」

その答えに女性プレイヤーは怒りを押さえながら首を傾げた。

「貴方は一体何を言ってるの?」

「何って、腹の虫ってことはお腹が空いてイライラしてるんじゃないの?」

女性プレイヤーは拳をフワへと突き出すが避けられた。

「お腹が空いたぐらいでイライラするほど食い意地はつてません!!」

「いや、クリームパンの食べっぷりから考えると……あり得るな……」

フワを狙っていた拳がキリトへと向かっていった。

「殴るのはいいけど、それで犯罪者認定されて《オレンジ》にはならないのか?」

フワが疑問に思ったのか口に出すと、犯罪という言葉聞いて女性プレイヤーの動きが止まった。

「戦闘中でのパーティを組んでいる人達内で誤爆してもダメージが入らないんだ。だから、殴る方も《オレンジ》にならないし、殴られる方もHPは元より基本的に痛覚もないから不快感だけで問題ない」

「なるほどな、そしてキリトよ．．．お前はもしかしてMなのか？」

「なんで今の受け答えで、そんな言葉が出て来るんだ．．．よ？」

キリトの前に笑みを浮かべた女性プレイヤーが右腕を引き絞って立っていた。

「え？ぷわらあつ!？」

女性プレイヤーが使う《リニアー》の如く正確にキリトの顔面に突き刺さった。

「痴話喧嘩の続きは次が終わってからにしてくれ」

フワの言葉を聞いて女性プレイヤーが睨みつけるが、フワは女性プレイヤーに見向きもしなかった。

「ボスのHPバーが最後の一本になるぞ。俺もHPバーが最後の一本になる前に撤退したから、何が変わるのか俺も知らないから」

油断するなよ——その言葉を聞くまでもなく状況を理解した2人は思考を戦闘へと切り替えた。

湧き出たセンチネルの武器をフワが弾いた。その隙を逃す事無くキリトが片手剣のソードスキル《レイジスパイク》を喉元に叩きつけてHPを半分以上削りながらノックバックを起こすと女性プレイヤーが間髪入れずにセンチネルの前へと躍り出た。

不意に部屋に凄まじい咆哮が聞こえた。

その咆哮は武器を替える前の合図、この咆哮の後、腰に差した得物に手を掛けるのだ

ろう。

しかし、その咆哮に含まれた——何か——、その何かを感じたのはフワとキリトだけだった。

「何か嫌な感じがする……」

キリトは感じた事をそのまま口にすると、フワはキリトに感心するように笑みを浮かべた。

「まさか殺気に気付くとは、やっぱり面白いなキリトは」

「何を言って——」それよりも、SAOでの曲刀と刀の違いって何だ?——そ、そりや名称通り曲刀は刀身が湾曲してい——まさか……!?」

キリトは獣人の王が右手で腰から引き抜いた得物を改めて見て背筋を凍らせた。

「あ……ああ……!!」

キリトが驚きで喉を引き攣らせていると、青い髪の騎士が勇ましい声を上げた。「俺も出る!全員で囲みながら一斉攻撃!!」

青い騎士とその仲間達が獣人の王を囲みながら、思い思いの攻撃をしようとソードスキルのモーションを取る中でキリトが叫んだ。

「だ……だめだ、下がれ!!今すぐ全力で後ろに跳べえええ!!」

しかし、キリトの叫びは届く事はなかった。

プレイヤー達のソードスキルが発動する前に獣人の王は得物を左肩へと引き絞りながら垂直に跳んだ。

プレイヤー達のソードスキルは全て不発や当てる事が出来ず、技後硬直で動けなくなった所に、獣人の王は引き絞りながら跳び溜めに溜めた力をソードスキルに乗せ、一気に解放した。

—— 刀ソードスキル《旋車》 ——

そのソードスキルは360°の範囲全てに大ダメージを与え、一時的に行動不能にするバッドステータス《スタン》にする。

青い騎士とその仲間は攻撃を喰らいHPバーを半分ほど削られ、全員仲良く《スタン》になり動けなくなっていた。

リーダー格の青い騎士達が一撃で死へと向かっていく事に、他のプレイヤー達は驚きで身体が固まってしまい動けなくなった。

「追撃が……」

キリトの言う通り、自分の周りで動けなくなっている憐れな獲物を狩る筈なのに

獣人の王の視線は一点から微動だにしなかった。

「……覚えているのか？ ホントに良く出来た世界だよ」

フワと獣人の王は目が合い、獣人の王が静かにフワの方へと歩を進めようとすると足

元に邪魔な何かが転がっていた。

「はあはあ!!」

獣人の王の足元に転がっていた青い騎士はレベルの高さゆえか《スタン》が解けて立ち上がって獣人の王と相対した。

「つくうあ……!」

が、獣人の王の視線が自分に向くだけで青い騎士は目の前の死に恐怖して動けなくなつた。

「早くそこから離れろおお!!」

キリトの叫びも虚しく響き、ターゲットが青い騎士へと移り、獣人の王は右手の野太刀を構えてソードスキルのモーションを取った。

「つうおおおおお!!」

青い騎士は氣勢だけの雄叫びを上げながら自分もソードスキルを放つが、獣人の王の刃が青い騎士の左腰から右肩へと斬り裂かれながらゴミの様に宙に舞った。

——— 刀ソードスキル《浮舟》 ———

右下から左上に逆袈裟に斬り付けて相手を浮かす、そして浮かせた相手に次のソードスキルを叩きこむ為の開始技でもある。

宙へと舞っている青い騎士に獣人の王は次のソードスキルを放った。

刀ソードスキル《緋扇》

上から下と下から上へと二連撃の後に一拍置いてからの突き、その三連撃は全て凄まじい衝撃音と鮮やかなダメージエフェクトを出し、全てクリティカルヒットである事を示していた。

突き飛ばされた青い騎士はフワへと一直線に飛んで行った。

「つたく、邪魔臭い奴だな……」

フワは受け止めるべく重心を落として青い騎士を受け止めると、上半身と下半身が真つ二つに割れて後ろへと転がっていった。

「ディアベル!!」

ディアベル、キリトが割れた上半身へと駆け寄りながら叫んだ名前

「そうそう、ディアベルって名前だったな」

フワの呟きは誰にも聞こえなかった。

いや、聞こえなくて良かったのだ——その残酷な呟きは——

背後でポリゴンの碎け散る音が聞こえている筈なのに、フワは見向きもせず殺気を放っている獣人の王へと目を向けた。

既にゲームの常識から逸脱している獣人の王は、まだ周りで蠢いている獲物に見向きもせずフワを睨みつけながら右手に握った野太刀を左腰に構えてソードスキルのモー

シヨンを取った。

フワも短剣ソードスキル《エッジ》のモーションを取ると、獣人の王と同時に前に出た。

刀ソードスキル《辻風》

左腰に刀を構えたままターゲットへとの間合いを詰めて、居合の様にターゲットを一閃する。

そんな技をフワは知っている筈がないのだが、二人同時にソードスキルを放った。

左腰から放たれた《辻風》に合わせるように《エッジ》を下から当てて《辻風》の軌道を上へと逸らした。

その一連の行動はあまりに淀みなく、ソードスキルの輝きも相まって美しさを感じるほどだった。

基本技な分だけフワの方が先に技後硬直が解けて獣人の王の腹を斬り付けた。

『うわ、人数増えるだけで此処までHP量に差がでるのか……こりや倒すのは飽き切った頃だろうな』

そんな事を考えながらフワは上から振られた野太刀を横に避けながら斬り付ける。

何も変わらなかつた。獣人の王が得物を片手斧とバックラーから野太刀に替えてもフワとの戦闘は一方的に斬り付けられるだけだった。

何も変わらなかった。前の戦闘時よりもHP量は増大している筈なのに、前と同じ速度でHPが削られていく。バックラーという防御手段が無くなった分だけ斬り付けられる回数が増えたからだ。

何も変わらなかった。今まさに獣人の王と相對して命の駆け引きをしている筈のフワの顔がつまらなさそうにしているのが。

「ツグオオオルアアア!!」

獣人の王は咆哮と共に手にした野太刀を振るうが掠る事もない。

野太刀の振るう速度より速い訳ではない。

振るより速く動いて避ける。

まるで未来でも見えているかの様に全く無駄なく動いて避けながら攻撃も加える。

何度も斬り付けた後、フワは獣人の王へと口を開いた。

「刀に持ち替えたのは失敗だったな。俺の家系は元を辿れば千年もの間、命のやり取りを続けてきたんだ」

繰り返す様に獣人の王は野太刀を振るうが、繰り返し様にフワは避けながら斬り付けた。

「物足りないんだよ、その程度の業じゃ・・・」

横薙ぎに振るった野太刀をフワは地面すれすれに身体を前に倒しながら避けて《ピ

アース》のモーションを取って振り払いで隙だらけになった獣人の王の胸元へと突き刺した。

隙だらけの身体にクリティカルヒットした所為で獣人の王は強烈なノックバックを起こして後ろに仰け反った。

「うおおおっ!!」

「せやああっ!!」

計ったようなタイミングでキリトと女性プレイヤーが仰け反った獣人の王の両脇にソードスキルを放った。

ここまでフワが削っていた分も含めて最後のHPバーが残り三割を切った。

「悪い！遅れた!!」

更に仰け反った獣人の王を見ながらフワへの謝罪を口にした。

「別にいいさ。それよりもお節介は焼き終わったのか？」

案の定フワは全く気にせずにも他のプレイヤー達を助けていた二人に疑問を投げかけた。

「大丈夫よ、負傷者は退避出来たし、追加で湧き出た取り巻きの対処も出来たから」

技後硬直が解けた女性プレイヤーは細剣を振るって構えながら答えた。

「あそ、それじゃ後はコイツだけって事だな」

三人の前にはフワだけでなく、キリトと女性プレイヤーも敵と認識した獣人の王が身体を震わせながら間合いを詰めて野太刀を振りかぶった。

「悪いけど攻撃は逸らす事は出来ても受け止める、もしくは弾けないから——「ああ！俺が弾くから攻撃は頼んだ!!」——さすがキリト！」

キリトと獣人の王、二つのソードスキルがぶつかり合って弾き合った。

武器が跳ね上がり、パツと見は互いに隙が出来たように見えて女性プレイヤーは左から間合いを詰めるが、獣人の王は重心を前に残していた。

「左に跳べ!!」

フワは女性プレイヤーに向けて声を出すと、女性プレイヤーは驚きながらも反応し、回り込むように左に跳ぶと元居た場所に逆袈裟切りで振るわれた刃が通り過ぎた。

「はあっ!」

超至近距離で《リニア》を放ち、間合いを若干広げると更にフワが《ピアース》を放ち間合いを離れた。

技後硬直で動けない二人へと獣人の王はソードスキルを放とうとするが二人の間を駆け抜けたキリトが再びソードスキルで相殺させた。

そして再び斬り付ける——までは良かったのだが、女性プレイヤーが《リニア》を放つが、獣人の王はすぐに反撃をしなかった。

『重心を落とした？まさかアレか!?!』

フワは獣人の王の次の行動が分かり、咄嗟に出た。

「なっ!?!《旋車》!?! 困んでもないのに!?!」

キリトも気が付いたのか、驚きながらも対処法を考えているとフワが獣人の王との間合いを触れ合えるほど近づいた。

「——っふ!!」

フワは息を吹きながら振るわれる《旋車》の軌跡に短剣を差し込んで受けた。

しかし、臂力の差や武器の重量の差でアッサリ押されるが、力に逆らわず身を捻りながら吹き飛んだ瞬間、短剣が砕けた。

そのおかげで《旋車》の軌跡は上へと逸れてキリトと女性プレイヤーは範囲外へととなり無傷だった。

「フワアアアア!?!」

吹き飛んだフワを見て、キリトはディアベルが死んだ事が頭を過ぎり叫んだ。

フワは地面に手を着いて体勢を立て直し着地した。

「掠っただけだ! 《浮身》で跳んでるから心配ない! それよりも二人とも前を向け!!」

キリトだけでなく女性プレイヤーも目の前で自分達を庇って吹き飛んだフワが気になり、獣人の王から目を離していた。

《旋車》の技後硬直が終わった獣人の王は二人を無視して吹き飛んだフワの方へと《辻風》を使う為に左腰に野太刀を構えた。

「させるかああ!!」

キリトは咄嗟に相殺させる為にソードスキルを獣人の王へと放った。

「なっ!?!」

しかし、獣人の王は直ぐにキリトへと向き直り、半円を描きながら横からの刃は下からへと変化した。

—— 刀ソードスキル 《幻月》 ——

同じモーションから上下にランダムに変化する技。

だった筈だが、《辻風》のモーションから変化するモノでは無かった。

キリトは驚愕しながら下からの斬り上げを喰らって吹き飛んで女性プレイヤーを巻き込んで地面に転がった。

近くに居るキリトと女性プレイヤーに向けて、更にソードスキルを放とうとしていた。

「くそっ……間に合うか……」

フワは掠っただけとはいえ《旋車》を喰らい《スタン》に陥っていた。

「ぬ……おおおッ!!」

野太い声が響き、黒人風の男が両手斧ソードスキル《ワールウィンド》を放ち、二人を襲うとしていた野太刀を弾いた。

「すまんな、ずっとダメージディーラーにタンクをさせちまつて。ここからは俺達も手伝うぜ！」

その頼もしい声に応えるように黒人のパーティーメンバー達が獣人の王へと向かつて行った。

キリトがポジションを飲みながら指示を出す、キリト自身も薄々気が付いている。

囲まれなくても《旋車》を使えるのなら一、二撃喰らっても《旋車》を発動させて一網打尽にする事を――

「グルウオオオッ！」

考えていた通り、獣人の王は一、二撃喰らいながらも踏み込んで《旋車》の範囲内に全員を入れた。

「悪い、肩を借りる」

「うあ？ つくおつ!？」

黒人は誰かが耳元で囁いた事に気が付くと同時に、自分の身体が地面へと叩きつけられ痛みで息が詰まった。

その瞬間、目の前の獣人の王が垂直に跳び上がった。

全てのプレイヤーが視線を上に向けると空に居たのは獣人の王だけではなかった。

「……じゃあな、落ちろおッ!!」

フワの右跳び蹴りが獣人の王の顔面に突き刺さった。

獣人の王は苦悶の声を上げて錐揉みしながら地面へと墜落した。

「キリト！終わらせろおお!!」

「ああ！頼むアスナ！最後の一撃を!!」

「了解!!」

キリトとアスナと呼ばれた女性プレイヤーは一緒に墜落した獣人の王の元へと走った。

バットステータス《転倒》に陥っていた獣人の王は体勢を立て直し切っていないにも関わらず野太刀を振るった。

が、ソードスキルではないソレをキリトは避けながら踏み込み左肩から右腰にかけて痛烈な一撃を放ち、続く様にアスナが渾身の《リニア》を胸に突き刺した。

それでも獣人の王のHPは僅かに残った。

「お……おおおおおッ!!」

キリトが使ったソードスキルは《バーチカル・アーク》、片手剣ソードスキルで特徴は袈裟斬りに放った一撃が跳ね上がりV字に斬り付ける二連撃。

キリトの咆哮と共にV字の軌跡を描いて跳ね上がった一撃が獣人の王の左腰から顔面を斬り裂いた。

酷く小さな断末魔の声を上げながら獣人の王はポリゴンの欠片となって盛大に弾けた。

ポリゴンの欠片が周囲に舞う中、目に見えない恐怖に誰もが沈黙していると全員目の前に《C o n g r a t u l a t i o n 》と書かれたウインドが現れ、獲得経験値や分配された金、そして獲得アイテム。

最初は理解し切れなかったみたいだが、徐々に理解出来てきたのか安堵を口に出し始めていき歓喜の雄叫びが部屋に響いて喜びを分かち合っていた――
「この……人殺し……なんでディアベルさんを殺したんだ!!」

――そんな悲痛に満ちた叫びが聞こえるまでは――

同じ世界で（終らず続く）

全員の口が閉じ、叫んだ方を見るとディアベルのパーティーの一人シミター使いがフワを睨みつけていた。

「俺が殺した？ボスが殺したんじゃないやなくてか？」

人殺しと言われてもフワは眉一つ動かすこと無く、質問を返した。

「ああそうさ！お前がしつかり受け止めてさえいればディアベルさんは助かった筈だ！！」

「その証拠は？」

「見れば分かる！今のお前を示すカーソルは《オレンジ》！犯罪者の色だろ！！」

その答えを受けて誰もが目を凝らしてフワを見ると、確かにフワを指し示すカーソルはオレンジ色になっていた。

「あら？ホントだ。一体いつ・・・」

少し考えると心当たりがあったのかフワは思い出したように黒人風の男へと声を掛けた。

「悪いな、踏み台みたいに使っちゃったけど大丈夫だったか?」

黒人風の男にも心当たりがあったのか、思い出したかのように頷いて答えた。

「あ、ああ。少し痛かっただけでHPも少し削れただけだったから問題ないが……」

「たぶん、ソレが犯罪行為に当たったんだろ?」

フワは自分が《オレンジ》になった事に興味が無いよう大きな欠伸をした。

「それじゃないだろ!!お前はディアベルさんを殺したから《オレンジ》になったんだ!出鱈目を言つて誤魔化せるとでも思っているのか!」

やり取りを聞いていたシミター使いが耐えられない様に叫んだ。

「雑魚騎士様を殺したのがボスだろうと俺だろうと、どっちでも構わない」

「ぞ……こ……? デイ、ディアベルさんのことかあああアツ!!」

シミター使いが怒りに任せて武器を握ったが、フワは気にすることなく言葉が続けた。

「ああ、騎士様だけじゃねえよ。今まで死んだ奴等も全員弱かったから死んだんだ」

「な、なんだと……?!」

誰かが驚きながら呟いた。

「俺達が生きているこの世界は何だ? ゲームか? それとも現実世界の一部分か? 狂った世界か? どれも間違つちやいねえよ、全部同じ世界だ」

誰もがフワの言っている意味が分からず言葉の続きを待った。

「そして根本にある絶対不変のルール——弱肉強食——力無き者は食われ、力ある者が食らう。そして力の種類は違うが、現実世界にも当てまはる事——」

誰にも否定の言葉を口に出せない様にフワは言葉が続ける。

「だから誰もが小さな頃から学校に行き、力の1つである——学歴——という力を手に入れるんだ。もちろんソレだけじゃない、他にも様々な種類の力があり、力がある者が成功者と言われ、力がない者は惨めに生きていく……そんな世界だろ？」

フワの言葉の途中でアスナが身体を硬直させて微かに震えていた。

「この世界ではソレが顕著に表れているだけ。力が無い弱い者が死んでいく……ソレだけの事だろ？」

フワは当然の事だ、と言わんばかりに全員へと問いかけた。

「そんな訳あるか！お前の考えを他人に押し付けるな!!」

その言葉を聞いてフワは小さく笑った。

「ああ、その通りだ。なら、お前等も自分達の考えを俺に押し付けるなよ。俺は俺の意思によって生きているんだ。言つたら弱肉強食だって、俺に関わるなら相応の力を手に入れてから言つてくれ」

「っ貴様あ……!!」

シミター使いは怒りに震えながらフワへと走り出した。

「俺に攻撃するのはいいけど、お前のカルマ値が俺のカルマ値を越えた瞬間、お前も《オレンジ》になる事を忘れるなよ」

「ッ!!?」

その言葉を聞いたシミター使いは固まった。

「そうだよなあ《オレンジ》になるのは怖いよなあ。いくら仇討とは言え、もしかしたら自分が犯罪者になるのは怖いよなあ!」

自分とフワに対して怒りが積もり身体を震わせるシミター使いの前に1つのウインドが現れた。

決闘 《完全決着モード》

自ら敗北を認める《リザイン》降参するか、HPがゼロになれば決着。

降参しなければ死ぬシステム

「今度こそ完全にシミター使いは身体も息すらも固まった。

「俺が憎いんだろ?今回だけは手伝ってやるからさ、やってみるよ」

完全な挑発、固まっていたシミター使いは直ぐに有利な状況なのに気が付いたのか、笑みを浮かべながら決闘を受諾するOKを押しした。

決闘が始まるまでのカウントダウンが表示され、止めれる雰囲気でない中、キリトが何かを言おうとしているがシミター使いは構えを取った。

先程のボス戦でフワは自分の武器を破壊されており無手の状態、たとえストレージから新たな武器を出したとしても今の自分の武器より劣る筈だ。

シミター使いはそう考え、自分の圧倒的優位を確認してから決闘を受けた。

カウントが無くなる中、フワは新たな武器を出す素振りすらなく、つまらなさそうな顔でシミター使いを見ていた。

「ッ——!!」

シミター使いは齒軋りを起こすほど力を入れながら、決闘開始と同時にソードスキルを発動させた。

——曲刀ソードスキル《クレセント》——

ターゲットとの間合いを詰め、ターゲットを袈裟斬りに斬り付ける。

システムにより高速化された動きは、迷う事無く間合いを詰めてフワの肩口から両断せんと言わんばかりにシミターが振られた。

振った瞬間、シミター使いは勝ったと思つて笑みを浮かべた。

なにせ相手のフワは武器を持っていない。間合いに入った今、避ける事も防ぐ事も出来ないのだから——

そして、シミター―使いは顔に凄まじい衝撃を受け、フワの右を通り過ぎて地面に転がった。

「つうあああああああああ?!」

シミター―使いは少しの間理解出来なかった。この世界に囚われてから一度も経験しなかったから――

「いい痛い?!顔が痛いいいっ?!」

それは――痛み――ゲームだから痛覚が無い筈なのに、今は顔の骨が折れて顔の形が歪んだのではと錯覚を起こす程の痛みがシミター―使いを襲っていた。

「五月蠅い奴だな、たかが痛いだけだろ?」

フワはつまらなさそうな顔のまま、武器のシミター―を手放して蹲っているシミター―使いへと歩を進めた。

「まさか・・・《ペイン・アブソーバー》を・・・?」

周りのプレイヤーは意味が分からず固まっていると、キリトは微かに震えながら呟いた。

「さすがキリト、ONにしてあるよ」

「な、なによ《ペインアブソーバー》って?」

キリトは信じられない表情のまま震えていると、横に居たアスナは意味が分からずキリトに説明を求めた。

「《ペインアブソーバー》βテスト時に発見された倫理解除コードの1つで通称——悪魔の取引——と言われたシステムだ。特定の敵に与ダメージとノックバック率の上昇、そして痛覚再現」

キリトはβテスト時を思い出しながら呟いた。

「痛覚再現？それって……まさか」

「ああ、自分と相手に痛覚を再現させるシステム。この非現実を現実に変える、一度入ると二度と切る事が出来ない、悪魔の取引と呼ばれたシステム」

此処に居るプレイヤーの誰もが経験したモンスターからのダメージ、ある者は突進を受けただろう、嘔み付かれた者も、剣に斬られた者も、槍が刺さった者も、鈍器で殴られた者も——

全てのプレイヤーが痛覚が無いから立っていられる、生きていられる。

そう言っても過言じゃないほど重要なモノ、この世界がゲームだと認識できる最大要因の1つ——なのに

「なんで、なんで入れたんだ？そんな事をすればHPが無くなる前に死ぬかもしれないんだぞ……」

キリトが言っているのはショック死だ。

いつか腕が斬り落される《部位欠損》と呼ばれるモノになるかもしれない、そんな時に痛覚があるとすれば、腕が無くなる程の痛みには耐えられるのか。

その事が分かっているキリトはフワに問わずにはいられなかった。

「フワは死ぬのが怖くないのか・・・？」

「ああ、怖くない。というか、どっちでもいいことの一つだな」

フワはそう言いながら右足を上げて、未だに蹲っているシミター―使いの首に狙いを定めた。

「それよりも、コレでサヨナラだ」

「うがあああああああ・・・!!？」

フワは乗せた足に徐々に体重を掛け始めるとシミター―使いは苦しいのか苦痛に塗れた声を上げ出した。

「や、止めなさい！もう決着は着いた筈よ！」

アスナは死者に鞭を撃つ様なフワの行動に危機感を覚えて叫んだ。

「でも、こいつ何時まで経つても《リザイン》しないし、やらないと終わらないよね」

フワは言いながらも体重を徐々に掛けていく事を止めず、言葉を聞いた誰もが殺す文字が頭に浮かんでいた。

「それに《オレンジ》になった俺は次から殆ど攻略に参加しない。なのに力無き者が居ても困るじゃん。だから此処で――」

殺す

何一つ感慨なく言い切ったフワに誰もが恐怖で口を閉ざしたが、一人だけ口を開いた。

「これ以上死者を出したら今後の攻略にも響いてくる。だから、そいつを殺さないでくれ……頼む……」

キリトの静かな懇願にフワは少し考えてから《リザイン》をした。

「それもそうだな。分かった、見逃してやるから後は宜しくなキリト。俺はカルマ回復クエストがある所まで姿を消すから」

フワはシミター使いの首から足を外して、ボス部屋の奥にある階段へと歩を進めた。

「あ、それと人に依存し過ぎると弱くなるから気を付けてくれ」

フワは言い終わると同時に部屋を出て第二層の《転移門》へと向かった。するとフワの後を追う様にアスナが駆けてきた。

「何か用か？お嬢さん」

「アスナよ、次からはそう呼びなさい」

フワは呆れたように頭を掻きながら溜め息を吐いた。

「分かったよアスナ、用はコレだけか？」

「いえ、本当に言いたかった事を言いに来たのよ」

フワは話の続きを促す様に黙っているとアスナは意を決したように口を開いた。

「貴方の作った攻略本のお陰で死なずに済んだわ。だから、ありがとう。それと貴方の考え方には共感できるわ。だけど、貴方のやり方は認められない。そのやり方じゃ自身の身を滅ぼしかねないわよ」

アスナの言葉を全て聞いてフワは堪え切れない様に笑みを浮かべた。

「攻略本の礼なら情報屋のアルゴって言う人に言ってくれ。俺はあの人への借りを返す為に攻略本の作成を手伝ったんだ。その他大勢のプレイヤーを助けようなんて気はサラサラ無かったからな。それと――」

フワは言葉を一旦切って、改めてアスナの顔を見た。

「当たってるかもな、たぶん滅ぼしたいんだろうさ。何も無い俺自身を……」

フワは笑いながら言うのアスナは自分で言った事なのに理解が追い付かず、固まってしまう。フワは何かが分かった様な顔をした。

「アスナには色んな力があるよ。人を引き付ける力、人を率いる力、そして人を魅せる力も……アンタは攻略に欠かせない人になれるだろうから頑張ってくれ」

フワはそう言って《転移門》に触れて起動させると第二層に足を踏み入れた。

犯罪者になつたにも関わらず、全く気負つた風もなく飄々とした雰囲気です。

また明日・・・は

2022年11月6日

——また明日——

今日を振り返ると、その言葉の可笑しさに思わず笑みが零れる。

・・・いつもなら、思っただけでも呼吸が出来なくなり身体が震えるのに、今日は違った。

あの時と同じ、いや、あの時よりも身体も心も成長している分だけ感じた恐怖は大きかったかもしれない。

なによりも、あの時の事を思い出しても発作が起きない。

あの時が頭を過ぎるだけで息が詰まって視界が暗くなり、全身の感覚が無くなって立つ事すらままならなくなるのに、今は若干の息苦しきがあるだけ。

恐怖を乗り越えた訳ではない事は自覚している。

今だって恐怖から息苦しさを感じている。

ただ、今日あった事を思い出すだけで恐怖が和らぐ気がする。

明日からの事を考えると何処か期待している自分が居る。

彼の傍に居れば《強さ》の意味が分かるかも、私自身《強く》なれるかもしれない。

「フフツ……また明日……」

朝田詩乃は同年代と比べて思考はかけ離れているが、表情は恋をして浮かれている様な年相応の顔をしていた。

そして、テレビで流れている”大量殺人事件”の言葉さえ、上の空で聞こえていても何も考えていなかった。

2022年11月7日

学校での朝田詩乃は一人だった。

昨日の事が既に学校中に広まって、いじめをしていた連中すら何かに怯えて誰も視線を向ける事すらしなかった。

「……いない」

しかし、少女はそんな事どうでもよかった。

彼が居ないのだ。——また明日——と言った筈なのに彼は何処にも居なかった。

「どうして・・・?」

それだけで息苦しさを感じている。あの時を思い出した訳でもないのに軽い発作が少女を襲っていた。

彼は風邪を引いただけかもしれない。と自分自身を誤魔化しながらも膨れ上がってくる恐怖を押さえ付けながら担任に聞きに行つた。

担任は言いずらそうにしながらかも話すが、途中から聞こえなくなつていった。

身体の芯から冷えて感覚が曖昧になり、息をしている事すらも忘れていた。

《SAO》昨日からのテレビは全てソレに関する事だった事を今更ながら思い出していた。

既に死者が200人以上も出ている《テストゲーム》と呼ばれるモノ。

少女は心配してくれた担任に《SAO》の患者達を受け入れる病院へと送つて貰つた。

「ホントにここまでいいのか?」

担任の言葉に頷いて肯定すると覚束ない足取りで受付へと向かつた。

「SAO患者で山田という少年は本病院に入院されておりません」

足元から全て崩れていく気がした。

少女は受付に手を掛けながら地に膝を落とした。

驚いた受付の方が誰かを呼びながら、膝を落とした少女へと駆け寄り呼びかける。が、少女は答える所ではなかった。

もう何が何だか分からなかった。

何が現実で何が幻想なのか、今の少女には区別が付かなかった。

他にもショックで倒れる人が居たのか、案外すんなり待合室の席へと運ばれて呆然としていると奇妙な着物を着た男が受付へと向かった。

呆然としていた少女は無意識の内にその男へ視線を向けていた。

何故と聞かれても困る、既に頭は真っ白で何も考えておらず、目に付く恰好をしていた男へと視線が向いていただけだった。

「え〜？S A O患者で山田という少年は入院していませんですか？可笑しいなあ……
菊岡さんは此処の病院だって言ってたと思うんだけどなあ……」

山田と聞いて少女は少し正気を取り戻した。

もしかすると変な着物を着たあの人は彼のお父さん、少なくとも親族の方ではないか
もと考え、何とか立ち上がって受付へと近づいて行つた。

「あー、もしかして不破って少年が入院していたりして……」

男がそう言うのと受付の人は過敏に反応して、男の方を驚いた顔で見た。

「も、もしかして不破さんの親族の方ですか？」

少女の予想通り彼の親族の方だったが、それよりも彼を指すであろう聞き覚えの無い名前が聞こえて動きが止まった。

「え？」

無意識の内とは言え、久しぶりに声を出した。

その声を受付と男が反応して少女へと視線を向けた。

「もしかして、こちらの方も親族の？」

「違いますけど、この子がどうかしたんですか？」

「いえ、さきほど彼女も山田という少年が入院していないかと・・・」

変な着物を着た男は糸目を薄く開き、足元の覚束ない少女を見ると何かに思い至ったのか某中学校の名前を口に出した。

「あ、はい。山田くんのクラスメイトの朝田詩乃です・・・」

少女は戸惑いながらも答えると、男は糸目のままニツコリと笑みを浮かべた。

「そっかそっか、なんだかんだ言ってもキツチリ青春してるじゃないか」

感心感心と男は頷くと受付に向き直った。

「どうやら入院している彼の友人みたいなので、彼女にも彼の病室が何処か教えてあげて下さい」

男がそう言うのと受付の女性は周囲を確認して言いづらそうに話した。

「あ、あの……口に出せないで御案内させて頂きます。えつと、御一緒に行きますか？」

男の後ろに居た少女が頷くと静かに立ち上がり、受付を他の人に代わると男と少女の案内を始めた。

エレベーターに乗ると男が参つたと言わんばかりに頭を掻きながら口を開いた。

「あの、一体どういう事か説明してくれませんか？」

その言葉に案内している女性は何処か怯えながら男を見た。

「いえ、本病院には本来ならば知られていないVIP待遇の病室がありまして、政府の方があるSAO患者の為に使用すると……」

糸目の男は呆れたように額に手をやって溜め息を吐いた。

「つたく、色々と張り切り過ぎな気が……」

そんな話を聞いていた少女は気が気ではなく、あの一件で只の人ではないと思つてた彼が本当に何者なのか分からなくなって困惑していた。

「こちらが不破さんの病室になります」

案内された部屋は絨毯が敷き詰められていて、日当たりの良い大きな窓に景色が一望できて大きなソファと少し離れた所にベットがあった。

そして、その上に探し求めていた姿があった。

「っ」

無骨なヘルメットを被り寝ているかの様に目を閉じている彼へと近づいて、無意識の内に彼の右手を握っていた。

強く、強く、強く・・・！

もしかすると起きてくれるのではないかと、叶う訳が無いと頭では分かっているでも少女は彼の手を強く握っていた。

そして彼は起きず、分かり切っていた筈なのに少女は涙を流した。

「あつ」

涙を流していると自覚した少女は身体を小さく震わしながら、声を殺して泣いた。

「・・・何か御用があれば内線で申し付け下さい」

あまりに痛々しい姿を見ていられなくなったのか案内してくれた女性は業務に戻ろうとした。

「あつと、今後あの子が一人でもお見舞い出来るようお願いしても」

男がそう言うのと女性は静かに頷いて部屋を後にした。

ソファに腰を掛けた男は少女が泣き止むのを静かに待った。



しばらく泣いていた少女は落ち着いたのか、ソファに座っている男へと向き直って頭を下げた。

「ありがとうございます。私なんか関わる事すら許されなかつた筈なのに……」

「気にしなくていいよ、彼の初めての友人だ。むげに扱うと彼に怒られそうなんでね」

男は糸目のまま軽い対応で答えた。

が、薄く目を開けて少女を問いかけるように見た。

「それと、色々と聞きたい事があるだろう？ 答えられるモノなら答えるよ」

少女は驚きながらも何を質問するのかを決めたのか息を飲んだ。

「彼の本当の名前はなんですか？」

「あく、その質問ね……」

答えずらそうな男の態度に少女は戸惑ってしまった。

「す、すみません……！ 答えられないモノなら答えなくて――」

「いや、何と言おうか……たぶん、そのまま声にすると返って混乱する気がして……」

男は気まずそうに舌を出して頭を掻いた。

「どんな答えでもいいです。教えて下さい、お願いします」

「・・・彼はね、本当の名前が無いんだ」

少女は男の言った通り意味が分からず混乱している。

「いや、もしかすると彼は何も無いかもしれない・・・」

少女は混乱しながらも聞いた話で質問をした。

「あの、フワではないんですか？」

「うーん、お嬢さんは不破って名に聞き覚えがあるかい？」

男の質問に少女は申し訳なさそうに首を横に振った。

「すみません、聞き覚えがありません」

「それならそれで都合が良いから。まあ、不破って家系は色々あってね。彼自身が不破

ではないって考えてるから彼には名前が無いんだよ」

なんとなく納得したのか少女は次の質問をした。

「何も無いとは・・・？」

「ソレは言葉通りの意味だ。多分だけど彼には何も無いと思うよ」

これ以上言える事がないと返された少女は黙り込んでしまった。

「それじゃ僕は失礼するよ。病院の方とは話を付けてあるから、何時でもお見舞いに来

るといい」

そう言つて男は部屋を出ようとした。

「え!?あのつ、彼の顔を見なくても……」

男は顔だけ少女へと向けて糸目のまま答えた。

「此処からでも顔は見えるし、心配しなくてもゲームのルールが分からなくて死んだのなら既に死んでるよ」

「えっ?一体どういう……」

「彼はそう簡単に死なないだろうって言ってるだけ、最初の方は簡単らしいから心配する必要も無いんじゃないかな?」

何処か納得し切れていない少女に向けて男は舌を出した。

「ま、無理もないか。言つた通り病院とは話を付けてあるから好きな時に来るといい。僕も時間を見つけたら様子を見に来るから」

今度こそ男は部屋を後にした。

心配で不安の一欠けらも無い、飄々とした男の態度に少女は不安から来る恐怖を忘れていた。

「……今更だけど、貴方の事を何も知らなかったのね……生きて帰って来れたら教えて欲しいな……」

二人しかいない部屋で少女は目を閉じたままの彼に話しかけていた。

助ける理由

2023年2月1日

第一層攻略から約2カ月、フワは第八層の迷宮区タワーへと向かっていた。攻略の為ではない。

昨日、第八層のフロアボスは攻略組の手により討伐されている。

次の第九層へ向かう為にフワは直接ボス部屋の転移門へと向かっていた。

未だフワを指すカーソルは犯罪者の《オレンジ》で街の転移門を使う事が出来ないからだ。

『第九層の特徴はエルフの国が二つある事だ。一つはダークエルフと呼ばれる者の国、もう一つは森エルフと呼ばれる者の国がある。この二つの国は不仲でコレに共なつたキャンペーンクエストも特徴の一つだ。そして最も大きな特徴は《カルマ浄化クエスト》が受けられる事だ！コレをクリアするとカーソルの色が犯罪者の《オレンジ》から一般的な《グリーン》へと戻るゾ！誤ってカルマ値が増えて《オレンジ》になった者達

は是非とも受けるべきクエストだ!!』

第八層の村で無料配布されていた《アルゴの攻略本》には第九層の紹介が簡単に書かれていた。

「ようやくカーソルの色を戻せるけど……キリト達の攻略も順調だし、無理に戻す必要もないかな?」

フワは小さく呟きながら迷宮区タワーへと向かっている途中で、清流が流れる川へ出て水を掬って飲んだ。

『幼かった頃の生活と大して変わらないし、このままでも……』

フワは姿勢を戻して視線を森へと向けてしばらく見続けると、人らしきモノが《エストック》と呼ばれる細い片手剣を手にして飛び出してきた。

「くっ……この無礼者共! 私に触れるな!!」

高いソプラノ声に怒りを含みながら叫ぶエストックを構えた女の前に、鎧の上にフードケープを羽織った騎士風の男が三人前に立った。

「……そう仰らないで下さい、私達には貴女が必要です。いかげん素直に御同行願います」

並んだ三人の真ん中に居る男が有無を言わさないように言いながらにじり寄った。

「っ……! そ、その者! 頼む! 手を貸してくれ!!」

並んだ男達の後ろで此方を見ているフワを見つけた女は助けを求めた。

女の声でフワの存在に気が付いた男達は各々武器を構えながら振り向いた。

「っ!?!・・・薄汚い人族があ・・・!」

三人を指す緑だったカーソルが俺を見つけて赤色に変わった。真ん中の男が何かを思いついているのか、怒りが漏れ震えながら呟いた。

「私があのを消す、お前たちは姫の確保をしろ」

真ん中の男が左手にカイトシールド、右手に長剣を構えてフワと相対した。

「ん? 《フォレストエルブン・ハロウドナイト》? アンタ等エルフ・・・みたいだな」
フワと相対した男がフードを取ると、人には無い尖った耳を持っていた。

フワの視界に映るエルフを示すカーソルは薄い赤。

相手の強さは赤色の濃淡で分かり、薄い赤色は今のフワのレベルからしたら少し弱い相手だった。

「二人でいいのか? レベルだけ見ても俺より弱いよ、アンタ」

言われたエルフは怒りで顔を歪ませて口を開いた。

「わっ私が入族よりも弱いだと・・・? つふ、ふざけるなあっ!!」

怒号と共に右手に構えた長剣を真横に翳してソードスキルを発動させた。

—— 片手剣ソードスキル 《ホリゾンタル・スクエア》 ——

右から左へと横薙ぎ、止まる事無く左から右への横薙ぎ、横薙ぎの勢いを殺す事無く身体を回して再び左から右への横薙ぎ、最後に振り切った右から左への横薙ぎ。

スカイブルーの輝きと共に放たれると最後に正方形を描く四連撃が特徴のソードスキル。

エルフがシステムによる高速化で移動するよりも速くフワはエルフとの間合いを詰めた。

「っ!?」この程度で……!」

エルフは驚きながらも《ホリゾンタル・スクエア》を止めずに右から左への一撃目を放った。

が、フワが懐に入った時点でエルフの死は決まっていた。

フワは当たり前のようにエルフの剣を握っている右手の手首を掴むと同時に身体を廻してエルフを巻き込んで背に背負い《ホリゾンタル・スクエア》の勢いそのままに投げた。

そして投げながらフワも重心を下げて右肘をエルフの眉間に添え、河原の岩に叩きつけて後頭部を砕き、同時に肘で眉間を砕いた。

エルフは叩きつけられ後頭部と眉間を砕かれた瞬間、手足を一瞬だけ――ピクンツ――

「と動かしてポリゴンの破片へと変わった。」

「『不破圓明流《流風（ながれおろし）》』」

フワはポリゴンの破片へと小さく眩くと立ち上がり、三人の方へと向き直った。

「死にたいなら掛かって来い、嫌なら今すぐ失せろ」

その言葉に残った二人は顔を青くさせて森へと逃げ込んだ。

「はあ、注文通り助けたぞ。アンタも無事そうだな、それじゃ俺はこれで」

女エルフを見て無事だと分かるとフワは再び迷宮区タワーへと歩を進め始めた。

「まっ待ってくれ！助けた礼を何か」

フワは歩を止めて右手で腹をさすると女エルフの方へと振り返った。

「……飯とか持ってる？」

フワの言葉が予想外だったのか、女エルフは少し呆けていたが自分の持ちモノを確認した。

「ほ、干し肉と黒パンなら少しあるが……」

「そっか、ならソレと俺の魚も出すから一緒に昼飯食べないか？」

フワが笑みを浮かべて言うと、女エルフは意味が分かったのか笑って快諾した。

「願ってもない、追われていた所為で私も何も食べていなかったんだ」

そう言ってフードを脱いだ女エルフは整った顔立ちに意思の強そうな瞳、長い金色の

髪を邪魔にならない様に後ろで縛っており、佇まいは気品さえ感じるモノだった。

「私の名前は《エルミア》だ。私を助けてくれた事に感謝する」

エルミアは微笑みながらフワへと礼を言った。

「どういたしまして、俺のプレイヤー名はフワだ」



二人で持ち寄った食材で少し豪華な昼食を食べ終えるとフワは満足して息を吐いた。

「ふく、久しぶりに魚と山菜以外を食べたな……」

フワの言葉にエルミアは可笑しそうに笑っていた。

「ふふふ、長い間サバイバルでもしていたのか？」

「まあ、そんな所だけど……アンタを呼んでいる声が聞こえるんだが」

二人してくつろいでいると不意にフワが森へと目を向けると、微かに野太い叫び声が聞こえた。

「姫様！何処におりますか姫様ツ!!お返事下さい!」

その声を聞いてエルミアは嬉しそうな顔をして言葉を返した。

「此処だメリュジート!私は無事だ!!」

すると森に逃げた二人と同じ方向から、鎧を着た騎士と言うより傭兵と呼ぶに相応しい男のエルフが声に釣られて森から出てきた。

「無事でしたか姫様。ところで隣の人族は一体……?」

メリユジートと呼ばれた男はエルミアの無事を見て安堵したが、すぐにフワを怪訝そうな顔で睨みつけた。

「私の恩人のフワだ。無下に扱わないでくれメリユジート」

エルミアがフワを庇うように前に立って言うのとメリユジートは剣を収めてフワへと頭を下げた。

「そうでしたか、姫様を助けて下さった事に深い感謝を」

「別にいいさ、アイツ等が勝手に襲いかかって来たのを撃退しただけだ。それに礼なら既に姫さんに貰っているから気にしなくていい」

フワは頭を下げたままのメリユジートに感慨もなく言った。

「保護者も来た事だし、俺は行くよ。まだ恩を感じてくれるなら再開した時に飯を御馳走してくれ」

「す、すまないフワ殿。少し話を聞いて貰ってもいいだろうか?」

そう言つてフワは二人から別れようとするのとメリユジートが止めた。

「……まだ何か用でも?」

フワの視界にはメリュジートの上に！マークが現れていた。

「もしかしてフワ殿はカルマ浄化を望んでおりませんか？」

メリュジートはフワを示すカーソルを見ながら問いかけた。

「まあ、どちらかと言われればそうだけど」

「すでにお分かりでしょうがエルミア様は森エルフの姫様、姫様のお言葉があればカルマの浄化など」

「それで、アンタ等は俺に何を望んでいるんだ？」

フワはメリュジートの言葉を遮る様に問いかけた。

「私達が向かおうとしている第九層の《聖樹の大聖堂》まで付いて来てはくれないか」

「聖樹の大聖堂ねえ、そんなの人族の俺に頼む事か？」

メリュジートの言葉にフワが反論するとエルミアもフワに賛同した。

「そ、そうだ！既に一度助けて貰っている恩人に何を頼んでいるのだ！」

メリュジートは姫様へと顔を向けた。

「姫様は現状を理解しておいてか!?すでに誰が裏切り者で何時誰が姫様の命をお奪いになるか分かりませんぞ!!」

そう言つてメリュジートは再びフワに頭を下げた。

「どうか！どうか我々を助けてくれ!!」

「風が草木を揺らす音が大きくなった。」

エルミアも一喝されて口を閉ざし、メリュジートは頭を下げたまま沈黙していて二人ともフワが口を開くのを待っていたから。

「依頼は以上か？」

断られる、エルミアはそう思って目を閉じた。

「はい」

メリュジートは顔を上げないまま小さく答えた。

「その依頼を受けるよ、報酬はカルマ浄化だな」

ピコンと音を立ててフワが依頼であるクエストを受諾した。

「っ」

メリュジートは立ち上がってフワに感謝の言葉を言っているが、エルミアは理解するのに時間が掛かった。

敵が誰かも分からず、どれくらいいるのか数も分からない状況で自分を守ってくれる事に考えが辿り着かなかったから。

「しつかりしろよ姫さん、ここから迷宮区タワーまでは丸一日は掛かるから呆けられると困るぞ」

「つそ、それくらい問題ない！」

フワの言葉で正気に戻ったエルミアは慌てて取り繕った。

「だが、本当にいいのか？ 言っただ通り、私を狙う敵の数さえ分からない状況なのにフワは私を守ってくれるのか？」

「それが依頼内容だろ？ なら守るさ、何か不満でも？」

気にした風の無いフワの態度にエルミアは不意に胸が苦しくなった。

「礼はいいから早く行かないか？ のんびり出来るほど余裕はないだろ」

そう言ってフワは森の中へと入っていった。

その後を追う様にエルミアとメリュジートも森へと入っていった。



「キリトとアスナ、二人とも聞いてくれ……マズイ事になった……」

浅黒い肌を持った女ダークエルフが黒いコートを着たキリトと赤いケープを羽織ったアスナの二人に頭を抱えそうな雰囲気で話しかけた。

「キズメル？ い、一体何があつたんだ？」

キズメルと呼ばれたダークエルフの尋常じゃない雰囲気を恐れながらも問いかけた。

「二人と同じ人族の集団がフォールンエルフと手を組んでダークエルフを襲い秘鍵を奪った……」

「っ」

キズメルの言葉に理解が追い付かず、無意識の内に息が止まっていた。

「もしかすると、森エルフの一部がフォールンエルフ共と手を組み、秘鍵を全て揃え封印を……」

キズメルの状況報告にキリトとアスナは必死に正気へと戻した。

「そんな、まだ第九層に来てから一日しか経ってないのに……」

アスナの言葉にキズメルは苦虫を噛んだような顔をした。

「おそらく、九層に上がる前から人族の者達と計画を練っていたに違いない。もう少し念入りに情報収集してさえいれば……」

キズメルの悔しそうな声をキリトが拳を地面に叩きつけて遮った。

「ど、どうしたの？キリトくん……」

アスナとキズメルは二人とも同じ心配そうな顔で地面に拳を叩きつけたキリトを見た。

「襲撃したプレイヤーに心当たりがある。第三層の時に俺はそのプレイヤーと戦った……」

二人ともハツとしてキリトへと詰め寄った。

「その人族がどんな奴だったか覚えているか？」

「ああ、メインアームは片手斧で鎖頭巾を被り、変な敬語を話す奴だ」

キズメルの問いにキリトが淀みなく答えるとキズメルは報告を再開した。

「……明後日に森エルフの王城に総攻撃が始まる。森エルフが保持している秘鍵を回収する為に……」

キズメルの言葉にアスナが驚いて立ち上がった。

「そんな！既に秘鍵が持ち出されていた場合はどうするの!？」

アスナの言葉にキズメルは怒りを抑えながら答えた。

「軍の上層部はそんな事は考えていない、戦争の大義名分を手に入れたと浮かれていな」

何処の世界でも同じような答えにアスナは妙に納得してしまい腰を落とした。

「だが、女王様は私と極一部の騎士に密命を与えられた」

キリトとアスナの視線が自分に向いた事を確認してキズメルは言葉を続けた。

「これは極秘だが、私達の女王様は森エルフの王女様と懇意にしておられたんだ。そして、今回の事件が起きて直ぐに女王様は森エルフの王女に事件の事を知らせると同時に秘鍵を持ち出して欲しいとお願いされたのだ」

「ここまで話すとキリトとアスナは理解したのか言葉の続きを口にした。

「その王女様の保護が密命の内容なんだな」

「ああ、その通りだ。……情けない事だが頼む、手を貸してくれ。フォーレンエルフや森エルフの襲撃は確実にある。その時に密命を言い渡された少数の騎士では……」

アスナが言葉を発していたキズメルの口に指を添えて止めた。

「私達はキズメルが好きなの。それなのに助けない、そんな訳ないでしょ?」
キズメルはキリトとアスナの二人を抱きしめた。

騒がしい夜

「フワ殿、すまないが姫様にお食事の時間を」

第八層の迷宮区タワーへと向かい初めて直ぐにメリユジートがフワへと言いだした。

「えらく呑気な事だが、アンタが来るまでの間に姫さんと二人で食べたから心配ないよ・・・な?」

フワはメリユジートの言葉に呆れながらも確認するようにエルミアを見た。

「ああ、礼代わりに食材を出し合って食事をしようと・・・」

エルミアがその時の事を思い出しながら肯定した。

「・・・そうでしたか、お忘れですか?お食事の後はお薬を飲んで頂かないと」

エルミアはメリユジートの言葉を聞いて自分の身体の調子を確かめるように身体を動かした。

「必要ないんじゃないか?自分でも驚くほど身体の調子が良いんだ。これなら薬に頼らなくても――」

「ダメです!この緊急時に何を仰っているんですか!?!いざという時に調子が悪くなった

らどうするんですか!？」

エルミアの樂觀的な言葉にメリュジートは子供を叱る様に声を荒げた。

「本当に調子が悪くなった時に一番困るのは姫様ではなく、私とフワ殿なんですよ……」

「うっ……す、すまない。今すぐ飲むから許して欲しい」

メリュジートの言葉を聞いたエルミアは不安そうな眼差しでフワを見た。

「別に気にしてない。それよりも何かの病気なのか？」

「実は一か月前から原因不明の眩暈や立眩みで倒れられる事があって、身体の調子を整えて気が安らぐ薬を処方されています」

フワの問いにメリュジートが答えるとフワが可笑しそうに笑った。

「失礼だけど、アンタ殿つい顔してるけど細かい所まで気が付くんだな」

「よく言われます。お前は顔に似合わない行動が多いと……」

フワの言葉にメリュジートは苦笑しながら答えた。

「——んくっ、その通りだ。メリュジートが最初に裏切り者の存在に気が付いて私を逃がしてくれたんだ」

薬を飲み込んだエルミアが何処か自慢するように話し始めた。

「……逃げたって何処から？」

「そんなの森エルフの王城からに決まってるだろう」

フワの問いにエルミアが当然とばかりに答えた。

「……森エルフの王城つて第九層にあるんだよな？それが何で逃げたら第八層の端に居るんだよ？」

「《霊樹》を使つて逃げる時に何らかの妨害を受けたからだと思う……」

「一緒に入つた私でさえ、姫様とは違う所に転移してしまつたので」

エルミアは悔しそうな顔をしていたが、メリュジートは何処かホツとした顔をしていてた。

「一時はどうなるかと思いましたがフワ殿のような方が居てくれて本当に助かりました」

『アルゴさんからの情報から考えると、おそらくイベント発生のトリガーが第九層到達とプレイヤーである俺が特定の場所の近くに居たから……だろうな』

あの時の事を思い出すとタイミングがあまりにも良かった為、フワはそんな事を考えながら再び迷宮区タワーへと歩き始めた。

「ところで、今日の夜はどうするんだ？一応姫なんだろう？野宿でもいいのか？」

フワがエルミアを見ながら二人に問いかけた。

「ああ、もちろん我々は野宿するつもりだが、付き合う必要は無いぞ。街で宿に泊まつてくれ」

エルミアの問いにフワは呆れた顔をしながら口を開いた。

「お前アホか？」

あまりにも失礼な言い方にエルミアはキョトンとしたが、代わりにメリュジートが慌て始めた。

「ふ、フワ殿?! 姫様を相手に失礼が過ぎますぞ!」

「あのさ、俺を示すカーソルの色が見えるか？」

フワはメリュジートの言葉を無視して注目させるようにカーソルを指さした。

「お、オレンジだが、それがどうかしたのか？」

エルミアが戸惑いながら答えるとメリュジートが耳打ちをした。

「ひ、姫様。人族では自身を示す色がオレンジだと犯罪者扱いされ街などに入れなくなるんです」

ソレを聞いたエルミアは盛大に焦った。

「そ、そうだったのか! す、すまない! 無神経な事を言ってしまった!」

「それも理由の一つだが、一番重要な事があるだろ」

エルミアは分からないのか首を傾げているが、メリュジートは分かっているのか全く違う方を見て顔を逸らしていた。

その様子を見たフワは大きな溜め息を吐いた。

「俺が受けた依頼は二人を九層にある聖樹の大聖堂に連れていく事だ。その中には姫さんの護衛も含まれている」

フワの言葉を聞いてエルミアは理解したのか目を見開いた。

「だから依頼が終わるまで俺はアンタを守らなきゃならない。それなのに一番危険な寝る時に俺が近くに居ないなんてバカな話があるか？」

「そ、それはそうだが……」

エルミアは何処か申し訳なきようにフワへと視線を向けるが

「元々オレンジだから宿で寝れないし気にする必要なし、と言う事で野宿決定だな。暗くなり次第休むから、暗くなるまで先に進む……でいいよな？」

二人は頷き、三人は少しペースを上げて歩き出した。



暗くなるまで歩いた三人は簡易テントを張り、焚火を起こしている途中でエルミアの顔色が悪くなり立っている事すらままならなくなり焚火の前で横になっていた。

「姫さん、大丈夫……じゃなさそうだな」

「心配ない。いつも通りだ、薬さえ飲めば直ぐに治る……から」

エルミアは気丈に振舞っているが、調子が悪いのが見て取れる。

「その肝心の薬が無い状態で何言つてんだか。もうじきメリユジートが薬を作つて持つて来るからソレまで我慢するか、我慢できないなら無理にでも寝かしてやるけど？」

「……頼む……」

フワはストレージを操作して薬草を手にした。

「《エンゼルトランペット》ってアイテムだ。コレを煎じたモノを飲めば一瞬で眠りに着けるが、少々深い眠りでな。少なくとも明日までは何をされても起きられないが、ソレでもいいか？」

「ああ、フワになら何をされても大丈夫だから……」

フワが説明して確認するとエルミアは弱々しく頷いた。

「つたく、ホントに調子が悪くなると弱々しくなるんだな」

焚火で温まりながら寝ているエルミアを見ながらフワがストレージから出した鍋にエンゼルトランペットを入れてシステムによる調理を始めた。

その光景を見ていたエルミアがクスリと小さく笑った。

「どうした？何か幸せなことでも思い出しているのか？」

「いや、今日の昼食時にも思った事だが、フワは料理スキルを持っているんだって」

「まあな、一人で生きていくには必要なスキルだったからな。そんなに俺が料理して

る姿は可笑しいか？」

焚火に照らされたフワの横顔を見ながらエルミアは否定を口にした。

「ううん、可笑しいって言うよりも落ち着く。調子が悪い時はいつも不安で苦しいんだけど今日は――」

エルミアの言葉を遮る様にフワは《エンゼルランプペット》を煎じたモノを渡した。

「ほら出来たぞ。さつさと飲んで寝ろ、調子悪い時は寝るに限るからな」

差し出されたカップを見てエルミアは少し不満げな顔でフワを見た。

「……女心が分かってないって言われるだろ」

「言われた事無い、というか言う奴が周りに居ないからな」

フワは笑いながら言う。エルミアは不満げな顔のままにカップの中身を飲んだ。

「……此処で寝てもいいか？」

「ダメだ、今すぐテントに行け」

エルミアの懇願はアツサリと切り捨てられた。

「……調子が悪くて立てそうにな……い？」

「エンゼルランプペットの睡眠効果が出始めたんだよ、大人しく寝てろ運んでやるから」

「す、すまな……」

口に出してゐる事とは裏腹にエルミアは半分意識を手放しながら抱えられた時の温か

みに身を委ねた。

「これでよし、きつさと火を消して迎え撃つか」

エルミアをテントに運んだフワは焚火を消した。

唯一の明りである火を消すと周囲は木々が月明かりさえも遮り、何も見えないほどの闇になった。

明りは消えたが、焚火の匂いが残っている。

少し注意すれば誰でも気が付く様なモノだが、フワはソレを逆手に取っていた。

「さて、どれくらい釣れるかな？」

何処か期待する様な声色でフワは微かに笑った。



闇に包まれた森、本来なら風が揺らす木々の音や小さいが確かな存在感のある虫の音が響き、余計な音など何一つ無く安らぎを与えるモノだが、今夜は余計な音が混じっていた。

聞こえるのは金属同士がぶつかる特有の甲高い音や怒りや焦りが混じっている人の声。

「……釣れたのはいいけど各勢力が鉢合わせにでもなったのか……誰一人来ないとは、せめて注意を引きつけている間に別同隊で姫さんを確保しに来ればいいのに……」

暇だ。とフワは呟いて聞こえる剣戟の音に耳を澄ませていると何かが草を掻き分けて近づいてきた。

「——フワ殿、無事ですな？少々手間取りましたが薬の用意が出来ました。此処は危険です、姫様の体調が戻り次第離れましょう」

出て来たのは薬を持ったメリュジートで聞こえる剣戟の所為で焦りながらフワに話しかけていた。

「そりや無理だ。姫さんは明日の朝までは絶対に起きないから」

「そ、そんな一体どうやって？いえ、それよりもどうするんですか？」

フワの淡々とした言葉にメリュジートは更に焦りの色を濃くした。

「テントは見つかりづらいようにカモフラージュしているから、アンタは近くで護衛してくれ」

フワはそう言うのと立ち上がり軽く身体を動かした。

「い、一体何を……？」

「そろそろ俺も寝たいからな、騒音を消しに行くだけ」

メリュジートはフワの言葉を理解できたが納得出来なかった。

「む、無責任な！フワ殿も姫様の護衛が重要だと言っていたではないで——っ!」

フワは声を荒げたメリュジートの腹を殴り黙らせた。

「声が大きいんだよバカ。何の為にテントが見つかりづらいようにカモフラージュしてると思ってるんだ？」

メリュジートは殴られた腹を抱えて答えなかった。

「相手側も此処まで騒げば俺達に気付かれると思うだろ。その状態で此処に来て何も無かつたらどう思う？既に逃げて此処には居ないと思うだろ。だからアンタも隠れながらテントを護衛してくれるだけでいい。もしバレた時には大きな声を出せ、すぐに助けに向かうから」

メリュジートは黙ったまま何度も頷くとテントの近くの草むらへと身を隠した。

「さてと、心配性の奴も居る事だし……さっさと終わらせますか」

メリュジートが隠れるのを確認したフワは剣戟の音がする方へと走り出した。



木々が立ち並ぶ影で剣戟の音を聞きながら仰々しい装備を付けた森エルフが怒りに

震えていた。

「——つく、交戦してから半刻は過ぎたか。既に姫様達は逃げ出している筈……くそっ！ フォールンエルフと人族はまだ分かる！ が、何故ダークエルフまでもが介入してくるのだ!？」

近くの木に拳を叩きつけた森エルフを部下と思われる一人が冷静になるようにと宥めた。

「我々にはやらねばならない事が他にもあります！ この場で戦力を落とさない為にも撤退を！」

「……その通りだ。ここは引くぞ交戦中の味方にも指示を」
「はっ」

部下の森エルフは剣戟の音がする方へと向かって行つた。

見送つた森エルフはしばらくすると顔を俯かせた。

「……くそ、どうしてこんな事に——許さぬ——必ず全ての種族に報復を……」
「報復つて、裏切つたのはアンタ等じゃないのか？」

怒りに震えた森エルフの声に答えるように誰かが問いかけた。

「!? 誰だ……ひ、人族——うう薄汚い人族かぁ……!!」

森エルフは右手に腰の長剣を引き抜き、左手の盾を急所を守る様に構えて、声のする

方へ顔を上げると軽装で短剣を右手に持ったフワが立っていた。

「うーん、やっぱりコレが普通の反応だよな」

フワの視界では《T, laut: Forest Elven General》を指し示す緑色のカーソルがフワを見つけた瞬間、少し濃い赤色に変わっていた。

「二人では何も出来ないクズ種族があ……ちようどいい、皆が集まる前に——「そりゃ無理だな」

固有名がラウトの森エルフの言葉をフワは否定で遮った。

「何が無理だと？皆が集まる前に貴様等クズ種族の一匹を狩るのがか？」

「全部だ。誰も帰って来ないんだ。俺が何処に立っていて何処から来たのか考えてみよう」

ラウトは気が付いた。部下が皆に撤退を伝えに行く為に向かった場所に寸分変わらずフワが立っていた事に。

「は、はったりを……私の部下は精鋭揃いだ。たった一人のクズ種族にやられる訳が——」

ソレを聞いたフワはつまらなさそうな顔をしてラウトに言い放った。

「アレで精鋭？なんだ、大したことないんだな——森エルフって種族も——」

戸惑っていたラウトはフワの言葉を理解するのが遅れたが、理解した瞬間に整った顔

立ちを怒りで歪ませた。

「その口を閉じろおおおっ！そんな出鱈目に惑わされるとでも思ったかあああ!!」

ラウトは右手に構えた長剣を弓の様に引き絞るとソードスキルを発動させた。

——片手剣ソードスキル《ヴォーパル・ストライク》——

相手との間合いを詰めて突きを放つ。単純なソードスキルだが、システムアシストによりジェットの如く加速して逃げる事も受ける事も困難な一撃に変えるソードスキル。

ラウトの構えた長剣がソードスキルの輝きに包まれていく。

フワとラウトの間合いが十メートル以上離れていて、今からではフワがソードスキルを止めるのは間に合わない。

「十分惑わされてると思うんだが……」

フワは焦るどころかラウトの言葉に呆れながら構える事もせずに棒立ちしていた。

「一撃で終わりだあああっ!」

ラウトの叫びと共に発動した《ヴォーパル・ストライク》はジェットの如く加速して十メートル以上の間合いを一息で詰めて、フワの胸元へと剣を突き出した。

凄まじい勢いで突き出した一撃はフワを貫通したように見えたが、フワは突き出された長剣を躲して右脇に抱え込みながら密着するほど間合いを詰め、蛇の様に相手の右腕に自分の右腕を絡ませて肘の逆関節を取ると同時に左手で胸元を掴み、巴投げの様に

《ヴォーパル・ストライク》の勢いを殺さずに身体を捻りながらラウトを投げた。

「つうあつ!?!き、貴様・・・何をしたあつ!?!」

ラウトは投げられて地面に叩きつけられた頭よりも痛みを発している自分の右腕を見て信じられない様に言葉を発した。

まるで粘土の様に自分の右肘があり得ない方向に曲がっていたからだ。

「《蔓落とし》極め、投げ、折るを一連の流れで行う技だ」

信じられない顔で自分の右腕を見るラウトにフワは技の説明をした。

「冥土の土産に教えて上げたけど、まあ意味の無い事だったか?」

フワは腰の後ろに差した短剣を右手で引き抜くと笑みを浮かべた。

こんな状況での笑みなら不快感を与えるモノでなければならぬのに、それを見たラウトは魅入ってしまった。

フワの笑みは見た誰もが優しさを感じてしまう菩薩の様な笑みだったから。

短剣を握った右手が動き出したのを見てラウトは我に返った。

「こ、こんな所で死ぬわけには——イカンのだあッ!!」

膝を着いたままだったが左手の盾を動かして《シールド・バツシュ》を発動させた。

防御スキルの一つで手にした盾を相手に叩きつけて吹き飛ばす。

システムアシストにより超人のような動きで密着した状態のフワを吹き飛ばす事に

成功した。

二、三メートル飛んで着地したフワは驚きは無かったが、追撃を掛けなかった。

ラウトも《シールド・バツシュ》の技後硬直は終わっている筈なのに膝立ちのまま引き裂かれた左腕を見ていた。

肘から手首の手前に掛けて引き裂かれて大量のポリゴンが溢れていた。

「この化物め」

今度のはラウトも見えていた。盾をフワに当たった瞬間、盾を持っていた左腕にフワの右手の短剣が突き刺さったのを。

それでも発動したスキルは止まらず、フワの身体が離れると同時に左腕が引き裂かれた。

痛みに耐えて視線を上に向けたラウトはフワがゆっくりと淀みない動きで《エッジ》を発動させるのを見ていた。

「申し訳ありません 陛下 姫さ」

ラウトの言葉は途切れた。

首から上が地面に落ちて先に消えたから。

「……最後のセリフ、中々面白い事が聞けたか」

フワは黙ったまま短剣をしまうと、ポリゴンの欠片へとなっていくラウトへ見向きも

せ
ず
に
未
だ
に
鳴
り
続
け
て
い
る
剣
戟
の
す
る
方
へ
と
歩
を
進
め
た
。

嘔吐きは誰？

木々の隙間から見える空の色が暗闇から段々と明るくなり始め、森は本来の静けさを取り戻しプログラム通り朝を知らせる鳥の鳴き声が響いていた。

「普通あれだけ暴れたら周囲の鳥は逃げるだろ。このあたりはゲームならではってことか」

フワは改めてゲームの中だという事を実感しながら野営をしていた位置へと向かっていた。

「メリュジート、そこに居るな」

フワが草むらを見ながら声を掛けると、草むらがゴソゴソと動いてメリュジートが這い出てきた。

「ふ、フワ殿？周囲が静かになりましたが、追手は？」

メリュジートは周囲を警戒しながらフワへと問いかけた。

「大体片づけた」

フワが淡々と答え、視線をメリュジートへと向けた。

「か、片づけた……ですか？」

淡々とした答えにメリュジートは少し怯えを見せた。

「ああ、それよりもお前に聞きたい事がある」

「は、はい！な、なんででしょうか？」

そんな状態でフワに問いかけられたメリュジートは冷や汗を浮かべた。

「追手はフォールンエルフと裏切り者の森エルフだよな？」

「お、おそらく……それがどうかしたんですか？」

メリュジートは自信なさそうに目線を下へと向けて答えた。

「そうか……どうやらダークエルフも姫さんを狙ってるらしいから、何か心当たりないかと思ってな」

フワの答えにメリュジートは目を剥いて驚いた。

「だ、ダークエルフですか!? そんな……まさか奴等ダークエルフとも手を……」
「それはない、どうやら対立してたみたいだ。お陰で闇討ちしやすかったからな。確かだと思うぞ」

メリュジートの推察をフワが否定した。

「そ、そうですか……なら一体何処から姫様の情報が？」

「……さあな、それよりも俺は寝るぞ。姫さんが起きたら起こしてくれ」

再び推考し始めたメリユジートを見たフワは大きな欠伸をしながら木の枝へと飛び乗り、幹へともたれ掛かり眠り始めた。



男のダークエルフの騎士が何処かやつれた様子でキズメルに報告を終えた。

「そうか、保護に失敗したか．．．敵は？」

キズメルは予想していたのか、悔しそうに顔を歪ませながらも状況を聞いた。

「全部だ。森エルフにフォールンエルフ、そして——人族だった」

人族、そう言った男のダークエルフはキズメルの肩越しに二人を睨みつけた。

「．．．．そうか、ところでお前以外の仲間は？」

キズメルは仲間が後ろの友人達に対して良い感情を持っていない事に気付きながらも他の仲間の姿が見えない事に疑問を抱いた。

「っ」

男のダークエルフは震えるほど力強く歯を食いしばりながら視線をキズメルから外した。

「ま、まさか．．．」

その様子を察したキズメルは信じられないのか声が震えていた。

「……俺以外——全滅した——」

「ば、バカな！あの中には私なんかよりも強く聡明なオーヴァン騎士団長も居られた筈だ！なのに撤退も出来なかったとでも言うのか!?」

驚きで声を荒げたキズメルの言葉に男のダークエルフは当時を静かに口にし出した。

「途中までは順調だったんだ。森エルフの部隊に遭遇するまでは、数もそこまで多くもなくオーヴァン騎士団長の活躍もあつて徐々に押していたんだ。だが、奴等押されているにも関わらず撤退もせずに食い下がったんだ。——そしてフォールンエルフと人族の奇襲を受けた。森エルフだけでなく我等も互いに疲労していたから奇襲に対応出来ず乱戦になった。自分達の不利を悟ったオーヴァン騎士団長は俺達に命令したんだ、私が敵を抑える間に撤退しろ——と」

キズメルは話を聞いて察したのか、目を閉じて口を開いた。

「そうか、他の仲間はオーヴァン騎士団長と共に……」

キズメルの言葉を聞いた男のダークエルフは話す事も更に力を込めたのか息が荒くなつた。

「そうだったら……本当にそうだったらっ！どれだけ良かったか!!」

その言葉にキズメルは理解が追い付かず言葉を失った。

「オーヴァン騎士団長が自分も残りますと云った仲間を怒鳴りつけて撤退を促した瞬間、上から逆さの状態になった人族が薄暗い光と共に落ちてきて獣のように着地した。そして数秒後にオーヴァン騎士団長の首が身体からズレ落ちた……」

言葉が小さくなるに連れてキズメルだけでなく、後ろにいる二人も息を飲んだ。

「もう、どうしようもなかった。その人族は乱戦の中へと消え、他の仲間は怒りで我を忘れ乱戦へと加わっていった――」

話を聞き終わったキズメルは何度か深呼吸してから口を開いた。

「分かった、貴殿は城に戻り女王陛下に報告を頼む。その後は王女様の命令に従ってくれ」

キズメルの言葉に男のダークエルフは黙ったまま頷いて歩いて行った。

「本当に戦力はコレだけになってしまった……今なら、まだ間に合う。二人もダークエルフの王城へと行ってくれ」

キズメルは少しの間、明るくなりつつある空を眺めると振り返って二人へと告げた。

「き、キズメル？ どういう意味だよ」

二人の内の一人であるキリトがキズメルへと問いかけた。

「おそらく女王陛下は森エルフの王城への戦鬪に協力するように仰るだろう。軍上層部の考え通り全ての秘鍵が持ち出されたとは考えづらい。森エルフの王城さえ落とせ

ば……」

「それでキズメルはどうするの？」

そのキズメルの推察をアスナが遮った。

「私に命じられた密命だ。途中で投げ出す訳にはいかないさ。だが、私は二人に死んで欲しくない……頼む、聞き入れてくれ」

キズメルは縋る様に言葉を吐きだした。

「聞き入れない。聞き入れる訳ないでしょ！私達だつてキズメルに死んで欲しくないのよ！友達なんだから当たり前でしょ！そんな事も分からないの!？」

涙を滲ませたアスナの叫びにキズメルは言葉を失い、キリトには覚悟を与えた。

「確実に王女に会える考えがある」

▽

すっかり日も昇り切った頃に隠されたテントからエルミアが出て日の当たる場所で伸びをした。

「うーん！こんなにぐっすり寝たのは久しぶりだ」

ほどけた髪を手で纏めてポニーテールに戻すと周囲を見回した。

「二人は何処に——メリユジート……」

エルミアは少し呆れながら胡坐を掻きながら寝ているメリユジートへと近づいた。

「起きろ！メリユジート！」

エルミアは大きな声を出すとメリユジートは飛び起きた。

「……んあ？あ、おはようございませぬ様！お体の調子は？」

「うむ、自分でも驚くほど調子が良い。フワに貰った薬のお陰かもしないな」

手を握ったり開いたりして身体の調子を確かめたエルミアは笑顔で答えた。

「ところでフワはどうしたんだ？」

「ああ、フワ殿なら——「俺も起きたよ」——あそこに」

エルミアはメリユジートが指さす方へ視線を向けるとフワが木の枝から飛び降りた。

「ゆっくりと眠れたみたいだな。俺もゆっくり寝れたよ」

「そ、そんなに寝ていた——みたいだな」

エルミアは羞恥心からフワの言葉を否定しかけたが、真上に昇った太陽を見て諦めて同意した。

「それじゃ、さっさと飯食って出発しよう。さすがに今日中に九層には着いておきたいし」

フワはストレージの中から携帯食を取り出すと口に頬張った。



上の階に繋がっている巨大なタワーの前でフワは大きく伸びをした。

「ようやく此処まで来れたか、夕方には九層に着くかな」

フワの言葉にメリュジートが反応した。

「ふ、フワ殿? この《天柱の塔》を半日以下で登り切るのでですか?」

不安げなメリュジートの反応にフワは眉をひそめた。

「何で? 既にボス——お前等と言う守護獣は既に討伐されているんだから別に難しくないだろ?」

「し、しかし《天柱の塔》はモンスターもさることながら内部が迷路のようになっていて簡単には上がれないかと……失礼ですがフワ殿は町には入れない筈、マップデータを得ようにも……」

「それなら心配いらん。もうじき待ち合わせの時間だから——来た」

フワが視線を横に向けると頬に三本の髭のペイントを入れたアルゴが立っていた。

「久しぶりだな、オレっちの新刊見てくれたか?」

「ええ、村にも置いてくれたお陰でこの通り」

フワはストレージから《アルゴの攻略本》を取り出してアルゴに見せた。

「それは良かった。ところで一体どうしたんだ？フワっちがマップデータの購入なんて珍しいし、このお二人さんは？」

アルゴはエルミアとメリュジートを見ながら言った。

「珍しいクエストの関係で護衛まがいな事をしてるんです」

フワの言葉を聞いたアルゴは興味深そうに二人を見た。

「ほう、そうかそうか。マップデータのお代はいいからクリアしたら詳細を教えてくださいナイカ？」

そのアルゴの言葉にフワは笑みを浮かべた。

「分かりました。次に会う時に教えますよ」

アルゴも笑みを浮かべてメニュー画面で第八層の迷宮区タワーのマップデータをフワへと送った。

「たしかに受け取りました。それでは今度会う時は町中で」

「にやはは、そうだな。旨い店を紹介してやるから楽しみにしてくれよ」

フワの言葉の意味に気が付いたアルゴは笑いながら応え姿を消した。

「さてと、最短距離が分かったし日が暮れる前に登り切るぞ」

フワの口調の変わりようにエルミアとメリュジートは驚いていた。

「何だ?どうかしたのか?」

「い、いや・・・あんな言葉遣いが出来るんだなと思つて」

エルミアが驚きながらも思つた事を口にした。

「ソレが出来るなら何故姫様にソレをしないんですか!」

メリュジートは不敬だと考えてか言葉づかいを改めるような事を言つた。

そんな二人の様子を見たフワは当たり前のように溜め息を吐いた。

「俺がああの口調を使う時は年上の人だ。常識の一つだろうが」

「わ、私も年上だと思ふんですが・・・?」

メリュジートは自分自身を指さしながらフワへと問いかけた。

「それと、俺が頼りにする人っていうのも条件の一つなんだよ」

メリュジートに言い放つた。

「それは私が頼りにならないって事ですか?」

する訳ねえだろ。フワはそう呟くとマップデータを開きながらタワーへと足を踏み

入れた。



「ふ、フワ……?」

ボス部屋の入口から入って来た人物を見て、キリトとアスナは固まり、キリトは驚きで消え入りそうな声を出した。

「おう、久しぶりだな。第一層クリア以来だから二カ月ぶりくらいか」

ただ久しぶりに友人に会う様な、異常なほど普通の反応で二人に返した。

「この者と知り合いなのか?」

二人と並ぶように立っていたキズメルはキリトの言葉に驚きながら、二人に問いかけるような目を向けた。

「あ、あなた……正気なの?」

フワの恰好を見てアスナも驚きを隠す事無く問いかけた。

「なんだコイツは? 何であんな装備で此処まで来れるんだ? まともなのは武器くらいではないか」

二人の言葉を聞いてフワは心外そうに顔を背けた。

「しようがねえだろ。ソロでオレンジだし、街に入れないから防具を買う事も作る事も出来なかつたんだから」

今のフワの装備、主に防具系は第一層から何も変わっていないかった。

「ゲームなんだから汚れて臭くなる訳でもないし、別にいいだろ?」

あり得ない事に息を飲むキリトとアスナだが、キズメルだけは違った思考をしていた。

「他の仲間はどうした？ 守って貰いながら来た筈だ。姿くらい見せてもいいんじゃないか？」

キズメルは剣の柄に手を添えて思考を戦闘へと切り替えた。

「仲間？ 此処に居るのが全員だけど……ま、丁度良いや。お前等ダークエルフに聞きたい事があつたんだ。出来ればキリキリと答えてくれれば助かる、拷問するの面倒くさいんだよ」

フワも腰の後ろに差した短剣の柄を握って戦闘態勢に入り、キズメルとフワの間に一触即発の空気が満ちた。

「ま、待つてくれ！ 二人ともストップだ!!」

キリトが一触即発の空気の間に入り二人を止めた。

「しかしキリト——」とにかく待つてくれ！ 二人とも話してからでもいいだろ!？」

う、元はキリトの策だ。最後まで付き合おう」

キズメルの言葉を遮ったキリトの言葉を聞いて二人とも柄から手を離れた。

「それで、一体どういう事なのか説明してくれるのか？」

フワの言葉にキリトは頷いて口を開いた。

「ああ、全部話すからフワも話して欲しい」

内容によるな、フワは呟いてキリトの言葉を待った。

「まず、俺とアスナはキャンペーンクエストを受けている。その中で秘鍵というキーアイテムを集めているんだ。その集めた秘鍵をダークエルフに渡していたんだが、その秘鍵がフォールンエルフの襲撃を受けて奪われてしまったんだ」

「その秘鍵つてのが初耳だな。それと……あの姫さんに何の関係があるんだ？」

フワは背後にいるエルミアを指差した。

「ダークエルフの女王様が全ての秘鍵がフォールンエルフの手に渡る事を避ける為に、密かに懇意にしていた森エルフの王女様に頼んだんだ。森エルフの王城にある秘鍵を持って逃げて欲しいって」

「ダークエルフが保護するから……なるほど、要するにアンタ等の目的は秘鍵つてやつなんだな」

フワが納得すると今度はキリトがフワの言葉を待った。

「俺はこの二人の護衛クエストの真つ最中だ。たしか第九層の《聖大樹の聖堂》に連れて行って欲しいんだよな？」

フワが確認するようにエルミアとメリユジートの方を見ると、二人は肯定するように頷いた。

「ば、バカな！《聖大樹の聖堂》だど!? そんな所に行つて何をするつもりだ貴様等!」
再びキズメルの気配が剣呑とするが、キリトが制止するように口を開いた。

「その秘鍵が全て揃つた状態で聖堂の扉を開くと人族の最大の魔法が無くなるらしいんだ」

「その魔法つてのは何だ？メニューが使えなくなるのか？たかが、そんな事でエルフ達
が此処まで大事にするか？」

「っ」

キリトはフワの言葉を返す事が出来なかつた。

「正直に言つてやる。今、この時、この瞬間、俺は森エルフ、フォールンエルフ、ダーク
エルフ、そしてプレイヤー、何一つ信用出来ねえんだ」

「な、なんで・・・?」

フワの言葉でキリトは固まってしまった。

「別にキリトとアスナが信用できない訳じゃねえんだ。だが、お前達が信用している
ダークエルフは信用できねえ。分かりやすく言うとお前達がこのダークエルフに騙
されてるんじゃないかって事だよ」

「っ貴様！我等ダークエルフを愚弄するか！」

フワの言葉に今度こそキズメルが怒鳴り声を出した。

「どう解釈しようが好きにすればいいがな……常識で考えろよ。一国の女王とその国と不仲である国の王女が懇意にしてるだあ？そんな都合の良い事を信じろって方が無理だろ」

その言葉にキズメルの味方である筈の二人が固まってしまった。

「じ、女王陛下が嘘を申す訳がないだろう!？」

「もしかすると、お前も騙されているのかもな……その女王陛下とやらに」

膨れ上がったキズメルの殺気が何時でも戦闘を始められる事を示していた。

「そんなに信じたいなら確認しようか？今ここで森エルフの王女様によー」

フワが振り向いてエルミアの方を見た。

「正直に答えろ。秘鍵を持って脱出したのか？」

エルミアは首を小さく横に振った。

「持つて来ていない、襲われていた中でそんな余裕はなかった」

フワは質問を続けた。

「ダークエルフの女王と秘密裏に懇意にしていたのか？」

エルミアは先程よりも少し大きく首を横に振った。

「そ、そんなこと出来る訳がない」

フワは最後の質問をした。

「なら何故《聖大樹の聖堂》に行こうとしてるんだ!？」

エルミアは強く首を横に振って地面に膝を着けた。

「知らないんだ!？森エルフに伝わる伝承に従っているだけだ!」

横に立っていたメリュジートが一步前に出た。

「続きは私が話します。この伝承は森エルフの一族の存亡に関わる時、王族の血を引く者が《聖大樹の聖堂》に行き、扉の前で祈り開くと一族を救う力が得られるという簡単なモノです。何があるのかなど知りません。ですが、継るモノがコレしかないのも事実なんです」

メリュジートの言葉を聞き終わったキリトが反応した。

「貴方達に一体なにが……?」

「森エルフの中からフォールンエルフと手を組んで裏切った奴等が居る。そして王城を占拠したらしい」

キリトの疑問にフワが答えると三人は息を飲んだ。

「そんな、それじゃ既に秘鍵は全てフォールンエルフの手に落ちていている事に……」

アスナの呟きに全員が背筋を凍らせた。

「事情は把握したか?こんな状況なんだ信用できないって事も分かってくれたか?」

フワの言葉にキリトは頷いた。

「ああ、俺達もこの情報を早く女王陛下に伝えるよ。まだ間に合うかもしれない」

「期待してるよ。それと、俺がダークエルフを信じられない理由はもう一つあるんだよ」
キリトが声を出す前に、転移門がある上の階から長剣を振りかぶったダークエルフが落ちて来た。

「死いねえええッ!!」

フワを真つ二つにせんと振られた長剣はフワが半身に鳴るだけで躲され地面を打ち、甲高い金属音が部屋中に響き渡った。

フワはダークエルフに向き直る事もせず地面に叩きつけられた長剣を踏みながら身体を廻し左肘でダークエルフの顎を跳ね上げた。

そして、跳ね上がったダークエルフの顔の真ん中に左手に握られた短剣を突き刺した。

「!?!」

顔の真ん中に短剣を突き刺されたダークエルフは言葉を発する事も出来ず、蠢いているとフワに掴まれて地面に叩きつけられた。

「つたく、顔面串刺しにされてるんだからサッサと死ねよ。まあ、コレもゲームらしいと言えただけなんだが」

満タンだったダークエルフのHPバーが急速に減っていく中、キリト達が叫んだ。

「も、もういいだろ!?!早くしないと死んでしま——「何を言ってるんだ?」——なっ!?!」

フワが無造作に短剣を引き抜くとダークエルフはポリゴンの欠片になって弾けた。

全員が息を飲む中、フワは感じていた違和感に気が付いた。

「どうも、そのダークエルフの女騎士を信頼してると思ったらそういう事だったのか」

フワはキリトとアスナに向けて言い放った。

「AIじゃないソレにどれだけ信頼してるのかしらんが忠告しておく。NPCそれらは全てプログラムだ、あんまり依存し過ぎると後で後悔するから気を付けてくれ」

フワは固まったままのキリト達の横を通り過ぎて転移門へと向かった。

本物と偽物と嘘と真実

焚火がキリトの影を作り出し、ゆらゆらと影が揺らめいている。

フワとの会合のお陰で状況がどれほど緊迫しているのかは分かっている。

普通なら休んでいる暇など無いのだが、フワとの会合の所為で3人は動けなくなってしまう。

思えば第九層に入ってからまともに休んでいなかった。

HPがゼロになれば死んでしまう世界の中で、疲労からミスを誘発してしまうと

そう考えると休むのは悪い判断ではないが、キリトは黙ったまま揺らめく火を見ながら一人で座っていた。

『フォーレンエルフは秘鍵を九つ全て集めて《聖大樹の聖堂》にある封印を解き、人族最大の魔法の消去が目的。森エルフは《聖大樹の聖堂》にある扉の前で王族が祈れば一族を救う力が手に入る。一つは秘鍵が揃えば魔法の消去、もう一つは王族が居れば力の獲得。種族が違えば得るモノも変わるのか？』

「隣に座つてもいいか？」

思考という泥沼に沈んでいたキリトは声を掛けられるまで気付かなかつた。

「き、キズメル……？」

焚火を挟んだ向かい側にキズメルが腰を落としてキリトに問いかけていた。

「ダメか？」

少し寂しげなキズメルの顔を見たキリトは慌てて少し横にずれて自分の隣を開けた。

「ありがとう」

キズメルはそう言ったときり先程のキリトと同じように、ゆらゆらと揺らめく焚火の火から目を逸らさなかつた。

「……どうかしたのか？アスナは？」

沈黙に耐えきれなかつたキリトは隣で黙つたまま座っているキズメルに問いかけた。

深刻になり過ぎない様に見える限り明るい声でアスナという緩衝材を挟んで

「アスナならテントの中で眠っている。やはり疲労が溜まっていたのだろう」

キズメルは視線を火から移す事無くそう告げた。

「キリトこそ大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫。ゆっくりするだけでも休めるから」

そうか、キズメルはそう言ったまま微動だにしなかつた。

「……………」
「……………」

今度は何も言わなかった。

そうして一時間か、本当は十分だったのか、キズメルが火を見つめたままで口を開いた。

「私は何なのだろうか？ 教えてくれキリト」

その声は自傷するような声色だった。

「そ、そんなの決まってるじゃないか。俺とアスナの仲間で女王陛下の騎士だろ？」

「ああ、私は女王陛下の騎士だ。……それなのに私はフワというあの男——あの男に恐怖した」

「いくら襲いかかって来たとはいえ、私の同族を殺した時にあの男の目は何も無かった、何も感じていなかった。殺してしまった罪悪感どころか自分の命が助かった安堵や喜びさえも無く。そしてその目で私を見たんだ——あの言葉と共に——」

——NPCそれらは全てプログラムだ——

その言葉がキリトの頭をよぎった。

そして見た。目の前で自分の全てに疑問を持ち、自問自答を繰り返し恐怖で泣きそうなキズメルを。

いつもの凛々しく強い姿と比べるとあまりにも弱々しく、儂げで崩れ落ちてしないそんな女の子の姿を。

『違う．．．違う！フワが何を考えていようと何と言おうとも！今ここに居るキズメルは違う！！自己を疑い！その事に恐怖を抱き！誰かに縋り恐怖を和らげようとしているキズメルだけは違う！キズメルはキズメルなんだ！！』

どこから思っていた事が口に出ていたかはキリトには分からなかった。が、それでも意識せずに抱きしめたキズメルは震えながらもキリトを両手で抱き締め返す。

焚火で映し出された二人の影が、ゆらゆらと儂げに揺れながら。

翌日

日が傾き始め、木々が日差しを遮り薄暗い中をフワ達は進んでいると、先頭にいたフワがある一点を見つめて止まった。

「また見つけたのですか？」

メリュジートが半分呆れながらフワへと声を掛けた。

「ああ、あそこに擬態した《タイニートレント》がいる」

フワは何気なく指差した20メートル先には周囲にある木々と何も変わらない木が一本あった。

「この距離でか……ダメだ。私には判断がつかない……」

エルミアが目を細めてフワが指差す木を見るが、判断がつかず首を横に振った。

「……本当にわからないのか？ 不自然に動いていると思うんだが」

「し、失礼ですが私にも判断がつきません」

フワは呆れを含んだ目でエルミアを見ているとメリュジートが若干焦りながらエルミアに賛同した。

「……あっそ、とりあえず片づけてくるから此处で待つてろ」

フワは右手で短剣を持つと、指差した木へと走り出しながらソードスキルのモーシオンを取り更に加速して《ピアース》を繰り出した。

「ツクウオオオオオ……!!」

《ピアース》を受け、短剣が突き刺さった木が枝を粘土の様にグネグネと動かしながら声をあげた。

一拍置き《ピアース》の硬直が解けたフワは右手逆手に持ち直して《エッジ》を放ち、突き刺した所から右に切り裂きながら短剣を引き抜いた。

「キュ……キュオオオオッ!!」

自身の半分を切り裂かれた瞬間、動きが止まるとグネグネと動かしていた枝を槍の様に尖った先を構えてフワへと狙いを定め

放った

フワは躊躇することなく、間合いを詰めながら何も持っていない左手で枝の一本を添えるように触れながら顔の横に逸らした。

逸らしながら身体を左に半回転させて左から迫る枝へと右逆手に持った短剣を突き刺した。

回転を止める事無く短剣を突き刺した枝を切り裂きながら引き抜き、左手で逸らした枝も切り落とした。

右から迫っていた枝が切り落とす為に振り切つて開いたフワの身体を真正面から突き刺し身体が浮いた。

しかし、枝は身体に届く寸前で左手で横から掴まれ、勢いはフワの《浮身》で殺されて届かなかつた。

掴んだ枝も切り落としたフワは一拍遅れて頭上から襲う枝に見向きもせず《エツジ》を放った。

今度は左から《ピアース》を突き刺した位置まで切り裂いた。

切り口が繋がる様に切られた《タイニートレイン》は切られた時の衝撃と自分の動き

に耐え切れずに真つ二つに折れ、地面に倒れる前にポリゴンの破片になり爆散した。

「凄い、何度見ても思つてしまふくらい鮮やかな手並みだ」

フワへと近づいたエルミアは何処か目を輝かせながらフワを見た。

「ありえない。《タイニートレイン》を倒すには枝の届かない範囲から5、6人で囲んで重装備が囷になりながら隙をついてダメージを与える筈なのに……」

メリュジートが今見た光景を信じられない様に呟きながら近づいた。

「これで《聖大樹の聖堂》に入る為の条件は満たした訳だな？」

ブツブツ呟いているメリュジートを無視してフワは聞いた。

「あ、はい。一人一つブランチがある事が条件ですので」

フワはストレージから木の枝を三本取り出した。

「コレの事か、それじゃ《聖大樹の聖堂》へ——「申し訳ないが、少し時間を貰つてもいいだろうか？」——何だよ？」

フワの言葉を遮る様にメリュジートが声を発した。

「姫様の薬が無いんです。直ぐに採取して作るので少し待つてくれませんか」

メリュジートが自身の懐を確認してからフワに懇願した。

「……まあ、たしかに伝承通り力を授かったとしても後があるからな。分かった、俺と姫さんは此処で待つてるよ」

「ありがとうございます、材料の位置は目星がついているので時間はかかりませんが、すぐに戻ります」

フワは手を振ってメリユジートを見送った。

「そ、その……私の所為で――」

意味も無く二人で居る事に罪悪感を覚えたエルミアがフワへと声を掛けるとフワは近くの木へと座った。

「ただ待っているのもなんだし、飯でも食べるか？」

フワはストレージから携帯食を取り出してエルミアへと差し出した。

「え？……ああ、ありがとうございます」

エルミアはフワの手から携帯食を受け取って隣に座った。

少しの間、二人は一言も話さず沈黙がエルミアを少しずつ責めていた。

「……どうしてフワは私を助けてくれるんだ？」

沈黙に責められ耐え切れなくなったエルミアは意を決したように話し始めた。

「突然どうしたんだ？また体調でもわるくなつたか？」

フワの言葉が、目が、面倒くさそうと言わんばかりのモノになった。

「いや、そうじゃない。あの時……守護獣の部屋であつた人族はフワの知り合いだつたのだろうか？それなのに何で私達の味方をしてくれたんだ？何で私達を助けてくれる

んだ?・・・教えて欲しいんだ」

エルミアは何処か継る様な声を出しながら俯いた。

そんなエルミアを見ていたフワは「笑みを浮かべた。

「面白そうだったから。このまま姫さんの護衛をした方が面白くなる気がしたから手を貸している」

「えっ? いったい・・・どういう」ただ、それだけさ」

エルミアの問いを遮る様にフワは立ち上がると草むらが揺れてメリユジートが戻つて来た。

「お待たせしました。姫様、簡単な食事とお菓を」

「飯ならお前を待つている間に食べた。菓を飲むだけでいい、その出した携帯食は歩きながらお前が食べる」

メリユジートが菓をエルミアに渡したのを見たフワは飲み水をエルミアに渡して立ち上がった。

「さ、案内してくれ。その力がある《聖大樹の聖堂》つて所まで」

先程まで浮かべていた笑みとは違う、小さな子供が浮かべる様な純真な笑顔を浮かべて。

同時間

「でも本当にいいのか？」

キリトは切り揃えられた草の間に身を隠した状態でキズメルに問いかけた。

「密命を受けた騎士もよく使うモノだ見つかる心配はない。それに今の状態では絶対にキリトとアスナは女王陛下に合わせる貰えないだろうからな」

「ま、そうよね。私達じゃないけどプレイヤーがダークエルフを襲ったみたいだし、同じ種族の私達を直接女王陛下に合わせる訳がないものね」

アスナも同じように切り揃えられた草の間に身を隠して答えた。

「すまん。だが女王陛下が信用に値する人物だと思つて貰えるには直接会つて貰うのが一番だと考えてな」

その気持ちは嬉しいけど、キリトとアスナはそう考えながらキズメルの指示通り兵の死角を通りながら城の中を進んでいった。

城壁の前にキズメルの足が止まった。

「……五番目の石を……」

キズメルが石を押し込むと音も立てずに城壁に人が通れる通路が出来た。

「この先に女王陛下がいらつしやる。中に明りがない所為で何も見えない、迷わない様に私の手を握ってくれ」

そう言つてキズメルはキリトに手を差し出した。

「っ」

あまりにもキズメルがいつも通りでキリト自身もいつも通りでいられたが、不意に差し出されたキズメルの手を見て昨夜の事を思い出してしまった。

無意識の内とはいえ、いきなり抱きついてしまったが、あの時に感じたキズメルの体

温は

冷静に考えればゲームの世界なのだからナーヴギアが脳へ送る錯覚の一部なのだが、無性に恥ずかしくなつてしまったのだ。

「キリトくん？」

不意に聞こえたアスナの声は異常に冷たかった。

「そ、そうなのか?! うん! うん! ありがとう!」

キリトは全て反射的に答えて差し出されたキズメルの手を握った。

「ほらアスナも!」

そう言つて自分も手を差し出した瞬間、しまったと自分の行動の失敗を悟った。

「悪いが、あまり騒がれると困るんだが……」

アスナの照れから来る爆発をキズメルの冷静な声が遮った。

「う……うう……!」

今いる場所と状況を思い出したアスナは怒りを抑え込んでキリトのコートの端を握った。

「足元には気を付けてくれ」

アスナがコートの端を握った事を確認したキズメルは通路へと足を踏み出した。

真つ暗な中で螺旋を描く様に上へ上へと昇っていくと進む先に微かな光が見え、その光へと進んでいき、キズメルが先程と同じように何かを押し込むと壁が開いた。

そこは机と椅子があるだけの部屋だが、机や壁の彫刻は品があり歴史を感じる様な部屋だった。

キズメルがキリトの手を離して一歩前に出ると片膝を着いて頭を下げた。

その先には一目見ただけで分かる程、高貴な雰囲気を身に纏った女の人が座っていた。

キリトとアスナは直視する事も失礼なのではと思いつつも、褐色色の肌と尖った耳を見てこの女の人がダークエルフの女王陛下だという事を遅まきながら理解が追いついた。

「急な謁見をお許し下さい。ですが、一刻も早く御報告したい事があります」

「もちろん許しますよキズメル。でも、その前に後ろの方々を御紹介して下さいませんか」

女王陛下の視線がキリトとアスナの方に向いた。

視線を向けられた二人は緊張で身体が固まってしまった。

「失礼しました——」「いえ、名を聞くなら自ら名乗らなくてはね——」「えっ?」

キズメルの言葉を遮って椅子に座っていた女王陛下が立ち上がって三人に近づいた。

「私の名は《エレンミア・シユバル・ジーン・ド・リユースラ》短くエレンミアと呼んで

下さい」

「え、えつと……キリトと申します。そして隣が——」「アスナと申します」

女王陛下の対応に二人は戸惑ったが、キリトが先に立て直し自己紹介するとアスナも同じように自分の名を告げた。

「そうですか、よろしくお願ひしますね。キリトさんとアスナさん」

そう言つて笑つた女王陛下にキリトは思わず疑問を口に出してしまった。

「あの、俺達と同じ種族の者がダークエルフを襲撃したのに——」

キリトは口に出していると自覚して直ぐに口を閉じたが、女王陛下は笑つたまま答えた。

「キズメルが此処に連れてくるくらいです、襲撃したのは貴方達ではないのでしよう? 私とキズメルだつて同じ種族だけど全く別の存在です。それなのに人族は全て同じなんて理屈に合いませんわ。キリトさんとアスナさんというだけでも全く違う様に見える

るのに」

その言葉にキリトとアスナは互いに顔を見合わせてから頭を下げた。

「ありがとうございますエレンミア女王陛下」

「お礼なんて——「申し訳ありませんが御報告を」——そうですわね、キズメル。報告をなさい」

そこからキズメルは得た情報や体験した事を全て話すとエレンミアに問いかけた。

「密命では既知である森エルフの王女の保護でしたが、王女自身が何も分からないと否定しました。情報が錯綜し過ぎた為に一度ご報告と指示を貰いに来ました」

エレンミアが黙るとキリトとアスナも息を飲んでエレンミアを見つめた。

聖堂へ

「これが《聖大樹の聖堂》」

そう呟いたフワの目の前には神秘的な光景があった。

木々が生茂る森の中で、その周囲だけは一つの存在しかなかった。

上にある第九層の天井を貫いて第十層にまで届いているのではないか、そう思つてしまふ程の巨大な木がそびえ立っていた。

車よりも大きく太い根が地に張り巡らされ、巨木に近づけば近づくほど壁の様に行動範囲を失くし、まるで巨木の中へと誘われている様な錯覚を受ける。

その巨木の根元に入口があり、真つ暗なその中は一度中へと足を踏み入れれば二度と出て来れないのではと思わせるモノだった。

「はい、ココが森エルフだけでなく、ダークエルフまでもが自分達の国の名前を頭に付け、所有権を主張すると同時に犯す事の出来ない聖域なのです」

モノ珍しそうに周囲を気にしているフワへと、メリュジートが説明をした。

「へー、なかなか面白いな。ココが聖域・・か」

一通り周囲を見回したフワが笑みを浮かべると根元にある入口へと歩を進めた。

「この中に大いなる力が……」

入口の前に立ったメリュジートが期待を抑えきれずに呟いた。

「……はっ、それじゃ行こうか」

フワも堪え切れず小さく笑い、聖堂の中へと足を踏み入れた。



「コレが私とエルミアさんの関係を証明するモノです」

沈黙したエレンミアが机の中から手紙の束を取り出した。

自分とエルミアとの間の手紙で1つ1つに緻密で威厳のある印も押されていて本物である事が疑いようがなかった。

「エルミアさん自身が知らないと言ったという事は、おそらくフォーレンエルフの《幻墜の秘薬》を飲まされているのでしょうか」

「幻墜の秘薬？」

キリトが繰り返す様に呟いた言葉にエレンミアは静かに頷いた。

「飲ませた者の判断を逆転させ、心身の衰弱と暗示に掛かり易くさせる効果があります」

「そんな……」

キリトは実際に会った時に見たエルミアのHPバーには状態異常を示すアイコンは無かった事を思い出していた。

「森エルフの中に裏切り者が出たと言っていましたね。おそらく少しずつ薬を投与して慣らしていたのでしょうか」

そんなバカな……キリトはそう思いながらも疑問に思っていた事を口に出した。

「エレンミア女王陛下、森エルフには王族が《聖大樹の聖堂》で祈れば一族を救う力が入るといふ伝承があると聞いてました。ダークエルフにも似た様な伝承がありますか？」

既にキリトの中で答えが出ていたが、聞かずには居られなかった。

「そのような伝承はダークエルフにも、そして森エルフにもないでしょう」

出ていた答えとはいえ、キリトは身体が固まってしまった。「が、エレンミアの話はまだ終わっていないかった。

「しかし、力を得るといふ点では似ている伝承があります」

その時、キズメルが気が付いたのか息を飲んだ。

「フォールンエルフになった伝承です。裏切り者の彼らは刃が通らぬ強靱な身体を得る為に封印を解こうとして聖大樹から加護を得られなくなった話が」

「っ」
キリト達は素直に忘れていたのだ。

仕方がなかったのかもしれない。伝承として聞いただけの情報と、実際に潜入した際に直接フォールンエルフから得た情報。

どちらの情報も記憶に残り易く優先度が高いかなど聞くまでの無い事だった。

「人族の魔法の消去なんてついでだったんだ。刃の通らぬ強靱な身体という力が目的」

「女王陛下、お言葉ですが事態は一刻を争います。今すぐ森エルフの王城攻めを中止して《聖大樹の聖堂》へ軍の派遣を」

我に返ったキズメルが焦りながらエレンミアへと提案したが、エレンミアは首を横に振った。

「王城を攻めている部隊から連絡がありました。優勢ではあるが激しい抵抗にあつていると。おそらくダークエルフの部隊を釘付けにする為に大部隊を配置しているのでしょう。今ここで《聖大樹の聖堂》へ向かう為に撤退をしようものなら背後から大打撃を受けるでしょう」

その言葉にキリト達は口を開く事が出来なくなってしまうた。

そして理解した。事態は敵側の思い通りに此方にとっては最悪の事態へと転がって

いる事に。

「ですが、森エルフの王城に大部隊を配置しているという事は《聖大樹の聖堂》にいる敵の数も少ない筈です。——我が騎士キズメルよ」

「はっ」

エレンミアの威厳溢れる声にキズメルは反射的に気を引き締めて直立した。

「貴女に密命を与えます——貴女なら既に私が言わんとしている事がお分かりでしょう。それでも、私の命を聞いてくれますか？」

キズメルは何も言わずに片膝を着けて頭を垂れた。

「……ありがとう。我が騎士キズメルよ、今すぐ《聖大樹の聖堂》へと向かいフォーレンエルフの企みを阻止せよ」

「はっ」

静かに、だが澄んだ声でキズメルは応えた。

いくら敵の数が少ないとはいえ、キズメルが単騎で向かえばソコは死地でしかない。それが分かっているながらもキズメルの声に迷いは無く応え、部屋から出て行こうとした。

「……付いて行くから……」

アスナの小さくも力のある声はキズメルの足を止めるのに十分過ぎた。

「その言葉だけで十分だ。今までこんな私に協力してくれた事を感謝する」

そう言つて再び歩を進めたキズメルの前にキリトが立ち塞いだ。

「これはキズメルだけの問題じゃな——前置きは無しにしよう。俺達は誰が何と言おうとも絶対に付いて行く。たとえ死んでしまつてもだ」

揺るぐ事の無いキリトの目にキズメルは揺らいでしまった。

「キズメル、とても良い友を得ましたね。——その信ずる友と一緒に必ず生きて帰つて来なさい——これは厳命です、何よりも優先しなさい」

ありがたい、小さな声で言いながらキズメルはエレンミアの言葉に答える事無くキリト達と一緒に走り出した。



フワは飛びかかつて半分腐り落ちた鉤爪を付きたてようとした《リビングデッド・ランリザード》の短い両手を短剣を一閃して切り落とした。

アンデット系なのか突き立てる鉤爪が無くなつた事など気にもせず、フワの首めがけて少し長い首を伸ばして喰らい付こうとした。

フワは短剣を右逆手に持ち直しながら後ろに下がり、喰らい付こうとした顎を左手で

下からかち上げ露わになった首へと右逆手の短剣を首の中程まで食い込ませた。

それすらお構いなくフワの顔に喰らい付こうとした瞬間、短剣を差し込まれた所から首を引き千切られた。

「邪魔」

左手で引き千切った首がポリゴンになる前にもう一体へと投げつけると怯んだ様に首を引つ込めた。

「ツシャツ！」

しかし、本当に怯んだのではなく顔を突き出す為に首を引つ込めただけで、突き出すと同時に開いた口から舌が鞭のようにしなりながらフワへと迫った。

迫った舌を躲し伸びきった瞬間に左手で掴んで振り回した。

背後から跳びかかっていた一体に打ち当てて吹き飛ばし、一度振り回し勢いを付けて、もう一度叩きつけて頭を砕いた。

叩きつけた瞬間、腐っていた所為で舌が根元から千切れた。

「つたく、脆過ぎんだよなあ。そのくせ変に死なないから気持ち悪いっつらないし」

フワは千切れてポリゴンへと変わった舌を見ながら呆れていると舌を根元から千切られた個体が口を開いて喰らい付こうと飛びかかった。

飛びかかった個体の頭を短剣で上から突き刺し地面に叩きつけると同時に縫い付け

た。

「だから邪魔だって」

頭を踏んで動かない様にし、中心に突き刺さった短剣で尾まで一気に捌いた。

捌かれた中身は既にポリゴンで、一気に砕け散った。

「……第九層の敵は獣かトレント系だった。なんでアンデット系に変わるんだよ。しかも爬虫類系に」

敵が居なくなつた事を確認したメリュジートとエルミアがフワへと近づくとフワはウンザリしながらメリュジートに問いかけた。

「わ、私も初めて入ったので分からないです」

メリュジートは答えたが、エルミアが焦点の合わない目をしていて答えなかった。

「……どうした、気味が悪くて調子まで悪くなつたか？」

聖大樹の根が複雑に絡まり合つて出来た洞窟は聖域と言うにはあまりに向いていない。
い。

「いつものだから、まだ大丈夫。救う力を得ればこんな体調など吹き飛ばしてくれるさ」
エルミアは気丈に振舞つて笑った。

「……そうかもな、そんな姫さんに朗報だ。やけに作りの良い扉を見つけた。おそろくその先に全てがあるんだろう」

「ありましたか!?早く行きましょ!!」

期待に満ちた足取りでメリュジートは先に進みだした。

弱ったエルミアを置いて。

「ほら、もうすぐだ。自分の足で歩けるだろう?」

もちろんだ、エルミアはフワの言葉に答えながら足を踏み出した。



木々の間を三つの影がすり抜ける様に、しかし凄まじいスピードで駆け抜けていく。

既に日は傾き視界も悪く小さな枝や葉は見えづらく何度も身体を当たり引つ掻きながらスピードを緩めることなく駆けて行く。

「キズメル! 《聖大樹の聖堂》 まで後どのくらいあるんだ!」

影の一つであるキリトが先頭を走るキズメルに問いかけた。

「もうすぐだ! この森を抜けた所にある!」

キズメルは振り返る事無く告げながら走る。

分かったと言いながらキリトは思い出して悔んでいた。

しかし、悔みながらも何かが頭の隅に引つ掛かりを感じていた。

『何だ、俺は何かを忘れている様な気がする。本当に忘れているのか？まだ考え付いていないのか——』

「森を抜けるぞ！」

キリトの思考はキズメルの声によって中断した。

そして目の前の光景に息を飲んだ。

息を飲んだのはキリトだけでなく、アスナも圧倒されて呆然としていた。

「……」が《聖大樹の聖堂》だ。悪いが紹介してる暇は無い、早く中へ踏み込むぞ」

キズメルが呆然とする二人を置いて先に歩を進めた時、キリトの索敵に何かが映った。

「キズメル!!」

キリトが叫ぶのが早かったか、それとも聖大樹の大きな根から飛び出した影がキズメルに襲いかかるのが先だったか。

どちらにせよキズメルは赤いマントを着た影に一撃を喰らい吹き飛ばされた。

「どうやら貴様らが我等の悲願の最後の抵抗者という訳だな」

映し出されたHPバーとその上の名称を表すカーソル。

《N, I z a h h : F a l l e n E l v e n G e n e r a l》

直訳するとフォールンエルフの将軍ノルツァー、金属と革の複合鎧を身に着け深紅の

マントと額から生える二本の角が特徴的なエルフ。キリトとアスナはこのエルフを知っていた。

カーソルの色は黒に近い赤色。第五層で見た時よりも赤色に近づいており、レベル差は縮まっているが圧倒的に向こうが強者である。

「くっ、何で將軍がこんな所に一人で居るんだ？」

キリトは焦りながらも戦闘態勢に入りノルツアーへと問いかけた。

「計画通りとはいえ、こちら手も一杯一杯なのでな。最小限でありながらも最大戦力が最重要地に向かうのはおかしい事ではないだろうか？」

「……なるほど、確かに理にかなっているな」

吹き飛ばされたキズメルが息を荒げながら立ち上がった。

「時間稼ぎも此処までで良いだろう。悪いが我らが悲願の為に此処で死んでもらう！」

ノルツアーは細身の両手剣を握り構えを取った。

「もう少しの所なのに……！」

アスナの堪え切れない悔しさが言葉の端々に滲んでいる。

「いいのか？今アンタ等が騙している男が全て引っくり返すかもしれないぜ」

キリトはノルツアーを揺さぶる為に言ったのだが、その言葉が引つ掛かっている何かを強く揺さぶった。

「心配ない、既に報告は受けている。人族の始末など人族に任せるのが一番だと思わないか？」

ノルツアーはそう言つて顔が裂ける様な笑みを浮かべた。

「まさか……手を組んだつていう人族——犯罪者集団か!？」

ノルツアーは笑みを浮かべたままソードスキルのモーションを取つた。



「この部屋の番人みたいな立ち位置らしいけど大した事ないな」

フワはそう言いながらポリゴン破片となつて砕け散つていく《リビングデッド・リザードマン》を眺めていた。

腐つた身体だが、リミッターが外れた様な常識外の腕力に怯む事無く襲いかかる執拗さに貪欲に肉へ喰らい付く飢え、決して弱い訳ではない相手だったのだ。

それでもフワはつまらなさそうに呟いた。

「……もういいだろ、出て来いよ。聖堂に入った時からずっと付けてたろ」

フワが振り返つて部屋の入口を見るとプレイヤーが4人入口の陰から姿を現した。

全員が隠蔽値の上昇の為に黒いフードを頭から被っていたが部屋に入ると脱いだが、

長身の男だけがポンチョを着たままだった。

「へえ、物の見事に全員緑色か。腹の色は真つ赤に染まっていそうだがな」

4人のカーソルの色を見てフワは見透かしたように笑った。

「How!まさか一目見ただけで気付かれるとは思わなかったぜ、さすが《Origin》って所だな」

ポンチョを着た男が外人の様な反応をした。

「自分達に見ただけで分かる悪の箔が付いたんじゃないっすか」

細い鎖を編み込んだフードを被ったプレイヤーが笑いながら言った。

「バーカ、こんな怪しい4人組が現れたら誰だって疑うつつの」

目の所だけを隠す仮面を付けた男が笑いながら否定した。

「でもでもお!ヘッドには既にオーラっていうか箔みたいなモンがあるくない?」

真つ黒の髪に素朴そうな顔をした女は顔を歪めて媚びた様な不快な声を出している。

「……メリュジート、姫さん連れて先に力とやらを得て来い。ここは俺が何とかしてやるから」

フワは横にいたメリュジートに告げるとメリュジートは少し迷ってからエルミアを連れて奥の部屋へと向かって行つた。

「ありがとうございます!力を得たらすぐに助けに来ます!」

そう言いながら奥の部屋に行き、扉を閉めた。

「助けに……ねえ……」

フワは誰にも聞こえない声で呟いた。

「?どうした?掛かって来ないのか?」

動かない4人を見てフワは不思議そうに首を傾げた。

「その前にアンタに提案があるんだが、話を聞いてみないか?」

ポンチヨを着た男がそう告げた。

早く速く迅く

「その前に一つ聞いてもいいか？」

フワの言葉を聞いたポンチヨを着た男は肩で笑った。

「Ah、いいぜ。何を聞きたいんだ？」

「その《オリジン》？つて何だ？俺の事を指してるよな」

フワはキョトンとした顔で自分を指差しながら質問した。

ポンチヨを着た男は少し呆然としてから吹き出したように笑い声をあげた。

「この状況でそんな事を聞かれるとは思わなかったぜ！」

周りに居た連中も大笑いしていた。

「本気ですかあ？本気でそんな事を聞いているんですかあ!？」

鎖頭巾を被った奴が笑いながらフワへと問いかける。

「ヘッド、こんな奴が本当に《オリジン》なんですか？」

仮面を付けた奴が笑いながらポンチヨの男へと問いかける。

「この状況でこんな事聞くななんて、ビビリ過ぎて頭が可笑しくなつたとしか思えないん

「ですけどお！」

大笑いで更に顔を醜く歪めた女は見ていられないモノになった。

「教えてくれるのか、教えてくれないのか、どっちかにしてくれねえか？」

四人のバカ笑いを聞き流したフワはあきれ顔でポンチヨの男へと問いかけた。

「いやいや失礼したな、まさか自分の事なのに俺達に聞いてくるとは思わなかったんだな」

「俺の事？」

その言葉にフワは覚えが無いのか、眉を顰めた。

「Ah、《Origin》ってのはアンタの二つ名みたいなモンだ。なんでも第一層のボス攻略戦で1人殺し、しかもその後で決闘したプレイヤーも殺そうとしたんだろ？それで他のプレイヤーがアンタを初めての犯罪者という事で《Origin》って呼んでるんだよ」

ポンチヨの男の言葉にフワは手を合わせて納得のポーズを取った。

「なるほど、そう言えばそんな事もあった気がする」

フワの反応にポンチヨの男だけが小さく笑っていた。

「How、人を殺してその反応とはCOOLな奴だな……気に入らねえ……」

最後の言葉は小さくて周りの奴等にも聞こえなかった。

が、歪めた口の端をフワは見逃さなかった。

「その顔、自分よりも劣った人間が大層な事を言ってるじゃねえよ、って顔してる。人種差別者なのか？」

その言葉にポンチヨの男は固まってしまった。

「大方、親が原因だろうな。父親がクズなのか、母親がクズなのか……いや、これは両方クズの方だな」

フワは逆に見下した笑みを浮かべた。

「それでいてファザコンかマザコンか、これはマザコンの方が」

「……………」

自分達の頭が黙り空気が張り詰めて行くのを理解した周りの奴等も黙ってしまった。

「それで、提案とやらは何だ？と言いながらだが、別に言わなくてもいいぞ。予想は付いてるから」

それでもフワの口は閉じなかった。

「どうせ俺達の仲間にならないか？とでも言う気だったんだろ、奥に行った二人に騙されてるから俺達に付かないか？って所か」

全員が黙った中、ポンチヨの男は静かに口を開いた。

「殺せ」

鎖頭巾が一番早く反応して片手用直剣を右手に構えながらフワとの間合いを詰めた。「やっぱアンタ大馬鹿野郎ですねえ!!ヘッドを怒らせるとか一番やつちやいけない事なのにあ!!」

鎖頭巾は笑いながら右手に握った直剣を振りかざしながらフワへと斬りかかった。「あっそう」

フワは慌てることなく右手で引き抜いた短剣を直剣に合わせて弾いた。

「お前は対象外なのか？」

挑発とも取れる言葉を放ったフワだが、鎖頭巾は笑みを浮かべたままだった。

「ヘッドのは次元が違うんですよ、今から楽しみで仕方がないっすからあつー!」

言い終わりより少し早く鎖頭巾が斬ると突きを合わせた様な攻撃をフワへと放った。

突いた後で難いで来る攻撃をフワは短剣で弾いているとフワに対して左側に回った仮面を付けた奴が刃が短い短剣、ナイフと呼ばれるモノを構えた。

「動くなよお!!」

仮面の奴が投擲のソードスキルを発動させるとナイフの刀身が光り、フワへと迫った。

フワは少し強く鎖頭巾の直剣を弾くと身体を後ろへと逸らしながらナイフを躲してバク転で鎖頭巾との距離を取った。

「ほらそこおっ!!」

女が笑みを浮かべながらフワへと細剣ソードスキル放った。

細剣ソードスキル《ホーネスト》

敵との間合いを詰めながら発動し、システムアシストにより速度の上昇と攻撃後も止まらずに敵との間合いを取るソードスキル。

フワが短剣でレイピアの切っ先を弾くと攻撃は外れたが、動きは止まらずにフワとの間合いを空けた。

しかし、少し間合いを空けると動きが止まると同時に技後硬直が始まる。

その技後硬直をフワは追わず、一拍遅れて迫った鎖頭巾のソードスキルの対応をした。

片手直剣ソードスキル《ストライク》

森エルフの将軍が放った《ヴォーパル・ストライク》の下位互換だが、それでもブーストを掛けた《ストライク》は《ヴォーパル・ストライク》に迫るモノがあった。

同じようなモノを受けた事があるフワは胸に向けられた切っ先を同じように短剣で逸らした。

鎖頭巾も同じようにフワから少し間合いが離れた所で技後硬直になった。

が、フワはまた追わずにそこから右に飛び退くとナイフが通過した。

「くそっ！また外した！」

そんな言葉を無視しながらフワは短剣を掲げると頭上からポンチヨの男が大型のダガーを叩きつけた。

ダガーを短剣で受け止めると、ポンチヨの男は力を抜いて短剣からダガーを引き抜き着地と同時に滑る様にダガーを操ってフワへと斬りかかった。

左から右へと振られるダガーを弾くと次は上から下へとダガーが振られる、二度とも同じように弾くと同時に両者揃って後ろに跳ぶと、間を女が《ホーネスト》で駆け抜けた。

「ほらほらあー！どんどん行きますよお!!」

鎖頭巾は少し間合いが開いている中で声を出しながら、右手の直剣をフワへと投げつけた。

投擲スキルで投げてはいない為、切っ先がフワに向いている訳ではない。

それでもフワは短剣で弾き飛ばした。

「シャツハアアア!!」

間合いを詰めながら《クイックチェンジ》で右手に新たな武器、片手斧を握りソードスキルを放った。

片手斧ソードスキル《クリーブ・クリーブス》

踏み込みながら左から右へ横薙ぎ、その勢いのまま踏み込んだ左足を軸に一回転して左から右への横薙ぎから返す刃で左から右へ薙ぐ三連撃のソードスキル。

フワは短剣で最初の横薙ぎを弾くと鎖頭巾が身体を一回転している間に後ろへと跳び範囲外へと逃れた。

その足が着地する前に眼前に迫ったナイフを短剣で弾き着地すると一拍遅れて大型のダガーが頬を掠めた。

頬が少しだけ掠ったのか血の様にポリゴンが少しだけ傷口から零れていた。

「くっくっく……」

ソレを見てポンチヨの男が笑っていた。



ノルツアーの攻撃を防いだキリトは吹き飛ばされ少しHPが削られる。

「くそつ、ソードスキルでもないのに弾く事も受け切る事も出来ないなんて……!」

キリトは眩きながらも急いで立ち上がりノルツアーへと向かう。

「くっ!?!」

盾を装備しているキズメルですらノルツアーの攻撃を受ける度に体勢を崩し何度も

受けられなかった。

「ハアッ!!」

ノルツアーの横合いからアスナが気合いの声と共に《リニア》を繰り出す。ノルツアーは先程の重い攻撃とは裏腹に軽やかに身を翻して避けた。

翻した身が着地すると同時に技後硬直で動けないアスナにノルツアーはソードスキルを発動させた。

――両手剣ソードスキル《アバランシユ》――

相手との間合いを詰めながら袈裟掛けに斬り付ける単純なソードスキルだが、システムアシストにより大きく重量もある両手剣を持つているとは思えないほどの速さで斬り付ける。

「やらせるかアッ!!」

キリトはアスナのフォローの為に《ソニックリープ》を使ってノルツアーの《アバランシユ》を止めようとした。

「甘いっ!」

ノルツアーの言葉通り、両手剣ソードスキルの中で上位に位置する《アバランシユ》に初期で覚える下位の《ソニックリープ》が対抗できる訳がなかった。

キリトの《ソニックリープ》はアッサリと弾かれて《アバランシユ》の勢いは緩む事

無くアスナへと襲いかかった。

それでもアスナは技後硬直が解けると同時に自身の武器《シルバニック・レイピア》を身体を守る様に掲げた。

確かに《シルバニック・レイピア》は強化値の十五回完璧に成功している業物だが、ノルツアーの《アバランシユ》を受け切るのにはレイピアという武器自体の相性が悪かった。

「きゃあああああッ!?!」

アスナの《シルバニック・レイピア》は一瞬拮抗した後、アスナが吹き飛ばすと同時に真つ二つに折れポリゴンとなって砕けた。

「アスナアアアアッ!?!」

吹き飛ばされたアスナはキリトの叫びに

「
」
応えなかった。

しかし、ポリゴンになって砕ける訳でもなく。吹き飛ばされて時の衝撃で気絶しただけだった。

「大丈夫だキリト! 気絶しているだけだ!」

取り乱したキリトを冷静にさせる為にキズメルが叫んだ。

「アスナを守る為にも、今は目の前の敵を倒す事だけを考えるんだ！」

「ああ、分かった！」

その言葉にキリトは気絶したアスナから目を逸らしてノルツアーを睨み付けた。

「あと二人、我等の悲願までもう少しだ！」

《アバランシユ》の技後硬直が解けると両手剣の切っ先をキリトとキズメルへと向けた。

「・・・キリト、私に考えがある。付き合ってくれるか？」

「もちろん、勝機があるなら何だってするさ！」

キリトの言葉を聞いてキズメルは左手の盾を手放して直剣を両手で握った。

「攻撃は最大の防御だ。攻撃を受けるのではなく避け、攻めて攻めまくる！」

「了解!!」

言い終わると同時にキリトは左からキズメルは右からノルツアーに襲い掛かった。

「ぬううっ!?!」

仲間の1人を戦闘不能に追いやった筈なのに怯える事無く、激しい攻めにノルツアーは戸惑いながらも対応しようとした。

「ハアアアアアアアッ!!」

キリトとキズメルの咆哮が重なり、激しく苛烈にノルツアーを攻め立てた。

ノルツアーも両手剣を振るうが、キリトとキズメルは二人とも直剣を両手で握ってお

り簡単に弾き飛ばす事が出来なかった。

「ハアアツ!!」

横薙ぎに振るわれた両手剣を二人とも身体を地面に着くほど下げて躲してキズメルが上体を上げながら構えなおしているノルツアーに一撃を加えた。

「ウオオオツ!!」

続く様にキリトは低い姿勢のままソードスキルを発動させた。

—— 片手直剣ソードスキル 《ホリゾンタル・スクエア》 ——

右から左へと刃が走り、返す刃で左から右へと刃が走る。

キズメルに体勢を崩されたノルツアーはなす術なく胸を二回斬り付けられた。

勢いを殺す事なく一回転して左から右へ、最後に両手で柄を握り直して右から左へと渾身の一撃を放った。

確かに最後の二撃まで入りHPが半分になりながらも、ノルツアーは下がらなかった。

「見事な一撃だった。だが、これで終わりだ!」

ノルツアーは腰を落として両手剣を左腰に構えた。

キリトには見覚えがあつた。

唯一プレイヤーが死んだ第一層のボス 《イルファング・ザ・コボルドロード》 そのボ

!!

その瞬間、キリトの中で何かが弾けた。

それはブチ切れた時の音かもしれないかった。

「仲間を死なせてたまるかあッ!!」

力が欲しい、キリトは頭にその言葉しか浮かばなかった。

『守る為に！目の前のアイツを倒す為に！力が欲しい!!』

全力でノルツァーとの間合いを詰めながらキリトは必死で思い出していた。

——あの時の事を——

フワに連れられてだったが、至った事がある——あの時の戦いを——

「——」

『もっと早く！時間すらも置いていく程に！早く速く……早く!!』

何かを叫びながらキリトはあの時の感覚へと足を踏み入れた。

何もしない

フワはポリゴンが零れる左頬の傷口を短剣を握った右手で拭った。

「How、久しぶりの痛みはどうだい？」

ポンチヨの男だけじゃない。奴の仲間も全員ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「……………」

フワは拭った右手の甲を感慨深そうに眺めた。

「もしかしてやせ我慢っすかあ？」

「いや、理解が追い付いていないんじゃないかねえの？」

「アイツ鈍そうだから、あんな小さな傷じゃ分からないんじゃないの？」

ポンチヨ以外の三人はニヤニヤしたまま次々と口を開いていった。

「くつくつく……残念だが、その痛みは気のせいじゃないぜえ」

ポンチヨの男は笑みを浮かべたまま両腕を横に開いた。

「イツツ・シヨウ・タアーイム!!」

そんな言葉をフワは聞き流しながら表情を替えずに右手の甲を眺めていた。

「ああ、狂ってるだろうな。ただし、物心付く前からだが・・な！」

言葉と共に、その笑みで返した。

「なら狂ったまま踊り狂っちゃまえ！悲鳴を上げながらなア！」

ポンチヨの男の声と共に鎖頭巾がフワへと走りケタケタ笑いながら右手の片手斧を振り上げた。

「本当に頭がパーな人だったんですねえ！」

フワの左肩に目掛けて袈裟掛けに振り降ろした斧の切っ先がフワに当たった。

鎖頭巾がニヤケながら勢いを殺さない様に片手斧ソードスキルを発動させた。

——片手斧ソードスキル《ターンエンド・クリーブ》——

身体を一回転させて腰だめから両手で持ちながら高威力の攻撃を見舞う単純なソードスキル。

鎖頭巾は恐怖で動けないフワの姿を想像しながら《ターンエンド・クリーブ》を放った。

その瞬間、思考が止まった。

「はっ。」

まるで手品の様にフワが消えていたから。

思考が止まり反射的に声が出たのは本当に一瞬だったが、鎖頭巾は何が起きたのか分

正面から攻撃した筈の仲間が真後ろから攻撃された光景が——痛みで絶叫を上げている姿が——

驚きながらも女の動きはソードスキルのシステムアシストで高速化していた。

「遅い、アスナに比べたら汚いナメクジだな」

女は夢だと思った。

自分のレイピアが擦り抜ける様に躲されると同時に、右逆手に握った短剣で自身の左肩から右脇を切り裂き、ポリゴンが溢れるより早く右肩から左脇へと刃が走り胸にバツ印を書かれた時に。

何故なら、こんな動き人に出来る訳ないと思ったから。

「!!!?」

だが、そんな都合の良い夢は襲い掛かった痛みが完全に否定した。

フワは鎖頭巾と同じ様に絶叫を上げる女を無視し、振り返る事無く顔を右に傾けると同時に顔の左側に飛んで来たナイフを左手で掴んだ。

「バルス・・・ってか?」

フワは呟きながらナイフの飛んで来た方へ振り返ると、不意に左腕がブレ、驚愕の表情で固まっている仮面の男へと掴んだナイフを投げ返していた。

同じ様に放たれたナイフの刀身が光に包まれていた。

が、ソレは明らかに仮面の男が投げていたモノとは別モノだった。

残光しか目に残らなかつた仮面の男の右目に、ナイフが突き刺さり顔が跳ね上がった。

「つめっ！めがつ目がアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

仮面はそのままに、根元まで埋まったナイフを抜く事も出来ず絶叫を上げて膝を着いた。

そして、左手のナイフを放つと同時に右手の短剣も放ち、残光が先程と同じようにポンチヨの男の顔を掠った。

「一応言つとくかあ、今のワザと外したから」

ポンチヨの男が短剣が掠った場所を手で触れた。ソコはフワと同じように右頬が小さく裂け、ポリゴンが零れていた。

「っ」

ポンチヨの男は黙つたまま、周りで痛みに溺れて悲鳴を上げている三人を見回した後、フワを見た。

「つて——てめえ……一体何だ？」

その問いにフワは優雅で絵になる仕草と共に自分の胸に右手を添えた。

「《オリジン》って奴でございませう」

フワの言葉に納得が出来る訳がなかった。

「違う……そんな事聞いているんじゃないんだ？」

フワは胸に添えていた右手を伸ばしてポンチョの男を指差した。

「《ペインアブソーバー》……アンタも使ってるんだろ？」

フワの言葉にポンチョの男が苦虫を噛んだ様な表情のまま沈黙した。

「推測になるが、その《オリジン》って言葉は人を殺したから……だけじゃないんだよ。このゲームが始まって一番最初に《ペインアブソーバー》を使ったと思われてるから《オリジン》じゃないのか……ってな」

その言葉を聞いたポンチョの男が信じられない目でフワを見た。

「……狂ってやがる……」

フワは再び化物の笑みを浮かべた。

「言つたら？物心付く前からだつてな」

何時しか周りで上げていた絶叫も小さくなっていた。

「余裕の所を悪いが、武器もない状態で大丈夫かい？」

部位欠損ではないダメージ痕は時間が経てば消える。

それは同時に痛みも引く事に繋がる。

「たった一人だよお」

減ったHPが元に戻った訳ではないが、フワの攻撃を受けた三人の内、鎖頭巾と女の二人が立ち上がった。

「そこで蹲っている最後の一人が立つまで待ってやろうか？」

未だに右目に突き刺さったナイフを抜く事が出来ず、呻いている仮面の奴を指差してフワは笑った。

「はっ、調子に乗っているのも今の内だ。知ってるんだぜ《ペインアブソーバー》を使ってる奴は使つてない奴の攻撃にも痛みが付くんだろお？」

その言葉にフワは溜め息を吐いた。

「脅しにもならないな。ンなこと百も承知だし、逆に言えば《ペインアブソーバー》を使つてない奴にも同じように痛みが付くだろうが」

その言葉を聞いた二人は先程の痛みを思い出したのか身体を震わせた。

「・・・あゝ、本格的に飽きてきた。もう少し楽しむつもりだったけど・・・もういいか」

怯えた二人の反応を見てフワがつまらなさそうに呟いた。

「た、楽しむ・・・だど？」

誰かの驚愕にフワは応えた。

「気付いてなかったのか・・・逆に聞くけど、あんな動きが出来るのに何で最初の方は

短剣でアンタ等の攻撃を受けたりしてたと思うんだ？」

その言葉に目の前であの動きを見てしまった三人は黙ってしまった。

「少しでもプレイヤー同士の殺し合いを楽しむ為に手加減してたんだよ。まあ、狂喜に身を委ねたのは失敗だったかもしれないが、それでも一回痛みを受けただけで腰が引けるし、もう楽しむ気も失せた」

フワは失望に満ちた目で怯えた二人を見た。

「ま、丸腰のくせに……調子に乗るんじゃないやねえエ!!」

その失望の目で見られた二人の内の一人、鎖頭巾が吠えながらフワへと襲い掛かった。

「はっ——」

小さく笑ったポンチョの男は合わせる様にフワとの間合いを詰め出した。

「死ねえエエ!!」

鎖頭巾は雄叫びを上げながら近付き、ソードスキルを使う間合いに入ると唐突に右手に握った片手斧をフワへと投げつけた。

フワは驚く事無く、上半身を傾けて片手斧を躲した。

「ちっ——バカがっ!!」

フワが躲した片手斧が自分へと向かっていたポンチョの男は舌打ちをしながら右に

跳んで避けた。

最後の武器も投げた鎖頭巾は丸腰になった。

「これでええエエツ!!」

が、投げつけると同時に先程フワに弾かれて地面に転がっていた直剣を拾ってソードスキルのモーションを取ろうとした。

「だから、遅いって」

フワは地面に転がっていた直剣の刃の腹を右足で踏みつけて動かない様になると同時に右手でメニューアイコンを押した。

「っあ——」

《クイックチェンジ》という武器派生スキルで一瞬の内に右手に握られた新たな短剣を見て鎖頭巾は息を飲んだ。

「予備の武器くらい誰だつてあるだろう?」

と言つても同じ武器なんだけどな。フワは直剣を拾う為に屈んでいる鎖頭巾を見下しながら右逆手に握った短剣でモーションを取った。

「コレでお前の全てが終了だ」

《エッジ》最初から使える何の特徴もないソードスキルは、フワという使い手により命を刈り取る凶刃と化した。

凶刃は飢えた獣の牙の様に鎖頭巾の首に喰らい付いて一瞬で半分以上を引き裂いた。引き裂かれた首は胴体からも引き千切られかけ、そこから噴水の様にポリゴンが吹き出した。

しばらくポリゴンを吹き出していると、HPが残っているにも関わらずポリゴンの欠片へとなつて砕け散つた。

「さすがにプレイヤーなら死ぬか」

たつた今、人を殺したフワは前にダークエルフが顔面串刺しにされても死ななかつた時の事を思い出して違いを確認していた。

不意にフワが前へと上体を逸らすと首があつた位置をダガーが通り過ぎた。

「今のくらはソードスキルを使えよな臆病モン」

フワはその場所から動く事なく振り向くと同時にダガーを握つた右手を掴んでポンチヨの男と対峙して小さな声で口を開いた。

「どうせ他人を見下し痛ぶる為に《ペインアブソーバー》を使つたんだろうか——後悔しただろ？一度使つたら二度と戻らない事に」

その言葉にポンチヨの男が固まつた。

「そして痛いのが怖いんだ。誰よりも実際に殺した誰かよりも自分が一番恐れてんだろ

？だからリスクを犯さない、常に誰かを盾に出来る様に群れているんだろ？」

フワの目は失望に染まりながらも何処か期待しながら、軽薄な笑みを浮かべて挑発を続けた。

「ホントにくだらねえ奴だな」

フワは掴んだ右手を引いて体勢を崩すと同時に横蹴りを横つ腹に叩き込んで吹き飛ばした。

「ツグハツ!？」

ポンチヨの男は蹴られた箇所を手で押さえながら膝を着いた。

「アアウウツ!？」

ポンチヨの男の苦悶の声に続く様に女の悲鳴が上がった。

女の左大腿部を後ろからフワの短剣が突き刺さっていた。

「おい、黙って逃げようとするなよ」

右手の先が女に向いたままのフワは薄笑いを浮かべていた。

「い……いやあ、お願い……許してえ……」

女は痛みに悶えながらも消え入りそうな声で懇願した。

「……いいぞ、見逃してやってもいい」

フワは何か思い付いたのか更に化物の笑みを濃くした。

「ただし、見逃すのは三人中二人まで・・だ。三人で話し合つて誰が死ぬのか選べ」

ポンチョの男と女はハツとしていると仮面の男が雄叫びと共に立ち上がった。

「アアアアアツ!! つくそがあ! 絶対に殺してやる!!」

仮面が半分割れた所から血走つた眼をしていた。

「おつ、ようやく抜いたのか? 随分と時間が掛かつてたな、この愚図♪」

フワはウインクでもしそうな笑顔で男を迎えた。

「つこの——「ストツプだザザ!」——どうしてですかヘッド!」

痛いのを抑え込んでポンチョの男がザザと呼んだ仮面の男の横に立つた。

「フレリアが裏切りやがった。その所為でモルテがやられた、正直分が悪い。ここは引

くぞ」

その言葉にザザは戸惑つた。

「で、ですがヘッド、フレリアもアイツの攻撃を受けている様に・・・?」

「フレリアも裏切られたのさ、アイツは皆殺しにするつもりらしい。いいから此処は一

旦引くぞ」

ポンチョの男の鬼気迫る雰囲気には飲み込まれて頷いた。

「つま待つてえっ!? ち、違うのっ! アイツが三人の内二人は助けるって——アアアア

アツ!!」

女の言葉は途中で悲鳴に変わった。ポンチョの男が投げたダガーが肩に突き刺さったから。

「行くぞ!!」

ポンチョの男の言葉と共に二人は来た道を辿る様に走り去った。

「アアア! いや! イヤアアアアアア!!」

女の伸ばした手は誰も取らなかつた。

「くはは、嘘も方便って所か」

フワは心底可笑しなモノを見れた事により笑いを口にした。

「さて、見捨てられた憐れな生贄をどうするか?」

ゆつくりとフワは出口へと手を伸ばしたままの女へと近づいた。

「あ……ああ、おね……お願いな何でも……何でもするから……!!」

生にしがみ付き懇願をする女の顔は醜かつた。

ただ、ただ醜くフワは手を掛ける気すら失せた。

「気持ち悪い……お前等の仲間の名前と特徴を全部教える。そしたらお前には何もしないから」

女は喜びながら声を荒げながらも、目の前のフワへの恐怖で声を震わせながら自分が知っている事を全て話した。

「こ、これが私の知っている事です」

「あつそう、テキストも送ってくれたし後は好きにしろ」

『それよりも何時になつたら力とやらは得られるんだらうか?』

かなり前から必死で話す女に興味を失くしていたフワは奥の扉へと目を向けていた。

奥に目を向けていると頭上から変な感じがして上を向きながら振り返ると、ちょうど女の頭上から黒い瘴気を纏った巨大な蛇が襲い掛かった。

「なにっ!?何これいやっ!?たす助けてえっ!」

喰らい付かれた女は啞えられて振り回された。

振り回されまともに体勢を保てなくなつた女はそれでもフワの方へ手を伸ばして三度目の懇願をした。

「助けてえっ!助けてくれるって言ったじゃない!!」

その声、その顔、その性根にフワは見るのも聞くのも感じる事すら嫌気が差した。

「俺は何もしないって言ったんだ。だから何もしない——それに何もしない方が面白くなりそうだしな」

フワは子供の様な期待に満ちた笑顔のまま奥の扉へと向き直つた。

後ろで絶叫と飲み込まれる音を関係無いと聞き流して。

やがて後ろから音が消えると神殿全体が震える様に声が聞こえた。

「生贄は捧げられた。九つの国を全て恐怖に陥れた神である。強靱な身体と共に刃を通さぬ鎧。秘鍵を持つ者よ、全てを奪い取りたい者よ、全てを与えようぞ。そして我と共に更なる力を――」

声が止むと奥の扉が弾け飛んだ。

弾け飛んだ扉がフワへと向かうが、フワは微動だにする事なかった。

扉はフワに当たると通り過ぎて行つた。

「ほう、まさか生き残つてるとは思わなかつたよフワ殿」

声はメリユジートだった。

しかし、その姿はエルフからかけ離れていた。

眼は赤く光り、額からは禍々しいと呼ぶに相応しい二本の角が生え、身体は元がエルフとは考えられないほど筋肉で膨れ上がり、膨れ上がった身体に合わなくなった鎧の変わりに蛇――いや竜と呼ぶに相応しい鱗が天然の鎧と化していた。

「生贄はフワ殿がなるモノだと思つてましたが、これは僥倖ですね」

その姿を見たフワは笑みを浮かべた。

「何が僥倖なんだ？」

「それは……くそ生意気なてめえを俺自身の手で捻り潰せる事がだよ！」

メリユジートは自分の変わった手を見て顔を嬉しそうに歪ませて嬉しそうに吠えて

飛び出した。

「そうかいそうかい、それは面白そうだ。やってみろ役立たず」

フワも再び化物の笑みを貼り付かせて短剣を構えて飛び出した。

そして二つの影が交差した。

望んだ世界

—— ああ、そうだ、これだ、これなんだ、この世界こそ ——

—— 望んでいたモノだったんだ ——

地を踏みしめた時に上がる土煙、身体を動かす度に飛び散る汗、聖大樹から舞い落ちる木の葉

その全てがスローモーションになり、時間が曖昧になる感覚の中でキリトは笑みを浮かべた。

再び相手との間合いを詰めて剣を振るう。

ソードスキルではない。

しかしソードスキルに迫る速度で右手の剣を振るう。

まただ、目の前の相手の顔が驚愕に染まる。

振る前より迅く振り、相手の剣を弾く。

不意に弾かれた事により体勢を崩した所に返す刃で斬り付ける。

目の前の相手の顔は苦渋に歪めながらも再び構えようとす。

また、構え切るより速く右手を振り相手の剣を弾いて体勢を崩す。

相手は倒れまいと必死な形相で踏ん張るが、再び返す刃で斬り付けられる。

その度に目の前の相手は焦りの色を濃くする。

全てが把握できた。

相手の動きも、次にどう動くかも、相手が何を考えているのかすらも

全てが手に取る様に理解できた。

音が無くなっていた事にすら気付いていなかった。

身体を動かす度に身体の何処の筋肉が収縮するのを感じ、身体の何処の筋が悲鳴を上

げているのか分かっていった。

痛みが無い事に感謝していた。

この世界がゲームで良かったと思っていた。

自然と理解していたから。

こんな動きをすれば、自分の身体は数秒と耐えられず壊れ始め激痛に襲われる事

そうなれば自分は今いる感覚に対しての喜びも欲望も高揚感すらも感じる事がなかっただろう。

そう、今いるこの世界が愉しくて仕方がなかった。

加速する思考が常に最善を選び

考えが信号になるよりも迅く身体が動く様な

止まる事無く加速する世界が

自分の脳髓を蕩けさせるほどの刺激を与え続け

与え続けられてもソレに飽きる所か更にもっと、と望んでいる心が

まだだ、もっと早く、それでいて一秒でも長くと呼び

この世界に居る為には、この感覚を味わう為には

どうすればいい、と問い掛け

自分が何をしているのかを思い出す

目の前の相手と刃を交えてる事を

そうか、戦えばいいのか

そして相手に願う

もっと速く動いてくれと、もっと上手く戦ってくれと

今の自分には身体の制御が出来ない

最善であり最速以外の動きは出来ないのだから

少しでも長くするには、少しでも迅くするには

目の前の相手に頼るしかなかったから

——そして誰かの為に振っていた剣が——

——快樂に溺れ自分の為に振っていた——

その事にキリトは気が付いていなかった。

「グッ!？」

そんなキリトと戦っているノルツァーは焦りの色を隠せないでいた。

両手剣は威力も高く、リーチも広い、生半可な武器や防具では受ける事も出来ずに一方的に攻撃が出来る。

が、その分だけ攻撃をする前には力を込める為に溜めが必要になる。

すなわちソレは隙になる。

『また、力を込める寸前を狙った攻撃を!？』

口にするのは簡単だ。

攻撃する寸前に攻撃を剣に当てればいいだけ。

偶然で攻撃が当たる事もあるだろう。

だが、狙って何度も何度も同じ事が出来る訳がなかった。

ノルツァーはモンスターのように決まった行動を取らない、力を込めるタイミングも変えたりフェイクも織り交ぜている。

しかし、既に十を超える回数。

完璧なタイミングで攻撃を当てて剣を弾き体勢を崩されている。

——あり得ない——

ノルツアーは思っていた。

まるで自分の全てを把握されている錯覚に陥りながら。

また体勢を崩されたノルツアーはキリトの攻撃を捌けずに攻撃を受けた。

『何なのだコイツは!?!あの咆哮から動きが全く違うモノに変わった!?!』

何度も攻撃を受けた鎧はポロポロで、既に鎧としての機能は期待できなくなっていた。

踏ん張ったノルツアーは大上段に両手剣を構えた瞬間、再びキリトの狙い澄ました一撃が両手剣の柄を叩いた。

「くっ・・!?!」

ノルツアーは大きく体勢を崩したが、無理に直さずに呻きながら距離を空ける為に転がって膝を着いて、左腰に両手剣を構えてソードスキルのモーションを取った。

『同じように間合いを詰めて来ている筈、この一撃が外れても体勢を立て直す隙を——』
『!!?』

顔を上げた瞬間、ノルツアーは固まった。

目と鼻の先に膝を着いた自分と同じ高さにキリトの顔があつたからだ。

距離を詰めるとは思っていたが、触れるほど近づいてるとは思わなかった。

『いや！肉を切らせて骨を断つ！攻撃を受けても怯まずに——』

覚悟を決めて左腰から放たれたノルツアーの《ブラスト》

しかし、放たれた瞬間に軌道がキリトを避ける様に上へと逸れた。

「なっ!?!」

何故、という言葉が頭に浮かぶと同時に自分が振っている両手剣へと目をやった。

その鍰元には下からキリトの直剣が添えられていた。

必要最低限の力で音も出さずにノルツアーの《ブラスト》は外されたのだ。

「あり得ないッ!?!」

驚愕に包まれたノルツアーが技後硬直で固まる前にキリトは小さく笑みを浮かべた。

『笑った・だど!?! 一歩間違えれば攻撃を受けたかもしれない状況で！今コイツは笑った

のか!?!』

既に触れ合えるほどの距離で小さく笑ったキリトにノルツアーは恐怖を感じた。

「オオオオオッ!!」

吠えたキリトは《ブラスト》を外した時に左に流れた直剣をそのまま左へと引き絞つ

てソードスキルのモーションを取った。

「ガッ!?!」

《ホリゾンタル・スクエア》左から右への一撃でノルツアーの鎧の左側を砕き、次の右から左への一撃で鎧の右側を砕き、完全に鎧を壊した。

「なにつ!?!」

勢いを殺す事なく一回転をして再び右から左への一撃でノルツアーの両手剣を手元から弾き飛ばした。

最後の左から右への一撃を先程と同じように胸の中心へ、されども先程とは違い鎧が無くかなり薄い服だけになった無防備な場所に一撃を放った。

「グハアアアアアッ!?!」

胸に一撃を受けたノルツアーは吹き飛んで地面を転がった。

が、既にHPが三分の一も無かった筈のノルツアーのHPがギリギリ残った。

「……止めのつもりで放ったんだけどな」

技後硬直が解けるまでにキリトは視線を吹き飛んだノルツアーへ向けながら疑問を口に出した。

「ふふふ……ああ、助かったよ。胸にコイツを入れてなかったら終わっていただろうな」

キリトの一撃を受け服が破れた所には光沢を放つ何かが見えていた。

「それは《紅蓮の秘鍵》!?何故貴様が持っている!?!」

キリトの背後からキズメルが驚きに染まった声を上げた。

「そうだ、何でお前が持っているんだ？これじゃ先に中に入ってしまった仲間が封印を解く事が出来ない筈だ」

キズメルの言葉にキリトは考えが追いついた。

「……ふふふ、伝承をよく思い出すのだな」

フォールンエルフは刃の通さぬ強靱な身体を得る為に聖大樹の聖堂の封印を解こうとして聖大樹の恩寵を断たれた。

「その中で強靱な身体を得る為の封印を解くのに秘鍵が必要だと、あつたか？」

ノルツアーのその言葉にキリトとキズメルはハツとした。

「封印を解くのは別のモノが必要なのだよ！それは恩寵を断たれていない高貴なエルフトと生贄だ！」

キリトがすかさず反応した。

「なら、何故先に秘鍵を奪ったんだ？先に封印を解いて力を得てからで良かった筈だ」

キリトの問いにノルツアーは笑みを浮かべた。

「……古の時に我等フォールンエルフは封印を解いたのだ」

その言葉は場を支配した。

「まだ分からないか？この事実を知って私の姿を見ても……」

額の二本の猛々しい角、ギラギラと輝きを放つ赤い目、キリトの攻撃により破壊された鎧と破れた服の中から色あせた鱗の様なモノが見えた。

「まさか……?」

「その通りだ。私は古の時に封印を解いたフォールンエルフの一人なのだよ」

その衝撃にキリトとキズメルはノルツアーの言葉の続きを聞くしかなかった。

「その時に知ったのだ。力を得るのは秘鍵を持つ者だけだと……当時フォールンエルフの中で私だけが――」

ノルツアーは手にした《紅蓮の秘鍵》を掲げた。

「秘鍵の一つである《紅蓮の秘鍵》を持つていたのだ。たしかに私は刃の通らぬ程の強靱な身体を得た。が、聖大樹の恩寵を失くしたフォールンエルフにとって私一人の力では足りなかった」

ノルツアーは色あせた自分の身体を見た。

「そこで我々は時が過ぎるのを待った。気が遠くなるほど長い時が事実を伝承に変え危機感が薄れるのを待ったのだ!」

長い時で蓄積された魂の咆哮が辺りに響いた。

「人族の魔法を消し去る。ソレがフォールンエルフの目的じゃないのか?」

キリトの問いにノルツアーは感心した。

「ほう、どうしてその事を知ってるんだ？」

キリトが不敵な笑みを浮かべた。

「壁に耳あり、障子に目あり。不用意に話なんてするもんじゃないぜ」

ノルツアーは何処か納得したのか小さく頷いた。

「次からは注意しよう。札にどういう事か教えてやろう。我らが消し去りたい人族の魔法とは――街中での攻撃無効化と命の蘇生だよ――」

ホンの数瞬、キリトは思慮し全てを理解した。

「――《圈内》とNPCのリポップ――」
キリトの呟きはノルツアーには届かなかった。

「人族の街の中では全ての攻撃が無効化されて何も破壊出来ず！街の外に出た人族を倒しても次の日には復活する！アレが我々が消し去りたい人族の魔法だ！その為になんて秘鍵を集め最後の扉を開く!!」

更に深い思慮に陥ったキリトは頭が真っ白になっていた。

もし《圈内》が無くなれば、街にいる衛兵がリポップしなくなったら、強力なモンスターもしくは大量のモンスターが街に雪崩れ込めば、始まりの街にいるプレイヤーは全滅。

それどころか何処に居ようとも殺される様になり、今のデスゲームという世界が地獄

と呼ぶに相応しい世界になる。

「……そうか、だから犯罪者集団がフォールンエルフと手を組んだのか」

そしてキリトの頭には喜々として人を殺すプレイヤー達の姿が頭に浮かんだ。

「そうだ、奴等エサを目の前にぶら下げた犬の様に喰い付いたぞ」

静かにキリトが直剣を構えた。

「……そんな事させるか……」

キリトが丸腰のノルツアーに止めを刺そうとした時、奥の真つ暗な聖堂の入口から二つの人影が出てきた。

「あれは……?」

二つの内、一つの影にキリトは見覚えがあった。

第五層で背後からナイフを突き付けた黒ポンチヨの男。

二つの影はキリト達を見つげながらも直ぐに目を離して聖大樹の根をよじ登って姿を消した。

「ふ……ふふふ、ふははははははははははははははははは!!」

その事に気が付いたノルツアーは大きく高笑いを上げた。

「何が可笑しいんだ!?!」

キリトの怒号にノルツアーは笑みを張り付けたまま両手を広げた。

「あの人族が逃げて来たという事は誰かが生贄として喰われたという事だ！」
「っ!？」

キリトはすぐさまノルツアーとの間合いを詰める為に走り出すが、ノルツアーは笑みを浮かべたまま口を開いた。

「話を聞いてくれた事に感謝する。おかげで間に合ったぞ、再び私はあの力を得るのだ!!」

《紅蓮の秘鍵》が強烈な光を放つと同時に衝撃波がキリトを吹き飛ばした。

聖大樹からノルツアーへと流れ出している光。

その光は周囲を照らし出すほど輝きが強いモノだった。

しかし、その強い輝きを放つ光は何処か不安にさせるほど禍々しかった。

「ツグオオオオオオオオオオオオ!!」

その咆哮はノルツアーのモノとは思えなかった。

まるで巨大な竜が吠えているようだった。

光が収まるとノルツアーの姿はそのままにあった。

「ツク・フハハハハハハハ!! そうだ! コレだ! コレなのだ! 時によつて錆びつかされた力が戻ったぞ!!」

自らボロボロだった服を引き千切り変わった上半身を露わにした。

全身を覆う色あせていた鱗が紅蓮と呼ぶに相応しい色と共に光沢があり、一目見ただけで強固な鎧になっている事が分かる。

額から生えていた二本の角は二本とも捻れて禍々しさが増していた。

そしてギラギラだった赤い目は微かな光を含ませながら、猛獣の様に瞳孔が開いていた。

『HPは回復していない。あと一撃、どんな形でも入ればいい』

キリトは自分に酔っているノルツアーへと踏み切ると同時にソードスキルを発動させた。

——片手剣ソードスキル《レイジ・スパーク》——

自身が走りながら地面に触れるくらいで剣を走らせ下から掬いあげる様に相手の首に突きを入れるソードスキル。

「ぬ？」

キリトの行動に気が付くのが遅れたノルツアーは一步も動く事が出来なかった。

「なっ!?!」

しかし、驚きの声を上げたのはキリトだった。

放たれた《レイジ・スパーク》をノルツアーは羽虫を払う様に左手で逸らした。

見ただけで分かる強固な鱗は完璧にキリトの斬撃を防いでダメージを発生させな

かった。

キリトが甘かった。

聞いていた伝承通りノルツアーは刃の通らぬ強靱な身体を手に入れていた。

キリトは驚愕に包まれながら技後硬直で固まった。

「そう焦るでない。既に勝負は決したのだから……しかし、貴様には私をコケにしてくれた借りがある。もう一度剣で戦おうではないか」

ノルツアーは技後硬直で動けないキリトを見下しながら弾き飛ばされた両手剣を拾いに行った。

「さあ、最後まで足掻くがいい。醜く無様に絶望を噛みしめながら踊るがいい。余興にはなるだろう」

技後硬直が終わっても動く事が出来ないキリトへと両手剣の切っ先を向けて嗤った。

出来損ない

激突した二人の顔に既に笑みは無かった。

絶え間ない風を切る音、ソレに合わせる様に金属同士がぶつかる特有の甲高い音

メリユジートが右手の騎士剣を振るい、フワが避けながら右手の短剣で斬り付ける。

フワの攻撃は鎧の様な鱗に阻まれてダメージを与えていない。

メリユジートは当然とばかりの顔をしたまま再び剣を振るった。

が、フワも同じように表情を全く変えずに振るわれた剣を躲した。

そんなフワの様子を見たメリユジートは再び笑いながら口を開いた。

「それにしても良い見せモノだったよ」

言いながらも上段から剣を振り降ろした。

話しながらでも膨れ上がった膂力は剣に凄まじい勢いを与えていた。

「なにが？」

しかし、フワは軽く応えながら半身になって当たり前のように剣を躲して右腕を斬り付けた。

「面白いように俺の手の上で踊ってくれた憐れな人族の事だよ！」

メリュジートは振り降ろした剣を逆袈裟に上げてフワへと斬りかかった。

「ああ、あの三流の脚本による茶番劇の事か」

フワは剣が逆袈裟に振るわれる前に後ろへと下がり、剣を空振りさせると同時に踏み込んで腹を斬り付けた。

「負け惜しみか!?!あの役立たず共に教えられたんだろう?」

メリュジートは空振りさせた勢いのまま身体を回転させて横薙ぎに剣を振るった。

「いや、脚本だけじゃなくてお前の三文芝居の所為で早々に気が付いたよ」

フワは地面すれすれまで身体を倒して横薙ぎを避けながら脇を通り抜けると同時に膝裏を斬り付けた。

「つ具体的に言えもしないくせによおっ!?!」

体勢を崩しかけたメリュジートはたたらを踏んで何とか体勢を整えると、間合いを詰めフワの左肩へと袈裟掛けに斬りかかった。

「薬の材料取りと言って仲間との打ち合わせ、ブランチが必要と言って仲間が聖堂へ集まる為の時間稼ぎ……気が付かない方が難しい」

話してる途中で袈裟掛けに斬りかかって来た剣を上半身を逸らすだけで躲したフワは振られた右腕を斬り付けた。

「分かっているがらっ！言う通りに行動していたとでも!？」

メリュジートは声に怒りを含ませながら返す刃で横薙ぎに剣を振るおうとした。

「まあな」

短く応えたフワは踏み込みながら横薙ぎに振るわれる前の剣の鰐元へと短剣を差し込んで横薙ぎを上へと逸らした。

「っ！舐めるなあああっ！弱小種族の分際でえええ!!」

振るった勢いそのまま逸らされたメリュジートは体勢を崩したが、腕の力だけで無理やりフワの頭目掛けて剣を振るった。

「……」

フワは更に一步踏み込んで左手をメリュジートの右手首へと差し込んで受け止めた。

「なっ!？」

二人の体格差は圧倒的だった。

元からフワよりも高い身長に封印を解いた事により得た膨れ上がった筋肉。

子供と大人位の差がある筈なのにメリュジートの攻撃はフワに受け止められた。

「ば、バカな……!？」

驚愕の表情をして呟いたメリュジートを見てフワは溜め息を吐いた。

「バカはお前だ。崩された体勢で振っただけの、力が入ってない攻撃を受け止められた

事がそんなに可笑しいか？」

フワは左手で受け止めた右腕を掴んで引き込みながら右脇を斬り付けた。

「ぐおっ!？」

メリュジートの苦悶の声を溢した。

「……」

フワは何かを思案するように目を細めた。

「離れろおおおっ!!」

掴んだフワごと振り回すつもりでメリュジートは身体を廻しながら右腕を横へと振り払った。

「……」

アツサリと手を離れたフワは下がりながら廻った事により前に出たメリュジートの左腕を手首へと削ぐように斬り付けた。

その時、響いた甲高い音の中に小さな雑音が混じった。

「くっ!？」

小さくメリュジートが呻くと左腕の鱗が剥がれ掛けてポリゴンが零れていた。

「……なるほど、大体解ってきた」

痛みで動きが止まったメリュジートをフワは何かを探る様に目を向けていた。

「何を言ってやがる」

メリュジートの凄味を利かせた声にフワは薄い笑みを浮かべた。

「だから解ってきたんだよ。どう斬ればその身体にダメージを与えられるか・・とかな」
青筋を立てながらメリュジートは吠えた。

「ふぎけるなあつ！伝説の力を！ようやく手に入れた俺の力を！弱小種族がこの身体に傷を付けるだど!？」

その咆哮を聞いてもフワは薄い笑みを浮かべていた。

「ホントは解ってるんだろ？削れたHP、感じている痛み、少しずつ、でも確実に、自分が死に近づいている事を・・・」

薄い笑みを浮かべたままのフワを見たメリュジートは歯ぎしりを起こすほど歯を食いしばった。

「やってみろ・・・そのハツタリをやってみろおおおお!!」

吠えたメリュジートは型も無く、間合いを詰めながら痾癩を起した子供の様に右手の剣を振り上げた。

「何で使わないんだ？」

咆哮を上げながら迫って来るメリュジートに対してフワは首を傾げた。

「死ねえっ!!」

腕力に任せて振るわれた剣を少し後ろに下がって避け

すぐさま跳ね上がった剣も足を踏みかえて左側面に回り込んで外す

「かあっ!!」

空振ったメリュジートは気合いと共に左腕を振り回し裏拳をフワの顔面へと放った。

「う〜ん?」

フワは前へと屈んで裏拳を躲し、踏み込んで左脇を斬り付けた。

「ぐあっ!!」

痛みで動きが止まったメリュジートの左腕を、皮を剥ぐように腕から手首へと短剣を
奔らせた。

今度はハツキリと甲高い音の中に何か千切れる様な音が部屋に響いた。

「っーあああああああっ!!」

ソレに続く様にメリュジートの絶叫が部屋に響いた。

メリュジートは右手の剣を落としてポリゴンが溢れる左腕を押さえていた。

「その身体、基本的に鱗の一枚一枚が加えられる力によつて合わさり受け流す事に長けているが、逆に一枚一枚は剥がされる力に弱い。ようするに魚の鱗を剥ぐのと一緒なんだよ」

メリュジートに説明するように話しているフワは少し離れて地面に落ちていた鱗を

拾い上げた。

「あと、身体の構造が蛇や魚じゃないから脇、肘、膝などの部分は鱗が薄い。仕方ないよな、厚過ぎると動きに制限が掛かるからな」

鱗がポリゴンとなって弾けるとフワは再び口を開いた。

「あとさ、何でソードスキル使わないんだ？使わない理由が解らないんだが……」

ソードスキルという言葉にメリュジートが身体を震わせて反応した。

「……なるほど、使わないのじゃなくて使えないのか」

「黙れ！」

メリュジートの反応を見たフワは本当につまらなさそうに溜め息を吐いた。

「中途半端な戦いだっただから、本気になるまで次の階層の練習を兼ねて相手してたけどアレが本気だったとは」

「れ、練習？だ……と？」

左手を右手で押さえたままのメリュジートは目を見開いた。

「だって、次の階層はオロチ・エリートなんかが出るらしいからな。似ていそうなお前で練習させて貰ったが――」

失望したと言わんばかりに冷めた目で左腕を抑えているメリュジートを見ていた。

「痛みで自分の得物を落とす、ソードスキルも使えない、コレじゃ一層のコボルトの方が

フワの口の端が歪んだ瞬間、何かが裂ける音と何かが割れる様な音が同時に鳴り響いた。

メリユジートの突き出した右手はフワの防具である衣服を胸から引き裂いたが、薄皮一枚切っただけで空を斬った。

フワは半身になりながら突き出された右腕を躲すと同時にメリユジートの首へと右腕の短剣で突きを放ったが、首の鱗に当たり刀身が砕けた。

「っははは!! やっぱり俺は最強になったんだ!!」

首を突かれた事により息が詰まり、動きが止まったメリユジートはフワの砕けた短剣を見て笑った。

「おい、戻るなよ」

腰を廻し

足が地を離れ

剣閃のような鋭さで

顔面へと叩き込んだ

「!?っ!?」

短剣が砕けた時の突きなんか比べ物にならない程、凄まじい衝撃を顔面に受けたメリュジートはフラフラとよろけて倒れ込んだ。

「つあぐあつ・・・!?」

訳が分からず痛みに呻くメリュジートはすぐ近くに立っているフワを見上げた。

「戻るなよ。今さっきまで獣だったのに、俺の得物が壊れた位で戻るなよ」

そう言ったフワは倒れ込んだメリュジートを見下していた。

「出来損ないは出来損ないらしく、戦うなら何も考えずに殺意に身を委ねればいい。ソレ以外何が出来るんだあっ!?」

メリュジートを見下ろしているフワの眼の中に微かな怒りが混じっていた。

「無手が俺の本来の得物だ。解ったか?この出来損ないがあ」

フワは右足を振りかぶって倒れたままのメリュジートを蹴り飛ばした。

「(はあ!!)」

蹴られた衝撃で地面を転がったメリュジートは怒りで身体を震わせながら顔を上げてフワを睨みつけた。

「条件は五分と五分だ。自分が最強なんだって思うなら掛かって来いよ・・デ・キ・ソ・コ・ナ・イ」

化物の笑みを張り付けたフワは左手で挑発した。

「殺すころす殺すころす殺すころす殺すころす殺す殺してやる弱小種族がああああああ
ああ!!」

本当の獣の様に四足で飛び出したメリユジトは身体を低くしたままフワへと掴み
かかった。



—— 気持ち悪い ——

ずっと思っていた

常に夢を見ているような感覚

自分の事なのに思う様に出来ず

まるで下手な芝居を見ているようで

自分でない自分が姫役の劇のようで

その劇に巻き込まれた憐れな人族が

姫役である私を守る為に助ける為に

何度も何度も手を汚していく事が

そして

助けるなら

本当の私も助けて欲しいと

願ってしまおう自分が

本当に——気持ち悪い——

「殺すころす殺すころす殺すころす殺すころす殺す殺してやる弱小種族がああああああ
ああっ!!」

その時私を操り人形にしていた悪魔の絶叫が頭に響いた。

——生きてる——

まず思った事がソレだった。

聖大樹の封じられた力の封印を解くには王族の清い血が必要、封印が解かれたのなら
自分は生贄になっている筈なのに

「なんで……?」

呟きながら絶叫が聞こえてきた方へと顔を向けた。

視界には自分の知っている筈の者達が戦っていた。

一人は私を操っていた悪魔。

悪魔という言葉が似合う様な膨れ上がった体格に体中を覆う鎧の様な鱗。

巨大でありながら肉を簡単に斬り裂けそうなほど鋭い爪。

アレこそが封印を解いた事により得た力なのだろう。

遠目で見ただけで分かる強大な力。

ソレを手にした筈の悪魔は

口からは雄叫びを上げ

手足を全力で振るう

しかし

その顔は悪魔などではなく

必死に抗う獣の様に見えた。

「アアアアアアアア!!」

獣は低い姿勢のまま掴み掛かり身体に爪を突き立てようとした瞬間

跳ね上がった膝が顎を打ち抜き、顔面も跳ね上がり力が抜ける。

跳ね上がった顔面を追う様に膝蹴りした足からそのまま蹴りが放たれ、顔面を蹴り抜く。

そのまま蹴り抜いた勢いで前に出た足が地に着くと同時に再び跳ね上がり、獣の腹に蹴りを叩き込む。

「アグウツ・・!」

その雄叫びは一瞬にして苦痛に悶える呻きに変わった。

しかし、相手の動きは止まらず

右足を踏み込むと同時に左足で獣の右足に蹴りを放った。

「グアツ・・・！」

骨が折れそうな音が鳴り、力が抜けたように膝が曲がり獣が落ちる。

獣の右足へ蹴りを放った左足を地に踏みしめて、左足を支点に密着するほど間合いを詰めた。

間合いを詰める勢いも乗せて右拳が狙い澄ましたように落ちた獣の顔面に叩き込まれた。

横に弾ける顔につられる様に身体も横へと流れると左拳が腹に突き刺さった。

強制的に空気を吐き出された獣は空気を求める為に顎を上げた。

上げた瞬間、再び振られた右拳が叩き込まれて首が捻れて吹き飛んだ。

「つあ・・・あぐうあつ・・・」

地面に投げ出された獣は呻き声にもならない様な声を出す。

一方的だった。伝承の力を得た悪魔とも呼べる相手を無手で一方的に叩きのめす人族。

エルミアは知っているフワの姿とはかけ離れ過ぎて信じられなかった。

倒れたメリュジートを見下ろしているフワの姿は化物以外の何モノでもなかったか

ら。

「……ホントにどうしようもない奴だな」

倒れたメリュジートを見下ろしていたフワが失望したように呟いた。

「自分が出来損ないだと理解していない。だから自分を捨て切れず、獣になる事も出来ず、痛みには怯え苦しみ、自分を守ろうとする」

痛みに呻いていたメリュジートは固まった。

「お前は出来損ないですらない。自己を認識する事すら出来ないガキだ。与えられた力で強くなったと精一杯虚勢を張るどうしようもないガキだ」

まるで幽鬼のように口を開かず立ち上がったメリュジートの目は焦点が合っていないかった。

しかしソレでもメリュジートはフワを睨み付けていた。

「ちがうちがうちがう——ぼくはおれはわたしは——つよくつよくつよく——よわくないよわくないよわくない——ひけんをやっつももってるんだ——しじょうさいきょうのふおーるんえるふなんだ——なんだなんだ——最強なんだああああああああああ!!!」

絶叫と上げながらメリュジートはフワへと飛び掛かった。

「ああああああああああああ!!!」

飛びながらフワの首へと左腕を突き出した。

「不破圓明流」

フワは突き出された左手を右拳で打ち下ろして自身の左脇へと逸らしながら右腕を曲げ、逸らされて間合いが詰まったメリユジートの左鎖骨へと上から肘を打ち込んだ。骨が碎ける鈍いながらも高い音が鳴り響いた。

「《蛇破山》」

「うああああああああああ!!」

メリユジートは絶叫を上げながらも左鎖骨が叩き折られた痛みで固まること無く、返す刃で下から掬うように右手をフワの首へと突き出した。

先程とは真逆に突き出された右手を左拳で打ち上げて顔の右横へと逸らすと同時に左腕を曲げ、メリユジートの鳩尾へと下から肘を打ち込んだ。

鈍い音がすると同時にメリユジートは吹き飛んだ。

「《裏蛇破山》——朔光——」

設定

——
でくのぼう
——

——
みかけだおし
——

——
うどのたいぼく
——

——
できそこない
——

ソレら全てが俺の評価だった。

細身のフォレストエルフどころかダークエルフやフォールンエルフと比べても戦士に相応しい恵まれた体格。

並の使い手が振るう剣に比べると、恵まれた体格に相応しい膂力や間合いの広さで上

を行く。

それでも俺の評価はソレだった。

——ソードスキル——を何一つ使うことが出来なかったから。

ソードスキルを使えば自分の限界を超えたかのような動き、その動きに相応しい速度や膂力が得られる。

恵まれた体格からくる膂力や間合いの広さなどソードスキルの前には意味のないモノだった。

ソードスキルと打ち合えば一方的に打ち負ける。

盾で守りに入ればソードスキルの速度に付いていけず崩される。

何をしてもしもソードスキルに打ちのめされた。

そして、何をしてもしもソードスキルは使えなかった。

だから

木偶の坊、見掛け倒し、独活の大木、出来そこない

ソレは全て俺を指した言葉だった。

だから全てを利用した。

だからだからフオールンエルフの言いなりになった。

だからだからだから長い時間の掛けて汚らわしい《幻墜の秘薬》をエルミアに馴染ませた。

だからだからだからだから薄汚い人族のガキ相手に下手に出て協力を仰いだ。

だからだからだからだからだからだからだからソードスキルを使えなくても、ソードスキルを使うモノたち全てを圧倒できる力を求めた。

だからだからだからだからだからだからだから何時も眼の前で振るわれていた輝きを力で塗り潰せる力を手に入れた。

いや、あつてはならない。

あつてしまったら

自分は一体なんだったのだろうか？

「どうでもいい設定」

あまりにも簡素で、あまりにも残酷で、あまりにも無関心で、あまりにも無く全てを内包した言葉はメリュジートの全てを壊した。

「くだらねえな、ペラペラ話す元気があるなら立てよ。立ち上がって喰らい付けよ」
　　這い蹲ったままのメリュジートへとフワは静かに歩を進めた。

「出来そこないだと分かっているなら、死ぬまで足掻き続けることしか出来ねえだろうが」

フワは興味を失ったのか、這い蹲ったままのメリユジートの顔面を蹴り抜いて弾き飛ばしHPバーをゼロにした。

「もういい。ゲームの設定に期待しすぎた俺がバカだった」

フワは蹴り飛ばしたメリユジートに目を向けることもせず、祭壇に繋がる扉の前で座り込んでいるエルミアへと歩を進めた。

「血が必要だつて聞いてたから無事かどうかは五分だったが、無事だなにより」

座り込んで茫然としたままのエルミアを見て一息ついた。

「おーい、まだ薬が効いて動けないのか？」

フワの顔を見続けていたエルミアは眼の前で振られる手で少しだけ正気に戻った。

「あつ・・・なつ・・・なにが・・・」

「お、正気に戻ったか？ほら、立てるか？」

フワは振っていた手を止めてエルミアへと差し出した。

「あ・・・ああ、ありが——　フワ？」

エルミアは差し出された手を取ろうとしたら、フワは歪んだ笑みを浮かべて手を戻し振り返った。

「っ!？」

エルミアも釣られるようにフワの視線の先を見ると驚きで息が詰まった。

音もなく何かに引つ張り上げられるようにメリュジートが立ち上がった。

「何だ、まだ立てたんだ。いや、それどころかHPが全快してるじゃねえか。まだ隠し玉があるとは思わなかったよ」

フワの眼に映るメリュジートのHPバーは満タンになっていた。

フワの問いにメリュジートは答えることなく顔は下を向いたままだった。

「?・・・あ?お前まさか・・・」

何かに気が付いたフワの声が聞こえたのか、メリュジートは顔を俯かせたまま笑うように肩を揺らし始めた。

「力を求める者よ。生贄を捧げ、手に入れた力を超え、更なる力を求める者よ。私もそなたを求めよう。愛と欲に勝る力はないのだから」

部屋自体が話すかのように声が響き渡ると、メリュジートはフワに背を向けて走り出して出口へと向かった。

「逃がす訳ねえだろ」

フワは追撃を掛けるためにメリユジートよりも一拍早く跳び出していた。
「つちー！」

唐突にフワは舌打ちすると同時に跳ね返るように真逆へと跳び、エルミアを抱えて何かを避けるように間合いを取った。

エルミアが元居た位置を真上から黒い瘴気を纏った巨大な蛇が喰らい付いた。

「あつ・・!?!」

フワは自分の背後へとエルミアを投げ捨てるように置いた。

「逃がしたか、もう追いつけないなこりゃ」

既に部屋から出て足音すら遠くなっている方を見てフワは諦めたように眩くと視線を近くの蛇へと戻した。

「さつき女一人喰らっていただろうが、まだ足りねえってか?」

フワは此方の様子を窺っている蛇を鬱陶しそうに見ながら、ため息を吐いた。

「もういいや、今回はカルマの回復が目的だったしな」

フワは首だけを動かして後ろにいるエルミアを見てから蛇へと向き直ると同時にストレージに戻っていた短剣を右手へと取り出した。

よそ見をしたフワへと蛇は弾かれるように飛び出して、顔を横にしてフワの胴体に喰らい付こうと口を開いた。

蛇の開いた口は一瞬にして閉じられて横に弾き飛ばされた。

弾き飛ばされた蛇の頭には蹴り跡があり、フワは蹴りを放ち宙に浮いた右足を蛇へと踏み出し、右腕を左に引絞って《エツジ》の構えを取った。

蹴りを頭に入れられた蛇は素早く頭を振って正気を保ち、フワを威嚇するように口を開いて唸り声をあげた。

しかし、フワの眼は瞬き一つすることなく狙いを澄まし《エツジ》を放った。

放たれた《エツジ》は開かれた口の中心に向かい、顔の半ばまで断ち切った。

顔の半ばまで断ち切られた蛇は崩れ落ちるように頭を地に着けようとした瞬間、フワの左手で頭を掴まれた。

「一枚に下ろしてやるよ」

眩きながら下顎に右足を掛けて地面に叩きつけ、頭を掴んだままの左手を上へと広げた。

半ばまで断ち切られた部位から肉が引き裂かれる音が鳴り響き、一瞬で体の半分が引き裂かれた。

フワが蛇の頭を放すと地面に落ちてポリゴンの欠片へと爆散し、フワのレベルが上がった音が鳴り響いた。

『あとは姫さんを教会に連れて行くだけか。下手な妨害は先に逃げたアイツに集中する

だろうし……何か忘れているような気が……』

そう考えながらエルミアの所に向かっていたフワはハツとした。

「そうだ妨害だ！キリト達に嘘を吐いたんだっ！このままじゃアイツと鉢合わせするかも！」

今のキリト達ではアイツに勝てないと思つたフワは焦りながらエルミアを肩へと抱え上げた。

「……今度はどうしたんだ？」

突然抱え上げられたエルミアは驚きで声をあげた。

「悪いが人命救助の為だ我慢してくれ！」

珍しいフワの焦りが混じつた声を聞きながらエルミアは姿勢を保つことで必死になつていた。

「……………ホントに夢みたいだった……………」

遠ざかつていく祭壇を見ながらエルミアは小さく呟いた。

悪夢から始まつた夢物語だったが、今はハッピーエンドに向かっているとエルミアは思っていた。

しかし、不破圓明流が関わった物語に何もかもが上手くいった物語など存在しない。

その事は不破しか知らない事だった。

そして、その物語に巻き込まれたのはエルミアだけではなかった。

「ほらほら、どうした！先ほどの動きに比べればまるで子供だぞ！」

ノルツアーの愉悦に染まった声を聞きながらキリトは必死に喰らい付いていた。

「つぐ——くそっ！何で!？」

ノルツアーの攻撃に弾き飛ばされながらも自分への不甲斐無さに悔しさを感じていた。

「あの迅さはどうした!?!人の限界を超えたかのような読みに動き！出さねばアツサリ死ぬだけだぞ！」

大上段から振られる両手剣をフワは両手で構えた片手剣で逸らしながらも焦りを口

に出した。

「ついで!?あの状態にならないんだ!?今こそ必要な時だろ!」

ノルツアーを追い詰めていた”あの状態”

視界に映るモノ全てがスローモーションになり、時間の感覚が曖昧になり、自分の全てを把握できた”あの状態”

今のキリトに”なれる”訳がなかった。

正確に言うとう”入れる”訳がなかった。

あの時キリト自身が思っていた事——”この世界”こそ望んでいたモノだった——

あの時キリトの”世界”には戦う敵とキリト自身しかいなく、誰かの為ではなく自分の為であり、他の事に意識を割かずに戦いに没頭していた。

「このままじゃ安全地帯すらないデスゲームに——!」

ノルツアーから全ての目的を聞かされ、自分が負ければ約9,000人ものプレイヤーが命の危機に晒されると知った今のキリトの精神状態では”あの世界”に入れる訳がなかった。

キリトには見えず知らずの9,000弱もの命は、あまりに重いモノだった。

「どうやら一過性のモノだったらしいな。久方ぶりに完全に戻った力を慣らす為に遊ん

でいたが、もうよい」

ノルツアーは体制を崩したキリトへと肉薄して《ブラスト》を放った。
『まともに受け止めたら死ぬ！』

ノルツアーの放った《ブラスト》は風ごと叩き付けるような勢いでキリトへと向かい甲高い音と一拍置いて少し離れた位置に片手剣が突き刺さった。

「ほう、自らの剣と右手を犠牲にすることで何とか躲したか」

ノルツアーが感心するように見た先には、上半身を限界まで後ろに倒しポリゴンが溢れる右手を押さえるキリトがあつた。

「とつさに剣を差し込んで受ける力を体を倒して受け流した事は褒めてやる。しかし、この次があるのかね？」

技後硬直が解けたノルツアーはゆっくりと片手に握った両手剣を上半身を戻したキリトへと突き付けた。

「……くそっ」

小さくキリトは呟くとノルツアーは満足したように両手剣を構えた。

「ごめん皆。やつぱり俺なんかじゃ……」

キリトは遣る瀬なく目を閉じ、風を切る音と衝撃音が響き何か地面を転がった。

「まだまだ、まだ私にはやれる事がある」

キリトが目を開けると隣にキズメルが息を切らしながら立っていた。

「ふふふ、力を手に入れたせいかな周囲へ気を配れなくなっちゃってしまっているな。必要かどうかは別にしただがな」

キズメルの攻撃で吹き飛ばされたノルツァーが何事もなかった様に笑った。

「駄目だキズメル。もういいからアスナを連れて逃げてくれ。キズメルのお陰で剣を取りに行けるから俺が時間を稼ぐからその間に――」

「キリトは私が守る」

「!?」

キリトの言葉を遮ってキズメルが呟いた。

「もう私は女王陛下の騎士ではない」

「な、何を言っているんだ？女王陛下の騎士である事はキズメルの誇りだろ？」

その言葉に何かを悟ってしまったキリトは思い止まらせる為に言葉を吐いた。

「女王陛下の厳命を守れないのだ。騎士失格さ」

覚悟を決めたキズメルの瞳にキリトは心臓を鷲掴みにされた。

「だ、駄目だ!!今なら間に合うアスナを連れて生きて戻ってくれ!!」

キリトは咄嗟に左手をキズメルへと伸ばした。

「女王陛下の騎士ではないが、私は騎士だ。だから私は――キリトを守る――」

その手は宙を切りキズメルはノルツァーの元へと走り出した。

「この力に対して何が出来るのだ？見せて見る騎士とやら!!」

ノルツァーは満面の笑みを浮かべながら、その場から動くことなく《ブラスト》を放つ構えを取った。

「ま、予想は付くがな」

その笑みから零れた小さな眩きは誰にも聞こえなかった。

「その油断が命取りだ!!カレス・オーの聖大樹よ!我に最後の秘蹟を授けたまえ!!」

ノルツァーの間合いに入った瞬間、キズメルが叫ぶと胸の中心から鮮やかな黄緑色の輝きが迸った。

キズメルから放たれた輝きで視界が潰される中、甲高い音がしてキリトの目の前に何が吹き飛ばされた。

「き、きずめる……」

キリトは確認するまでもなく、目の前に吹き飛ばされて来たのがキズメルだと確信して縋りついた。

「……今、わかった……」

何の事かは分からないがキリトは無言でキズメルの言葉の続きを待った。

「私は……何度もコレを繰り返していたのだな。最後の秘蹟を使って何度も私は倒れたのだな……」

その言葉は自己の崩壊に繋がる言葉だった。

その言葉にキリトは信じられないようにキズメルを見つめた。

「記憶——ではないな……あの男の言った通り、私はこの世界の設定の一部なんだろうな」

ふと浮かんだ残酷な言葉すら今のキズメルにはどうでもよかった。

「何度も見た光景だが、一つだけ鮮明に思い出せる。……キリトの顔だ。私を救えなかった悲しみに満ち溢れた顔だけだな」

——そして今も同じ顔をしている——

既にポリゴンの欠片へととなっている筈のキズメルは右手を動かしてキリトの左頬へと触れた。

「こんな私へ本物の感情を見せてくれた君を——私は好きになっていた——」

今、起きている奇跡に感謝している。伝えたい事を伝えられるのだから——

「……ありがとう、こんな私に本物の思いを見せてくれて、こんな私に温もりを感じさせてくれて、こんな私の思いを受け止めてくれて……ありがとう」

キリトは震える手で自分の頬に添えられた手に触れた。

——私の好きな人よ——

一秒、キズメルはポリゴンの欠片へと変わりキリトに降り掛かった。

その一秒だけ、二人は本当に触れ合えたとキズメルは確信していた。

それが一秒だけとしてもキズメルは——

キズメルの思い以外は全て理解していたキリトは無言のままキズメルのポリゴンの欠片を最後まで見ていた。

「予想していたとはいえ、この程度か」

その光景を更なる絶望へと落とす声が聞こえるまで。

「この期に及んで聖大樹の事を理解していなかったとは思わなかったぞ。本当に愚かな騎士だった」

ノルツアーは何事もなく立ったまま呆れた様子でキリト達を眺めていた。

「聖大樹は神聖なモノではないことなど、周囲の景色を見れば理解出来るモノと違って

いたが――」

ノルツアーは言葉を切って周囲を見まわした。

そこは巨大な聖大樹があるだけだった。

根が張り巡らされている所には草木の一つすら存在せず、まるで聖大樹が周りの命を吸い取っている様に見えた。

「聖大樹など只の封印装置、それもタチの悪い代物よ。周囲の命を吸い取って力に変えるモノ、お世辞にも神聖なモノとは言えないだろう?」

キリトは無言のままキズメルの剣を手にとつて立ち上がった。

「最後の秘蹟は周囲のモノを強制的に聖大樹へと命を吸わせるだけのモノ!そして封印していた力を手にした者にそんなモノが効く訳がないだろうに!いや、少しの間でも動きが取れなかったのだ!手向けとして褒めておこうか!」

ノルツアーは憐れな喜劇を見たように同情の言葉と共に笑みを周囲に撒き散らした。

「どうでもいい、オレハキサマヲ――」

――殺す――

キリトは既に”あの世界”に踏み込んでいた。

先程よりも深く、戦いではなく殺す為に、敵の顔すら見えていなかった。

「――良い。先程の者が居なければソチを求めていたであろう――」

ノルツァーの背後にある聖大樹の聖堂の入り口から、この場にいる誰よりも化け物じみたモノが現れた。

認識の違い

「しかし、やはり先の方の方が良いか。手にした剣は飾りではない、さぞかし見事なソードスキルを使うのだろうか」

現れた化け物は虚ろな眼をしたキリトを見て、舌舐めずりでもするかのように呟いた。「め・リユジート……何故その姿をしている!? 何故貴様が秘鍵を持っている!? それも一つでは無いな! 言え! 何個持っているのだ!?!」

自分も変わっているからか、ノルツアーは化け物が誰か一目で見抜いた。

「森エルフの城に立て籠もった仲間達の分も全て持って来たというのか!?! この力が無ければ森エルフの城に立て籠もった仲間達は!」

「ソードスキルで倒されてしまっただけは此処まで上手くはいかなかっただろうし」
視界に入っている筈の同類を無視して化け物は呟き続ける。

「答えろ……答えろオオオオオオオオオ!!」

自分を見ていないと理解したノルツアーは吠えながら駆け出し《ブラスト》の構えを取った。

「それに比べ進歩のない連中よな、貴様等は」

迫りくるノルツアーを化け物はつまらないモノを見る目をしながら右手を前に出した。

甲高いが鈍い音が混じった音が響き渡った：

「そんなバカな……!?!」

ノルツアーは今の光景を信じられない様に呟いた。

ノルツアーの放った《ブラスト》は化け物の右手を振り上げるだけで臂力に負けて上へと弾き飛ばされ、体勢を崩された。

「愚かな奴め、貴様の得た力の五倍を持っているのだぞ。只の力技が通じるわけが無かるうに——そんな事も分からぬか？」

化け物が一步踏み出してメリユジートの胸へと手をやり、服ごと何かをもぎ取った。

「貴様！私の秘鍵を！」

化け物の手には引き千切られた服と共に《紅蓮の秘鍵》が握られていた。

「我の一部を俺のモノとは、愛しき者の台詞なら喜ばしい事この上ないのだが、只の弱者に言われても嬉しくも何ともない」

つまらなさそうな顔のまま化け物が言うが、メリユジートには届いていなかった。

「バカめ！今さら秘鍵を奪った所で私の力は変わらない!!」

「よい、その力は只の報酬じゃ。今さら返せ等と言わぬ。それに、まだ理解しておらぬのか？愚か者め」

化け物の気迫に押されてノルツアーは一步後ずさった。

「貴様の力は変わらぬ。そう、我との力の差も変わらぬ事が――分からぬか？」
その一步を踏み出した化け物はゴミを払うように左手で薙ぎ払った。

「っ!!？」

本当にゴミクズのようにノルツアーは吹き飛ばされて聖大樹の根に叩きつけられた。

「愛しい化け物が追って来ているのであまり時間が無い。これで見逃してやるから――」

ノルツアーに視線を向ける事もなく歩きだした化け物はキリトの顔見て告げた。

「――好きにせよ――」

キリトの横を通り過ぎると同時に化け物は森へと駆け出して姿を消した。

「あら？少し遅かっただけで案外追い付けたのか？」

聖堂の入り口から少し意外そうな声で話すフワが化け物が消えて行った方向を見ていた。

「よ、キリト無事で何より。さつきまで居たアレを凌いだのか？思った以上に戦れるみたいで安心したよ」

キリトの異様な気配を感じ取ったフワは子供の成長を見る親のような笑みを浮かべた。

「……聞きたい事がある……少し待っていてくれ」

キリトの眼は木の根に叩きつけられ膝を地に付けていたノルツアーしか映していなかった。

「……終わりだ。力が無ければ好機すらない。森エルフの城ごとダークエルフ共に蹂躪されているであろう……ならば」

ノルツアーは両手剣を握りしめて立ち上がった。

「全て道連れに！種族など関係無い！全て道連れにしてやる!!」

長い、長い、時の間、望み続けていた全てが、たった一人の裏切りによつて、全てが崩れ去った。

その結果、ノルツアーは狂うしかなかった。

「まずは死ぬ！弱小種族がアアアアッ!!」

全て聞き終わる前にキリトは走り出していった。

ノルツアーはキリトの胴体から真つ二つにする為に《ブラスト》の構えを取った。

「それ以外ないんだな」

「アアアアアアッ!!」

キリトは無表情のまま間合いを詰め、ノルツアーは吠えながら《ブラスト》を放った。放たれた《ブラスト》をキリトは地面に掠るほど身体を前に倒して躲した。

躲しながら剣を構え身体を跳ね上がらせながら、大口を開けているノルツアーの口に剣を突き刺し、そのまま貫通させて根へと磔にした。

「
脳髓を貫かれたノルツアーは既に死んでいるのかもしれないが、キリトは剣から手を離し、左拳を握りしめると輝き始めた。」

—— 体術スキル 《閃打》 ——

キリトは躊躇の一欠片もなく、ノルツアーの右頬へと放った。

キリトの左拳は根に突き刺さった剣に切り裂かれながらも止まったが、ノルツアーの顔は半ばから引き千切られてポリゴンが溢れていた。

一拍置いてから爆散。

しかし、キリトの眼には喜びは無く、何かが欠けた眼でフワへと向き直った。

「邪魔になると思うから少し離れててくれ」

キリトの眼を見たフワは肩に担いだエルミアを降ろすと少し距離を置いた。

キリトの視線はフワを捉えたまま動かなかった。

「あの時、第八層で会った時に既に分かっていたんだろ？」

キリトは時間経過で元に戻った右手で突き刺さっていた剣を取り、幽鬼のようにゆっくりとフワへと近づいて行った。

「分かっていた？ああ、姫さんが正常じゃなかった事か？」

フワが横目でエルミアを見ながら答えると、キリトは歩みを止めることなく首を振った。

「ソレだけじゃない。全て分かっていたんだろ？封印されている力から人族の魔法がなくなる。コレがどういう事になるのかも分かっていた筈だ！」

「まあ予想は付くが、これはゲームだろ。何をそんなに気にしているのか俺には分からないんだが？」

ゆっくりと近づいていたキリトが突然弾かれたように動き、フワへと斬りかかった。

「ゲームでも実際に人が死ぬ！それでも気にしないのか!？」

袈裟がけに振られた剣をフワは少し後ろに下がるだけで躲した。

「本当に弱い人達が自分の所為で死ぬことになっても気にしないのか!？」

キリトは一步踏み込みながら逆袈裟に振った。

「まあ実際、そんな奴等が幾ら死のうが気にはしないが、積極的に殺そうとも思わない。ホントにどうでもいいんだよ」

逆袈裟に振るわれた剣を左に跳んで避けたフワは事もなげに答えた。

フワはウインドを操作してキリトに決闘《一撃決着モード》を申し込んだ。
「今のキリトじゃ掠らせることも出来ねえよ」

フワの宣告をキリトは受けた。

「何が起きているの?」

今しがた目が覚めたアスナは目の前の状況を理解できなかつたが、ある程度の推測は立てられる。

周囲にキズメルが見えない事からキズメルは死んでしまったのだろう。

その事に悲しみを感じながらも、目の前で繰り広げられているキリトとフワの対立を理解出来ずに戸惑っていた。

「……大切な人を失ったのに、どうして戦うのよ貴方達は!」

アスナは向かい合っている二人に向かって叫ぶが、その叫びは二人には届かなかった。
た。

アスナの叫びも届かない二人はカウントが過ぎるのを待っていた。

「なんで、何でフワはこの世界に居る人達を認めないんだ?」

フワを睨み付けたままキリトは問い掛けた。

「それは俺達プレイヤーを除いてって事か？」

そんな視線を受け流しながらフワは詳細を訪ねた。

「ああ、元からこの世界にいる人達の事だ」

キリトはゆっくりと右手に握った片手剣を構えた。

「それは誤解だ。認めているさ、この世界の一部だと」

フワの言葉にキリトは肩を震わした。

「なら何故あんな酷い事を言えるんだ？」

キリトの言葉に改めてフワは呆れたように目頭を手で押さえ、目を隠しながらため息を吐いた。

「酷い事ねえ……」

フワが静かに手を下ろした瞬間、その場が凍りついた。

「いい加減にしろよ。知り合いの電波を聞き流せるほど、俺は人間が出来ちやいねえんだ」

少しでも動けば肌を切り裂くピアノ線が、その場に張り巡らされたような感覚。

「っ!？」

この感覚にキリトは覚えがあった。何度か感じた事がある感覚、初めて感じた時に目の前の男に教えられたソレの名前は

殺氣

そしてソレは今まで何となく分かる程度のモノだったが、今はハッキリと分かるほど強烈なモノだった。

「言葉はいいから来い。その茹った頭、一瞬で醒まさせてやる」

カウントがゼロになり《決闘開始》の文字が目の前に現れた。

結局フワは武器を取り出すことはなかったが、キリトに油断は無かった。

第一層でシミター使いのリンドとの《決闘》をキリトは今しがた見たかのように思い出した。フワの自信の大きさから考えると、何も考えずに突っ込めばあの時と結果は同じになるだろう。

だからと言ってフワから仕掛けさせていいのか、フワの武器は短剣か体術。懐に入られたらキリトが圧倒的に不利。キリト自身も体術スキルを使えるといってもサブスキル、フワはメインスキルといっても過言ではない。

当初の考えでは、開始と同時に速度とリーチに優れる片手剣ソードスキル《ソニックリープ》で決めるつもりだったが、フワの殺氣に当てられてキリトの頭は冷えていた。

「……意外と冷静だな。動かないなら俺から行くぞ」

フワは右手で腰の後ろから短剣を引き抜き、逆手に構えた。

初めて構えたフワに対してキリトは驚きながらも覚悟を決めた。

「フツ——！」

フワが前に出た瞬間、自分も前へと踏み出してフワとの間合いを一瞬で縮めた。

呼吸を置き去りにする感覚で踏み出したキリトは同時に《ソニックリープ》を放った。

視界がスローモーションになる中、キリトは見ていた。意外そうなモノを見る顔をしていたフワに笑みが浮かぶ所を。

「——」

フワは何も持っていない左の掌で輝きに包まれた剣の横つ腹に添えながら押し出した。同時に右足を後ろに引きながら半身になり、自身の右へと逸らした。

二人の身体がぶつかり合い動きが止まった。

「かはっ——!?!」

キリトの鳩尾にはフワの短剣の柄が叩き込まれていて、キリトは息も絶え絶えになっていた。人体の急所の一つである鳩尾は強く叩かれると横隔膜が痙攣して碌に呼吸が出来なくなり、手足が痺れて立っていることすら難しくなる。

そんな苦しみを味わいながらキリトは自身の迂闊さを嘆いていた。

痛みが無い事に甘えていたのだ。実際に第一層で痛みに溺れるリンドを見た筈なのに長い間、痛みから離れていた事で何処か楽観視していたのだ。

”これはゲームであつても遊びでは無い”この言葉をキリトは今感じてる痛みを持つて更に理解を深めていた。

「くふふ．．．やっぱりキリトは面白いな。殺気に当てられて頭を冷やしながらも、逃げずに前へと踏み出した」

本当なら崩れ落ちるキリトをフワは支えながら称賛していたが、苦しみで意識が飛びかかっているキリトには届かなかつた。

「やっぱ俺は出来損ないだな。絶対とか言いながら、その通りに出来ねえんだから」
フワは自嘲気味に笑いながら、右肩から微かに零れるポリゴンを左手で拭った。

「さて、これで俺の話も聞いてくれるかな？」

立ち尽くした二人を案じながらエルミアとアスナが駆け寄つて来るのを横目で見ながら、フワは小さく呟いてから偽物の空を眺めた。

しかし、その空は本物と見分けが付かないほど精巧な代物だつた。

光景

見晴らしの良い丘から見えた景色は——凄惨なモノだった。

ダークエルフの城から煙が上がっており、城門から森エルフとダークエルフの死体が転がっていた。

「こうなれば種族がどうのなんて関係なくなるな」

生の気配がしない光景を見てフワが呟いた。

「そんな……一体何が起きたんだ？」

キリトは目の前に広がる光景を受け入れられなかった。

「何がって森エルフが襲撃したんだろ。中にもつと酷い事になってるし、吐かれても困るから此処で待つてろ。女王かどうかは姫さんに確認させるから」

膝を付いているキリトとアスナを見て、フワはエルミアを担いだまま奥へと歩を進めた。

「何で、仲間達はダークエルフに襲撃を掛けたんだ……？」

エルミアは周囲の光景を見て、吐き気を押さえる様に口に手をやりながら呟いた。

「簡単な話だ。ダークエルフの軍がフォールンエルフが籠城している森エルフの城攻めをしている時だけが、姫と城を失い弱った森エルフがダークエルフの城を落とす唯一の好機だからさ」

フワは何の感慨もなく呟いた。

「おそらく此処だけじゃない。森エルフの城もダークエルフが城内に雪崩れ込んだ時を見計らって襲撃を掛けている筈だ。何せダークエルフ達は勝った後だ、油断しているだろうし乱戦に持ち込むのは難しい事じゃない」

フワは死体が転がっている階段を上り、半分開いている仰々しい大きな扉を蹴り開けた。

「あらら、この部屋だけ死体の数が桁違いに多いな」

そこは机と椅子と死体の山があるだけだった。

壁に彫られた彫刻は剣戟によって別の絵になっていた。

「こいつだけ付けている装備がドレスかよ」

フワは山の一番上にも乗り、胸と腹から騎士剣を生やしている死体の長い髪を掴んで引き上げた。

「っ——！」

フワが持ち上げたソレを見て、エルミアは息を引きつらせた。

「どうやら当たりを引いたみたいだな。漏れなく全滅か、森エルフ達も存外優秀なんだな」

「うっ・・・うぐっ・・・」

エルミアの泣きそうな声を聞きながら、フワは髪から手を放すと“ビチャツ”と生々しい音を立てて落ちた。

「それじゃキリト達に報告に行つてから森エルフの城の方に向かうけど、本当にいいんだな？」

担ぎ上げられたままのエルミアは泣くのを堪えながら頷いた。

部屋から出て階段を下りようとした所でキリトとアスナがいた。

「漏れなく全滅。もう此処に用は無い筈だ・・・このまま回れ右で出て行った方がいい」
フワは顔を横に振りながら答えて、部屋の中が見えない様に2人の視界の前に立つた。

「そ、そんな・・・!!」

アスナはよろよろと手すりへと縋り付きながら膝を付いた。

「だから待つてろつて言ったのに」

フワはため息を吐きながらエルミアと同じようにアスナを担ぎ上げた。

「行くぞキリト。つたく・・・死体があるくせに血が無いせいで刺激が変に薄くて気持ち悪

「い」

周囲を見回して違和感を拭えないフワは舌打ちをしながら出口へと歩を進めた。

「おーい、キリトにアスナ何時まで固まってる気だよ?」

城が視界に入らない場所でエルミアとアスナを降ろすと、エルミアは青い顔をしながら木陰へと消えた。

「」

降ろされたアスナと黙って付いてきたキリトは2人揃って俯いていた。

「お前等いい加減にしてくれ・・・」

フワはため息を吐いてから何かを考えてから口を開いた。

「明日もう一度ここに来い、お前達の仲間のダークエルフを生き返らしてやるから」

まるで電気が走ったかのように2人の身体が跳ねた。

「なっなにを――?」

2人の返事を聞く前にフワは青い顔をしながらも戻ってきたエルミアの前でしゃがんだ。

「今すぐ行くぞ。背負って行くから森エルフの城まで案内してくれ」

エルミアが首に手を回すと同時にフワは走り出した。

「うおおおおおッ!!」

「届きはせぬ! 突き殺してやれ!」

城の通路で金髪の森エルフの騎士がソードスキルを発動させながら間合いを詰めるが、通路を塞ぐように三人横に並んだダークエルフの槍のソードスキルに貫かれた。

「フォールンエルフ如きに城を奪われたバカ共が! 我らダークエルフに敵う訳がなからう!!」

動かなくなった森エルフを見て、三人の後ろにいたダークエルフの将軍が吐き捨てた。

「まさか城内に全軍が突撃したのを見計らって森エルフの奴等が襲撃を掛けてくるとは、地の利も向こうにあって混乱に叩き込まれた。しかしながら汚い手を使う奴等よ。フォールンエルフと森エルフどちらも大差ないではないか」

周囲の部屋を見回っていた三人の騎士が悔しそうにしながら戻ってきた。

「ゼブルー閣下、生存者の姿はありません。今のところ生存者は我々だけかと」
報告を受けたゼブルーも悔しそうに歯噛みした。

「くっ、我が隊も混乱時に何名も失っている。生き残りは期待出来ないか」

その時、中央の広場で金属同士がぶつかる音が鳴り響いた。

「城内にいる森エルフに伝える！エルミア姫は御無事だ！今すぐ戦闘を止め、広場に集まれ！」

まだ幼い感じが混ざる男の声にダークエルフ達は顔を見合わせて走り出した。

オレンジ色に染まる空とソレを映す水面が揺れる中、半壊している城を2人は眺めていた。

「呼びかけてみたが、反応なし。ここも手遅れつてこといいか？」

広場の中央にある噴水に腰かけているエルミアに、フワは確認するように聞いた。

「ああ、ダークエルフの城の惨状を見た時に覚悟は出来ていた」

エルミアは辛そうに顔を俯かせているが、先程のダークエルフの城の事で耐性が付いていた。

「そっか、次は教会でいいんだな？」

「ああ、あそこは種族の違いなど関係無い所だ。そこに行つて修道女になればフワの力ルマも浄化できるだろう」

エルミアは淋しげな縋りつくような眼でフワを見た。

「了解。その前に片付けくらいしていかないとな」

城の入り口から槍を持ったダークエルフが三人、その後ろにマントを羽織り、左手に盾を持ち、右手に直剣を持ったゼーブルが出てきた。

「やはり我々が最後の生き残りだったか」

フワとエルミア以外ない事を確認したゼーブルがため息を吐きながら呟いた。

「そうだ、本当に最後の生き残りだ。ダークエルフの城はお前等が城攻めに興じている間に落とされ女王も死んだよ。ゼーブル將軍・さ・ま♪」

フワの視界には《Z, able: Dark Elven General》と出ており、カーソルの色は薄い赤色になっていた。

「そ、そんなバカな事があるか!!」

その言葉に反応したのは槍を持っているダークエルフ達であり、ゼーブルは無反応だった。

「そんな言葉に惑わされるな。森エルフの姫も一緒に一刻も早く始末しろ!」

「「はっ!」」

3人のダークエルフ達は慌てながらも3人横に並んで槍を構えて走り出した。

「なんかフアランクスっばい」

フワは呟きながら右手逆手に短剣を持って駆け出した。

「奴の武器は短剣だ!届きはしない一方的に蹂躪せよ!!」

後ろから聞こえるゼーブルの声を聞きながら、3人は槍を突き出した。フワの身体を中心めがけて突き出された槍は全て空を切った。

「なっ——!?!」

3人のダークエルフの目に映ったのは宙を舞ったフワの姿だった。

そして右側のダークエルフの顔に右回し蹴りを、次に真ん中のダークエルフの顔に左足の蹴りを、左足を蹴った反動で身体を廻して右足の蹴りを左側にいたダークエルフの顔に叩き込んだ。

顔に蹴りを叩き込まれた3人は顔を押さええて後ずさった。

そして真ん中のダークエルフの首が斬り飛ばされた。

「隙だらけ過ぎないか?」

着地と同時に《エツジ》を発動させたフワは首を斬り飛ばしながら苦笑いした。

「お、おのれエエツ!!」

左側のダークエルフは吠えながら長槍ソードスキル《ラビット・チャージ》を発動させた。

発動が早いのが特徴の《ラビット・チャージ》はフワの胴体目掛けて突き出された。フワは半身になって躲しながら、槍を左手で掴んで後ろに引きながら跳ねあげた。

「つっ!?!ツっひゅウウ．．．!?!」

空気の入った何かを突き破ったような声の後に、空気が漏れ出している声が聞こえていた。

「あ・・あああああヴァツ・・・!?」

自分の放った槍が右側にいた味方の喉を貫いた光景を見たダークエルフは驚きで止まってしまう、何かが喉を切り裂くまで無防備な姿を晒してしまった。

「あーららら、自分の仲間を殺しちゃったよ。味方殺しの罰は斬殺って事でいいですかね?」

2人が崩れ落ちてポリゴンになったのを笑いながら見ていたフワは、振り向くと同時にゼーブルの右手で振られた片手直剣ソードスキルを受け止めて笑みを深めた。

「この薄汚い種族の分際で! そんな玩具で受け続けられると思うなよ! すぐに叩き斬ってくれるわ!!」

ゼーブルはソードスキルを使う為に鏢迫り合いを止めようと力を入れた。

「なに・・・! 力が入っていないのか・・・!」

幾らゼーブルが力を込めても何故かフワとの鏢迫り合いから動かない。フワからの力を感じていないからゼーブルは自分自身が力を込められていないと錯覚していた。

「自分の剣の柄を見てみなよ」

ゼーブルはフワの言葉を聞いて反射的に直剣の柄を見ると、柄の先をフワの左手が掴

んでいた。

「何だコレは？まさかコレだけで抑え込んでいてもいいのか?！」

ゼーブルは左手の盾を手放して直剣を両手で持ち力を込めるが、動かなかつた。

「面白い事してやるよ」

フワは右手の短剣を手放した。

傍目から見れば鏢迫り合いをしていた筈だが、一方だけが一時停止して一人だけが動いているように見えた。

フワは何も握っていない右手でゼーブルの肘を押さえると、ゆっくりと折り畳んでいき自分の直剣が自分の喉元へと狙いを定めた。

「ま、ままま待ってくれ！」

そんな信じられない光景を喉元を針で刺したような痛みが現実だと教えてくれたゼーブルは叫んだ。

「今回の城攻め、どう転ぶにしても女王は死ぬって分かかって始めただろ?！」

不意にフワは動きを止めてゼーブルへと問い掛けた。

「そ、そんな訳があ……ああ」

少しだけ喉元に直剣を押し込んだ。

「今回の城攻めに参加していた將軍の殆ど全員が、城攻めをしている間にダークエルフ

の城に襲撃があるだろうって予想してただろ？」

フワは確認するようにゼーブルへと問い掛けた。

「あ、ああ！情報は得ていた！今回の作戦が成れば森エルフと同じように王の居ない騎士達で国を治める事が出来ると皆で!!」

ゼーブルの答えを聞いたフワは菩薩の様な笑みを浮かべた。

「そっか、次の質問だ。裏切りモノには……の後に続く言葉って何か知ってるか？」
ゼーブルの顔が絶望に染まりきった瞬間、喉元に直剣が突き刺さって引き裂かれた。

「正解」

フワは笑いながらポリゴンになったソレを眺めていた。

「初めから凶られていたのだな。あの者達もエレンミアさんも……」

「だと思つたよ。あまりにダークエルフの城にあった死体の数が少なかつたからな」

エルミアは悲しいモノを見る目でボロボロになった自分達の城を見た。

「ただ、森エルフ達は優秀だったんだろうな。おそらく兵数の差はあつただろうに、結果的に此処まで相手を道連れにしたんだ大したモノだよ」

再びエルミアの前でしゃがみながらフワは聞こえるように呟いた。

「ああそうだ。森エルフは強いんだ」

エルミアは涙を流すことなく、再びフワの背に乗つかった。

夜も更け、周囲が闇に包まれる森の中でもフワは目が見えるのか、歩みを止める事はなかった。

「もう夜も深いけど眠らなくてもいいのか？」

背負われたままのエルミアがフワの体調を気遣うように尋ねた。

「2、3日寝なくても大丈夫だ」

あまりに簡素に答えたフワは歩みを止める事はない。

「あれ程の事があったのに疲れていないのか？」

エルミアは今日あった出来事を思い出していた。

「そう・・だな。一番疲れる事は、ずうっと姫さんを背負って歩いている事か」

エルミアは顔を赤くして手足をバタバタと動かした。

「そ、それなら降ろせ！もう歩ける！」

フワは鬱陶しそうに目を閉じながらも歩みは止めない。

「姫さんにとつて王族らしい扱いなんてコレが最後になるかもしれん。大人しく運ばれてくれ」

その言葉を聞いてエルミアは大人しくフワの身体に身を委ねた。

「たしかにフワの言う通り、私はこれから修道女になる。これまでと同じようにはいかないだろうな」

その声は諦観と孤独が混じっていた。

「さあな、周囲が姫さんに気を使って前と同じように扱われるかもしれん」

フワには見えないが、エルミアは不満げに目を細めた。

「ソレは私が高飛車だと言っているのか？」

エルミアと目は合っていないが、フワは惚けるように目を逸らした。

「さて、どうだか？それよりも森を抜けるぞ」

フワの言葉通り森を抜けて広がった光景にエルミアは息を呑んだ。

視界の下半分は転移門がある第九層の街の明かりがあり、上半分には満天の星空が広がっていた。

「普通は人工の光によって星の光は小さくなるモノなんだが……」

自然の光と人工の光、この二つが共にある光景はフワも見惚れていた。

「これもゲームの醍醐味か」

たとえ理由が光の干渉の計算による処理落ち回避の為の結果だとしても、この目の前の光景は現実では見る事の出来ないモノだった。

「世界って、こんなにも綺麗なモノだったんだ」

その眩きを聞きながらフワは止まっていた足を進ませた。

この世界は

「たしかに教会は街中にあるモノなんだろうけど、どうやって入れればいいんだ？」

街の入り口が見える中でフワは自分を示すカーソルの色を確かめながら呟いた。

「心配いらぬ。教会は街の裏手にある森の中だ」

背負われたエルミアが街の外れにある森を指さした。

「了解、あと少しだな」

エルミアを軽く背負い直したフワは指さす方向へと歩を進め、森の闇へと紛れていった。

「そう……だな、あと少しで終わりだ」

周囲が闇に包まれると、エルミアは何処か未練がましく声を絞り出した。

「これからフワはどうするんだ？」

目の前にある首筋に額を当てながらエルミアは答えが分かっている問いを口にした。

「まずは逃がしたアレとの再戦。そして上に行くかな」

迷う事無くフワは即答した。

「あの2人とか？それとも1人で全てやるつもりか？」

エルミアも流れるように次の問いを口にした。

「さあ？どうなるか、あの2人次第だからなあ」

フワは置いてきた2人の姿を思い出しながら答えた。

「戦う事に關しては足手まといになるくらいなら1人の方がいい？」

ただ会話が続けばいい。

エルミアはそんな事を思いながら答えが分かっている質問をした。

「足手まといに気を使うほど俺は優しくくない」

自嘲するようにフワは笑みを浮かべた。

「ならフワは、再び自分の手が汚れようとも自分の道を進むのか？」

「当たり前だ。俺は俺の為に生きるモノだから」

即答した。一瞬も迷うことなく、フワは即答した。

「……そうか……」

その答えにエルミアは納得したように目を閉じて、深く息を吸った。

そして街の裏手の森の中に小さな教会の前に立った。

「……ここで間違いない？」

その問い掛けにエルミアは無言で頷いてフワの背から下りた。

「さて、此処が最後の分岐になりそうだ」

フワが呟くと同時に教会の横にある草がゴソゴソと音を立てて動き出した。

「エルミアだね！無事でよかった!!」

そう言つて出てきたのは森エルフの若い騎士だった。

「アラン……無事だったのか……」

森エルフの生き残りを見つけた筈なのにエルミアの声は晴れなかった。

「姫さん呼び捨てとは、幼馴染か何かだろ？」

フワの問い掛けにエルミアはコクリと頷いた。

「貴方がエルミアを守つて此処まで連れて来てくれたんですね」

アランと呼ばれた青年は気さく声を掛けながらエルミアへと近づいていった。

「僕と君が無事なら森エルフは何とでもなる！これから大変な事が沢山あるだろうけど

僕と君で作り上げていけばいい！そう！まるでアダムとイブのように2人で生きてい

くんだ!!」

アランの進行方向を潰すようにフワはエルミアの前に立った。

「なんですか？もうエルミアを襲う者はいないんですよ。もう貴方は必要ないでしょう

早く何処かへ行つて下さいよ」

アランが苛立ちを込めながらフワへと言葉を吐いた。

「つくく……その隠しもしない野心に下心。もう意味無いと思うんだけどな」
笑いを漏らしながらフワはエルミアを見た。

「アラン。何故お前一人だけ生き残っている？他の生存者はいないのか？」

静かだが、王族らしい威厳溢れる声でエルミアは問うた。

「僕達の仲間は少数でダークエルフの城へと襲撃を掛けたんだ。成功したけど僕以外の仲間は……！」

まるで自分の力の無さに怒りを覚えるようにアランは拳を握りしめた。

「……なぜ、まだ仲間が戦っているであろう森エルフの城に向かわなかった？」

あの森エルフの城の惨状を思い出したのか、声に悲しみが混じっていた。

「そ、それは僕達の任務がダークエルフの女王を討った後、エルミアを探し出すことだったから」

アランはどもりかけたが全て答えた。

「その場に重い沈黙が押し掛かった。」

「確かに悲しい事だったけど、今は喜ぼうよ。どんな形であれ幼かった頃の夢が叶うんだからさー！」

アランの言葉にエルミアが僅かに反応した。

「あったな。幼い頃に結婚して森エルフの未来を創っていいこうなんて夢が」

その言葉を聞いたアランは小躍りするように跳び跳ねた。

「そうだよ！あの時から2人は愛を誓い合って「あの時だけのな」ッ!!?」

喜びに満ちた言葉を引き裂く様にエルミアは宣告した。

「全て思い出したよアラン。再び貴様が愛を告げ、私がソレを拒絶した事をな」

エルミアの眼は怒りと憎しみに溢れていた。

「あの時に貴様は私の飲み物にアレを……《幻墜の秘薬》を入れたな……!」

殺気混じりのエルミアの気配にアランは圧倒された。

「そ、そそそそそんな馬鹿な！《幻墜の秘薬》はぜっぜっぜ絶対解けない筈だ!!」

エルミアはアランの言葉を否定した。

「私も話に聞いたことがある。使用した貴様だ《幻墜の秘薬》にまつわる有名な話、貴様も知っているだろう?」

アランはパニックに陥りながらも冷静に頭を動かした。

「あ、あああああり得ない!ぼ、僕以外に君に《真実の愛》を与える事なんて出来る筈がない!!」

《幻墜の秘薬》を解くには《真実の愛》が必要。アランは自分以外がエルミアに与えられる訳がないと本気で思っていた。

「ああ、フワが私に《真実の愛》を与える事はない。フワからでは……無いんだ……」
その悲しみに塗れた声にアランは全てを理解した。

「あ、ああ、あああ、あああああああ!?!」

理解した瞬間、その理解を捨てる為にアランは叫んだ。

「五月蠅い」

「アポオツ!?!」

膝を付いて泣き叫ぶアランにフワは拳を放って吹き飛ばした。

「さて、今回ばかりは最後は俺じゃないな」

フワはそう呟くとアランは地面に手を付きながらもフワを睨みつけた。

「コイツさえコイツさえ! そうだ! コイツさえ居なくなればエルミアは僕のモノにイイイイイイ!!」

腰から騎士剣を右手で引き抜いた。

そして左手の盾も構えずにフワへと駆け出して右手を振りかぶった。

「かえせカエセつくあえつせええええ!!」

涙、鼻水、涎、小奇麗だった顔を見られるモノではなくなっていた。

「ああ、返してやるよ。ただしテメエの都合のいい姫さんじゃなく、本当の姫さんを」

化け物の笑みを張り付けたフワは振られた剣を躲すと同時に右足でアランの右足に

蹴りを放った。

凄まじい音と共にアランの足が股関節の部分から不自然に伸びて、あり得ない方向へと曲がった。

「つあぐあああああああああ!!?」

右足が唐突に無くなった様なモノでアランは立てる訳もなく地面を転がった。

「あひつあひがああああああ!!?」

うつ伏せで自分の右足に手をやるアランの左足の大腿部をフワは踏み抜いた。

「あああああああああ!!?」

痛みで泣き叫ぶアランを無視して、フワはアランの後ろに回り両腕を取って持ち上げた。

「少しうるさいが、最後はエルミアの手で終わらせろ」

持ち上げられたアランの前にはエルミアが立っていた。

「ありがとう、本当にフワには世話になってばかりだ」

エルミアは腰のエストックを引き抜いて構えると柄を廻した。

「これが王族のみに許された《裁定の杭》、裏切りモノにのみ使う事を許された断罪の剣」

エストックの刃がバラバラになって弾けると中から、意匠を凝らした純白のレイピアが現れた。

「あああいやだ！ぼくがわからないのか！ぼくのすべてできみのすべてであるあらん
——!!」

《裁定の杭》を構えるエルミアを見てアランが言葉にならない言葉を吐いたが

「これで弱い私の救いを待つだけの物語は終わりだ。さらばだ私の悪魔よ」

一欠片の躊躇いも無く、エルミアはアランの脳天へと突き出し、堅い頭蓋骨をまるで豆腐のように貫いて串刺しにした。

「あ……あああ……」

断末魔にもならない声を出していたアランの身体から光が漏れ出し、輝きに包まれると爆散した。

「おお、イベント上の殺しでも死体が残らないんだ」

薄れていく光に見向きもせずにエルミアはレイピアを鞘へと仕舞ってフワへと差し出した。

「いや、いらん。短剣使っている俺には必要ないモノなんだが」

差し出されたレイピアを見てフワは面倒くさそうに断った。

「気持ち悪いモノを殺した剣だぞ。私だって願ひ下げだ」

エルミアは汚いモノを持つかの様にレイピアをフワへと渡した。

「それに修道女になれば二度と使わないだろう。フワも必要無ければ売るなり何なりす

るがいいさ」

手渡されたフワは何かを考えてから口を開いた。

「……ダークエルフと共にいた2人の内、女の方がレイピアを使っているのを覚えて
いるか？」

その問いにエルミアは星を散りばめた様に輝く髪をした女を思い出した。

「八層で会った時と武器が変わっていた。どうせ今回の戦いで使っていた武器が壊され
たんだろう。ソレの補填がわりにコイツをくれてやってもいいか？」

その言葉を聞いたエルミアは笑みを浮かべた。

「異性からのプレゼントを他の異性へのプレゼントにするとは、フワも大したモノだな」
今度はフワが笑みを浮かべて口を開いた。

「しかもそのプレゼントは屑を殺して呪われているかもしれないモノときた。ホント大
した野郎だな」

2人して笑い合った。

「それじゃ、私が呼ぶまで此処で待っていてくれ」

一しきり笑った後でエルミアは躊躇なく教会の中へと入っていった。

エルミアが入っていくのを見届けたフワは近くのベンチへと腰を下ろした。

「待たせた。入ってきてくれ」

それから一時間ほど経過し、空が白み始めた頃に教会から声が掛った。

ゆつくりと扉を押し開けると、古臭い音を立てながら開いていき教会の中を一望できた。

ごくごく在り溢れた教会の姿、木製の長椅子が並んでおり中央に通路、その奥に祈りを捧げる何か、その何かだけが普通の教会にはないモノだった。

ソレは壁一面に広がる一枚の絵

その絵にはこの世界の全てが描かれていた。

《アインクラッド》蒼穹に浮かぶ島、その島以外には何もなく、孤独すらも感じる絵が飾られていた。

『まさかこの絵に祈りを捧げろなんて、どこまでこの世界が好きなんだよアンタは』

製作者である茅場晶彦の事を考えながらフワは小さく笑った。

「驚いた、思った以上に似合っているな」

そう言ったフワの前に修道女の服を着たエルミアが立っていた。

「そうか？ そう言ってくれると嬉しくなるな」

エルミアは照れながらも笑みを浮かべた。

「それで、どうすればカルマが浄化されるんだ？ この絵に祈りでも捧げればいいのか？」

フワは飾られた絵へと視線を向けながら問い掛けた。

「その前に——誓って欲しい事がある」

真剣な声色でエルミアが告げた。

「俺が誓えるモノならな」

雰囲気が変わったエルミアへとフワは向き直った。

「罪の無い者を殺さないで。それ以外の罪は全て私が浄化するから、何度でも浄化するから、だから

——その手で、罪の無い者を殺さないで——」

エルミアの頬に一筋の涙が流れた。

その瞬間、絵が飾られている壁から真っ赤な光が差し込んだ。

「朝焼けの光？全部ステンドグラスで出来てるのか——」

蒼穹は鮮紅へと変わり、まるで日が終わるように、世界そのものが終わっていくように——

見惚れていたフワは絵に引き込まれまいと視線をエルミアへと戻した。

「エルミアが血の涙を流していた。」

フワは息を呑んだ。

流した涙が朝焼けの光を映して赤く染まり、そう見えてしまっただけ。

理屈は簡単。それでも、本当に血の涙を流しているように見えた。

「分かった」

無意識の内にフワはそう答えてしまった。

「ありがとう。この世界が終るまで、私は貴方を思い続けるよ」
血の涙を流しながらエルミアは聖女のように微笑んだ。

クエストをクリアしました

突然フワの視界の中央にその文字が現れた。

「情けねえな。こんな事に見入るなんて」

フワを示すカーソルの色が緑色に変わっていた。

ソレを確認したフワは頭を掻きながら出口へと向かっていった。

「いつでも来てくれ」

そんな型に嵌った台詞が聞こえた。

昨日、キリトとアスナを置いていった場所に向かうと既に2人が居た。

「しかし、2人はフワの存在に気付く事無く、少し離れた場所で何かを食い入るように見ていた。」

「おはよう。その様子じゃ気が付いたみたいだな」

2人に声を掛けるとアスナだけが、フワの方に向き直った。

「一体どういう事なの？貴方は一体何をしたのよ!？」

アスナは金切り声を出しながらフワへと詰め寄った。

「何とは?」

フワは笑みを浮かべながらアスナへと逆に問うた。

「何もかもが戻っている事よ!戦いの跡すら無い!死んだ筈のダークエルフ達も全て生きています!一体何をしたのよ!」

「クエストをクリアしただけ」

フワの答えにアスナは理解できなかつたのか口を閉ざし、周囲が沈黙に包まれた。

「もう、キリトは理解しているだろ。俺が言っていた全てを」

キリトは無言のまま、元に戻っているダークエルフの城を見ていた。

「……どういう事よ、どういう事か説明しなさいよ!!」

アスナの叫びにフワが反応した。

「あのさ、何で俺達プレイヤーはアインクラッドの最上階を目指しているんだっけ？」

その問いにアスナは心臓を掴まれた。

「このデスゲームをクリアして現実に戻るため」

その問いにキリトが答えた。

「ああそうだ、俺達はこのゲームを《ソード・アート・オンライン》をクリアして、現実に戻る為に最上階を目指しているんだ。なら、今いる世界は何だ？」

その問いにアスナは地面に膝を付いてしまった。

「……ゲームよ」

その答えにフワはごく当たり前の事を口にした。

「そうゲームだ。クエストってのは誰でも受けれるモノだろう？」

その問いにキリトは無言で頷いた。

「ならば、次にクエストを受けた人が進行できないような状況が修正されない訳がないだろ。そんなバグを茅場晶彦が許すと思うのか？この世界を作った天才が、そんな矛盾を許す訳ないんだよ」

その答えに2人は口を閉ざすしかなかった。

「言ったら、この世界はゲームなんだ。間違っても現実と一緒にしちやダメな部分だっ

てあるんだよ」

その言葉は2人の中へと入り込んでいった。

アスナが目溜まった涙を力強く擦りながら立ちあがって踵を返した。

「突然どうした？」

フワの問いにアスナは足を止めた。

「最上階を目指すのよ。礼を言うわ、お陰で目が醒めたから」

アスナの言葉を聞いてフワは笑みを浮かべた。

「そうか、目が醒めた祝いにコイツをくれてやるよ」

フワはストレージから純白のレイピアを取り出すとアスナに向かって放り投げた。

「っ!?これ……?」

受け取って一切の躊躇なく開いたレイピアのステータスを見て、アスナは目を疑った。

今まで自分が使っていたフルに強化した《シルバリック・レイピア》よりも素のステータスだけで圧倒的に上のレイピアだった。

「固有名称《ルーイング・パイル》、コレ本当に受け取ってもいいの？」

とんでもないモノを渡されたアスナは頭の中を塗り替えられ、フワへと向き直った。

「俺が受けたクエストの報酬の一つだ。今回のクエストで獲物を失くしたんだろ？代わ

りにソイツをくれてやるよ」

ノルツアアの攻撃を受けた時の事がアスナの脳裏をよぎった。

「対価はコレに相応しいほど強くなつて攻略を進めるつて事でいいかしら？」

アスナは手にした《ルーイング・パイル》を強く握り直してフワに告げた。

「もちろん、最上階まで行つてもらわなきや困る。自棄になつて迷宮区に籠らない様に、

体調は常に最善の状態で攻略してくれ。その方が効率的だから」

告げられた事にフワは笑みを浮かべながらアドバイスを送つた。

「言われるまでもないわ。それじゃボス部屋前で会いましょう」

今度こそアスナは振り向かず歩きだした。

「さて、あのダークエルフの女騎士に会つてみるか？」

何気なく告げられたフワの提案にキリトは驚いてフワを見た。

「お前が言つたんだろ、あのダークエルフの女騎士だけは違うんじゃないか？」

確認するようにフワはキリトへ問い掛けた。

「ああ、確かめよう」

キリトは覚悟を決めた様に頷いた。

「汚らわしい！醜い黒い肌をした種族め!!」

森エルフの男の怒号と共にダークエルフの女の悲鳴が森に響いた。

「……助けておねえちゃん……!」

息も絶え絶えなダークエルフの女は身を丸めながら助けを口にした。

「よく此処まで生にしがみ付けるな、我ら森エルフには考えられないな」

下品な笑みを浮かべた森エルフは左手の剣で遊ぶように斬り付けた。

「ああつ!うう……おねえちゃん……」

ダークエルフの女は目を強く閉じ、自身の姉の姿を思い浮かべた。

「私もまだ用があるのでな。ひと思いに殺してやる!!」

その声を聞いたダークエルフの女は死を覚悟した。

「そうか、ひと思いに殺されたいんだな」

そんな死の覚悟すら凍り付かせる様な、冷めた声が耳に入った。

「うへっ?」

その声に釣られて目を開けると自分を庇うように黒い服を着た男が立っていた。

「大丈夫か?」

冷めた声の主ではないその男は優しく自分へと手を差し出した。

「は、はい……」

ダークエルフの女は手を取りながら立ち上がると、黒い服を着た男の向こう側でポリゴンの欠片を纏っていた男が居た。

「あ、あのどうして助けてくれたんですか?」

その問いに黒い服を着た男が笑顔で答えた。

—— 助けるのに理由が要りますか? ——

「そ、そうですか……」

ダークエルフの女は内心で首を傾げた。なぜなら、そう言った男の顔が何かに怯えていたから。

「貴女のお仲間の所まで護衛しましょうか?」

そう言った男の問いにダークエルフの女は焦って首を振った。

「い、いえ! 大丈夫ですので「ティルネル!!」お姉ちゃん!!」

断わりの言葉を遮るように女の声が出た。

「帰りが遅いから心配して来てみれば、人族の男と仲よさげに話しているとはな。呆れてモノも言えんぞ」

ティルネルと呼ばれたダークエルフは更に慌てながら手を大きく振った。

「ち、違うよ! 危ない所を助けて貰っていた所で!」

ティルネルの言葉を聞いたダークエルフの女騎士は目を丸くしながら男達に向き

直った。

「やはり危険な目に会っていたのか。人族のお2人よ、私の妹を救ってくれた事、感謝してもしきれない。妹は私に残された唯一の家族、女王陛下と同じくらい大切な者なんだ」

その言葉を聞いて黒い服を着た男の目から光が消えたような気がしたティルネルは気の所為だと思い直した。

「そう・・・でしたか、助けられて嬉しい限りです」

そう言つて男は悲しく微笑んだ。

「何処かで会つた事はないか？」

その顔を見たダークエルフの女騎士が唐突に呟いた。

「——え？」

隣に居たティルネルと目の前の男は同時に疑問を口にした。

「す、すまん！何故か貴公の顔を見ると胸が騒ぎだすと言うのか何というのか……」

ティルネルは天啓を得た様に叫んだ。

「一目惚れ!?騎士一筋のおねえちゃんに春が来たあああああああ!」

その言葉にダークエルフの女騎士は慌てながらティルネルの口を塞ごうとした。

「何を言つてるんだお前は!」

塞ぐのを何とか抑えながらティルネルは続きを口にした。

「だってソレ以外考えられないよ！まるで前世から赤い糸で繋がっている様な！」

その言葉を聞いたダークエルフの女騎士は突然頭を抱え出した。

「前世……何が……!?!」

ティルネルの目には恥ずかしさの余り、頭を抱え出したようにしか見えなかったが、目の前の男の眼光が鋭くなった。

「はは……まさか、そんな事ないですよ。どうやら僕達は退散した方がいいみたいですね……」

男は笑みを浮かべながら踵を返した。

「そんなお礼もちゃんとしてないのに！」

男を引きとめる様にティルネルは声を掛けたが、男達はそのまま走り去った。

「あの人も照れたのかな？」

そう言っているティルネルの横で頭を抱えていたダークエルフの女騎士は走り去る2人の内1人だけを見て呟いた。

「無事でよかった」

その言葉は自身にすら届かなかった。

「アレは記憶かデータか、神のみぞ知るって所だな」

フワは森の中で走りながら、隣で並走しているキリトに話しかけた。

「どっちでもいい。それでも残るモノがあることを知れただけで――」

キリトは自身の胸に手を当てながらキズメルの温もりを思い出していた。

「それでキリトはこれからどうするんだ？」

そんな問いをキリトへとした。

「そんなの決まってる、現実に戻る為にこの世界で戦うさ」

晴々とした顔でキリトはフワに告げた。

2人の笑い合う声が森の木漏れ日の中、歌う様に響き渡った。

攻略組

「このアタックで終わりにするぞ！」

「「応ッ!!」」

大きな体格の黒人が日本語で気合いを入れるように声を出すと、周りにいた彼のチームメンバーが気を引き締めた。

黒人の男が両手斧を脇に引絞る様に構えながら走り出すと、彼の周囲を守るように盾を持ったチームメンバーが固めた。

「しまった！遅れるな！」

「「こつちもや！早よせい！」

曲刀を持った青い髪の男と茶色のトゲトゲを生やした頭の男が慌てて指示を出し始めるが、一塊りになった男達は凄まじい勢いで大きな木へと向かって行った。

その木はいくつもの枝を切り取られていてポロポロでポリゴンが零れていた。

「ツコオオオオオオオ!!」

しかし枝全体を身動きするかの様に揺らすと、先の尖った枝を走っている男達へと

向かって放った。

「つぐー！まだまだ!!」

突き出された枝を盾で逸らしながら男達はスピードを落とさず駆け抜けた。

「散開!!」

木との間合いが近づいた瞬間、黒人の男が吠ると同時に彼の周囲にいた男達は素早く身を引いた。

「うおおお!!」

野太い男の声と共に振られた両手斧がソードスキルの輝きと共に木に叩きつけられた。

斬撃の鈍い音と共に木が割れたような乾いた音が鳴り響き、木がポリゴンへと変わった。

「よっしやあ!!」

両手斧を振り切った黒人が喜びの咆哮を上げると、彼の仲間も釣られるように喜びを口にした。

「それでラストアタックボーナスは何が出たんだよ!」

冷めない興奮のまま男達は黒人の男へと詰め寄った。

「まあ待て、それよりも先の事を話し合わねえと。そうだろ? リンドさんにキバオウさ

ん」

黒人の男が興奮を宥めるように言いながら、此方に近づいてくる者に視線を向けた。「とりあえずエギルさん、おめでとう。結果はどうであれ、これで第九層迷宮区に入れるようになったよ」

曲刀を鞘へと戻した青い髪のリンドは笑顔を作りながら言った。

「ラストアタックボーナスを乱獲するブラッキーが居らん時がチャンスやと思ったけど、しゃないな」

茶色のトゲトゲした頭のキバオウは片手で掻きながら天井に突き刺さっている塔を見上げた。

「フィールドボスがトレント系って事は、この迷宮区のモンスター達は植物系と考えるべきだと思うか？」

エギルは倒したフィールドボスを思い出しながら2人へと聞いた。

「どうだろうか、基本的に第九層のモンスターはオオカミなどの獣系だった訳だし迷宮区に入ると全く別の系統に変わるだろうか？」

リンドはこれまでの階層の事を思い出しながら首を傾げた。

「そうなるに対処が困んな。オオカミとか獣系は動きが早いせいで重装備は不利になってまうし、逆にフィールドボスみたいなトレント系やったら軽装備が不利になんて」

3人はしばらく考えた後、リンドが口を開いた。

「仕方ない、今日だけは精銳を集めて一緒に迷宮区に入らないか？ いざという時になってもフォローし合えるし、この迷宮区のモンスターが何の系統か分かるまでなら序盤で済むと思うし」

そのリンドの提案にエギルはアツサリと首を縦に振り、キバオウは渋々ながらも首を縦に振った。

「それが良さそうだな、人数はどうする？ あまり多過ぎると逆に動きづらくなるぞ」

「4人構成パーティを三つ、それぞれ4人ずつ選出するのでいいかな？」

リンドは言いながらエギルとキバオウに意見を求めるように目を向けた。

「そうやな、それが一番揉めんで済みそうやしな」

キバオウは肯定の言葉を口にしながら自分の仲間の元へと歩を進め始めた。

「それじゃ俺も選出してくるよ。メンバーは状況がどっちでも大丈夫なようにオールラウンダーを連れてくるよ」

リンドも選出するプレイヤーを決める為に自分の仲間達の元へと向かった。

「と言う訳だ。さっきのボスで疲れているのなら行かなくてもいいぞ。DKBとALSには話をつけるが？」

エギルは振り向きながら仲間達に問い掛けた。

3人のメンバーは互いに顔を見合わせてから、ボサボサの茶色いロングヘアを後ろに流し、同色の顎鬚を長く伸ばしている男が手を上げた。

「皆行くだろう。さっきのボス程度、なんてことはなかったしもう」

そう言つて仲間達に同意を促す様に笑みを浮かべた。

「ウルフギヤング……」

そんなウルフギヤングにエギルは少し沈黙を挟んで口を開いた。

「年なんだから無理しなくていいんだぞ」

「ワシは話し方だけじゃ！見た目まで中年のお前に言われとうない！」

「るせえつ！舐めんな！等と言いつつ取っ組み合いするマッチョな男が2人、暑苦しい事この上ない絵ずらだった。」

「はいはい、喧嘩はそこまでにしてくれ。何が嬉しくてマッチョな男2人の絡みを見せられなきやならん」

冷めた声を浴びせられた2人は互いの顔を見合つて虚しさを顔に出して離れ合った。

「それで話は変わるけど、ラストアタックボーナスは何が出たんだ？」

その事を忘れていたエギルはストレージを出してアイテムを表示した。

「何じゃこれは？」

思わず出たウルフギヤングの言葉はチーム全員の言葉だった。

「アイテムの説明欄には聖樹（PT）としか書かれていないし、一体コレは何なんだ？」
エギル達が首を傾げながらアイテム名を口にした。

《《ブランチ》》

トレイン系のモンスターからドロップした事から直訳で“枝”なのだろうが、ラストアタックボーナスで只の枝がドロップするのか。聖樹を知らないエギル達には意味が分からなかった。

「エギルさんの所は準備出来たかな？」

首を傾げているエギル達にリンドが声を掛けた。

「あ、ああ。そっちは誰が行くか決まったのか？」

思考の海から戻ってきたエギルは此方に近づいたリンドと視線だけを此方に向けているキバオウを交互に確認した。

「どうやら臨時精鋭パーティが決まったみたいだね。それじゃ行こうか」

攻略組の中の精鋭組、今ソードアート・オンラインの中でもトッププレイヤー達と言っても過言ではないチームだった。

「モンスターの系統を把握するまでつちゆう事でエエな」

通路を歩きながらキバオウはリンドに確認するように尋ねた。

「ああ、今回は宝箱を探さないし見つけたとしても手を出さない。あくまでも系統を調

べる為の戦闘を目的にしよう」

その確認にリンドは念を押すように答えた。

「そやな、今回に限っては探さな見つかりそうににからな。何やこの木の根は？ 邪魔臭くて堪らんわ」

キバオウはそう言いながら通路を遮る様に伸びていた木の根を斬り払った。

「足元にも根があるぞ。暗くて見えづらいし足を取られない様に気を付けた方がいいぞ」

エギルが話しながら足で木の根を突いた。

「まるで迷宮自体が浸食されているみたいだ。他のメンバーも2人の言うとおりに注意してくれ」

壁一面に広がっている木の根を見ながら、リンドは周囲に注意を促して歩を進めた。

「それにしても一体モンスターは何時出てくるんや。何で戦闘だけを目的にした時に限って出てこうへんねん」

迷宮区に入り1時間ほど経過し、キバオウが耐えきれずに不満を口にし出した。

「いや、この状況いくらなんでも異常じゃないか？」

エギルの言葉に、リンドとキバオウは視線をエギルへと向けた。

「どういう事や、ただ運が悪いつて事やないんか？」

真つ先に不満を口に出していたキバオウが眉を顰めた。

「今この場には12人のプレイヤーが居るんだぞ」

エギルの言葉にリンドはハツとして何かに気が付いた。

「そうだ、同行しているプレイヤーの数が多ければ多いほどモンスターとのエンカウトは上がる筈だ」

「だから運つちゆうか、間が悪いんちゃうんかって話をやな」

リンドの言葉にキバオウは何度も言った事を呆れるように同じ言葉を繰り返した。

「今、俺達は迷宮区に居るんだぞ。只でさえモンスターとのエンカウト率が高い迷宮区で、プレイヤー人数が倍で、エンカウト率も倍の状況で、何も無いこの状況は運や間が悪いっただけで流せると思ってるのか？」

エギルの言葉にキバオウは完全に理解したのか顔を青くさせた。

「まさか、何もかも分からん間に何かのイベントが発生しとるんか？」

キバオウの言葉にエギルとリンドも顔を青くさせて周囲を見回した。

「その言葉、ボケた後にしては冴えてると思うぜキバオウさん」

エギルは額に汗を垂らしながら周囲の警戒を続けた。

「全員いつも以上に気を引き締めろ！もう何時、何が起こっても可笑しくないぞ!!」

リンドは理解した者と理解が追い付いていない者、全てを一つにする為に指示を飛ば

し始めた。

「今回ばかりは全員従うんや！」

キバオウは顔を青くさせながらも自分の仲間達に向かって纏まって行動できるように促した。

「お二人さん、一つ提案をしてもいいかな？」

周囲の警戒をしていたリンドがキバオウとエギルに向かって口を開いた。

「珍しくワイも提案しようと思つてたところや」

キバオウが冷や汗を垂らしながらリンドを見た。

「オレも同感だ。これなら同じ意見が出そうだな」

エギルは無理に笑みを作りながら答えた。

「なら言おうか、今日の所は何も言わずに撤退しないか？」

「賛成」

即答した2人の言葉を聞いてリンドは更なる指示を飛ばした。

「すでに何人かは今の状況が異常だつてことは理解してくれていると思う！だから今すぐ撤退を開始する！周囲を警戒しながら入り口に戻ろう！」

危機感を感じているメンバーは既に周囲の警戒をしている中、両目と口が空いたレザーマスクを被った男が騒ぎ始めた。

「何言ってるんだ!? キバさん! 此処まで来て戦闘もしないで逃げるんスカ!? ならALLSのメンバーだけでも別行動しましょうよ! 宝箱の目安なら幾つか付けてます! モンスタアの居ない今なら取り放題ですって!」

キバオウに向かつて騒ぎ立てる男に危機感を感じているメンバーから非難めいた目を向けられるが、男は尚も騒ぎ立てた。

「黙れジョー!」 「そうか、汝等は宝が欲しいのか?」 「だ、誰や!」

キバオウがジョーに向かつて出した怒鳴り声に被せるように迷宮区全体を震わせるような声が響いた。

「そうか、宝が欲しいのならくれてやろう」 「」

全員が声のする方へと目を向けると、そこには化け物が居た。

「なっ・・・!!? なんっ!」

誰の声か、引きつって声にならない声を上げる中で化け物は赤く光る宝石をジョーへと向かつて投げた。

「ソレは秘鍵《紅蓮の秘鍵》」 「汝の最も望むモノを与える我の一部」 「」

投げられたソレを慌てながらも受け取ったジョーは化け物へと視線を向けた。

「さあ、汝の望みは何だ」 「」

そう言いながら化け物は口が裂けるような笑みを浮かべた。

「ジョー今すぐソレを捨てっうおっ?!」

嫌な予感があったキバオウはジョーへと向き直った瞬間、宝石から目が眩むほどの真っ赤な光が放たれた。

「な、何だっただ今のは……?」

光が収まると化け物の姿はなく、誰かが呆けたように眩いた。

「ジョー何か身体が変な所とかないか?」

キバオウは茫然としていたジョーへと問い掛けた。

「だ、大丈夫っすけど何も起きないっすよ?」

ジョーの言葉の最後に大きな何かが動いた様な気配がして全員が身構えた。

「木の根が動いている……」

誰かの呟きで全員の視線が向けると、壁に張り付いていた木の根が宝石を持ったジョーを包み込むように動いていた。

「もしかして俺専用の超激レアアイテムが!」

ジョーが楽しげに声を荒げると、違うメンバーが恐怖に引きつりながら悲鳴を上げた。

「ぜ、全部だ!!そ、そこだけじゃない!壁に張り付いた木の根が全て動いてる!!」

全員が周囲に目を向けて、視線が外れたソコから何かが出てきた。

「……うああ……ああ！」

目の前で呻き声から叫び声に変わったソレを見た驚きで全員が固まった。

「ぞ、ゾン」「ぎやあつ！」

誰かの眩きを遮る様にゾンビは一番近くに居たジョーに襲いかかって噛みついた。

「こいつう！離さんかい!!」

キバオウがすぐさま引き離そうとしたが、力が強くて引き離せなかった。

「危ないから離れて！」

ALSのメンバーの1人であるフルプレートのリーテンがキバオウの反対側から告げるとロングメイスを構えた。

「ゾンビなら頭を潰しさえすれば!!」

片手棍ソードスキル《パワー・ストライク》上段に構えた片手棍を振り下ろすだけの初期に覚えるソードスキル。

「ジョー！動くんやないで!!」

意図に気付いたキバオウはジョーに声を掛けながら離れた。

「やあつ！」

真つすぐ振り下ろされた《パワー・ストライク》は噛みついてきたゾンビの頭に直撃した。

激しいクリティカルヒットのエフェクションと共にゾンビが力尽きてポリゴンへと変わった。

「大丈夫か!? 毒になつとる今すぐ解毒ポーションを!」

キバオウは倒れているジョーを通路の中心へと引つ張り出し、毒状態になっているのを見て解毒ポーションを探した。

「おいおいおい! そんな事よりも早く脱出するぞ! 奥と通つて来た道、どちらからも山の呻き声が聞こえる! 早く脱出しねえと挟まれてやられちまうぞ!!」

そんな誰かの恐怖に犯された悲鳴を聞いて、全員が恐慌状態に陥りかけた。

「おい! 見捨てる気かいな!」

キバオウの怒鳴り声にジョーは手を振って遮った。

「大丈夫っス。毒状態は自然回復するっスから早く脱出を! 役に立てそうにないので最後尾から付いていくっス!」

その言葉を皮切りに全員が一丸となって入り口に向かって全力で戻り始めた。

攻略の鬼

「つくそが！どんどん増えてやがるぞ！一体何なんだ!?!」

「いい！構うんじゃない！進路の邪魔になるモノだけを選別して押し出すんだ!!」

「足を止めるんじゃない！止まったら死ぬで!!」

「木の根や押し出したゾンビに足を取られないように気を付けろ！取られて転んだら死へと転がり落ちるぞ!!」

トレインしている大量のゾンビ達に追い掛けられる中、様々な怒号が飛び交いながらも全員が足を止めずに走っていた。

「唯一の救いは疲労とかで足が止まらないで済むって所だな!」

エギルが気を紛らわせるように声を上げた。

「それよりもアレって人間じゃないぞ!」

そんなエギルの言葉に苛立ったのか、今の状況に対してプレイヤーの1人が声を荒げた。
た。

「ゾンビっていうモンスターなんだから当たり前だろ!」

そんな言葉に別のプレイヤーが苛立ち、当然の事を言うなど声を荒げる。

「そうじゃなくて！普通ゾンビは人の死体だろ！アレは人じゃなくて二足歩行できる何かの死体だぞ！」

「どういう事か説明してくれないか!？」

変だと思つたリンドが詳細を求めた。

「次にゾンビを押し出す時にゾンビの腕や足を見てくれ！蛇みたいな鱗がビツシリ生えていやがるから！」

進路上のゾンビを2人のプレイヤーが腕や大腿部を注意して見ながら押し出した。

「言つてた通り蛇みたいな鱗がビツシリ生えていました！人では考えられません！」

DKBのメンバーがリンドに報告する。

「この宝玉を渡してきた化け物にも鱗が生えてなかったつスカ？」

最後尾のジョーが同意を求める様に問い掛けた。

「そういえば生えていたような・・・こいつ等はアレの同類つて事かよ？」

「見ろ！光が見えてきたぞ！考察は出てからにしよう！」

リンドが指差すさきには、外の光が薄暗い迷宮区に射していた。

「おい？近づいてるのに入り口の大きさが小さくなつてねえか？」

集団の中間当たりを走っていたが、頭一つ大きいエギルが目を細めながら呟いた。

「そんな!?まさか木の根が入り口を塞ごうとしているのか!？」

「いや、大丈夫だ!塞ぐスピードはゆつくりだ。この速さなら塞がれる前に抜けられるぞー!」

エギルの言葉は焦燥に陥りかけたプレイヤー達を安心させた。

「それは最高つスね!!つまり、何か起これば間に合わなくなるって事でしょ」

レザーマスクの中を見なくても分かるほど、隠しきれずに笑みが零れていた。

「何を言つとんね「ああっ!?!」なんやあつ!?!」

その言葉を聞いたキバオウが最後尾を走るジョーへと首を向けた瞬間、顔の横をソードスキルの輝きに包まれた何かが通過して、先頭付近に居たフルプレートのリーテンの足元を弾いた。

フルプレートゆえにゾンビを押し出す役割をしていたリーテンは終わりが見えていた事で油断しており、足元の衝撃に対応できずバランスを崩して転倒し、後から続いていたALSのメンバーが将棋倒しのように転倒した。

「ひゃっはあああ!!上から失礼しますよっ!!」

モノの見事に成功した事にジョーは嬉しさの余り奇声を発しながら転倒したプレイヤーを足場に先頭へと躍り出た。

「あ・・ああああ!!りっっちゃあああん!？」

転倒したプレイヤー達へと近づいてくるゾンビ達、その光景を見て難を逃れていたD KBのメンバーの1人が助けにいくように進行方向を変えた。

「シヴァアタ!?!」

集団の中間当たりで援護していたシヴァアタが突然方向転換したせいでリンドが巻き込まれて体勢を崩して転倒した。

「おっ棚ボタ! 日頃の行いが良いお陰っスね!!」

その光景を見てジョーは口笛を吹きながら出口へと向かって駆け抜けた。

「あの野郎! 逃がさねえ!!」

いち早く体勢を立て直したエギルは逃げ出したジョーを見て叫んだ。

「待つんじゃ! 転倒した者を見捨てるのか? 見捨てれば俺達チームは全員助かるかもしれないが……」

ウルフギヤングの言葉を聞いてエギルはチームメンバーの顔を見渡して決断した。

「聞くまでもないだろ。一緒にこの糞つたれな世界を生きる仲間を見捨てるなんて出来る訳がないよな!!」

「[[「応!!」]]」

入り口から射す光に背を向け、エギル達は救援に向かった。

「なあ、いくらなんでも時間が掛りすぎじゃないか？」

リンド達が迷宮区に入って一時間と少し、モンスター系の系統を見極めるだけと説明を受けていたプレイヤー達は迷宮区の前で待っていた。

「もしかしたらフィールドボスみたいなたレント系が何体も居るんじゃないのか？アレを倒すのは時間が掛るし」

「マジかよ、軽装備の俺達は耐久力ないし不利なんだよ。今回の迷宮区には入れないかもしれないなあ」

そんな事を言いながら話し合っていると入り口でリンド達を待っていたメンバーが焦った様子で掛け込んできた。

「早く来てくれ！迷宮区の入りが閉じかけている!!」

「な、何だって!?!」

驚愕に染まった声を上げながら入り口へと向かうと既に半分ほどが無数の木の根で塞がれていた。

「くっ！切れ！全員で木の根を切るんだ!!」

既に何人かは木の根に武器を振るっていたが、ソードスキル無しだと一本切るのにも時間が掛っていた。

「くそっ！ソードスキルを使っても技後硬直してる間に他の枝が塞いでやがる！」

段々と塞がっていく入り口に抵抗しながらもどうしようも無いと諦めかけた時に迷宮区の中から何か叫び声が聞こえた。

「何だ!?!中で何が起きてるんだ!?!」

リンドを呼ぶ声やキバオウを呼ぶ声はすれど、何が起きているか分からない恐怖で誰も迷宮区の中に入ろうとはしなかったが、せめてもの抵抗で塞ごうとしている木の根を切っていた。

「良かった！間に合ったっス!!」

入り口が塞がれる直前の中に入ったメンバーの1人が跳び出してきた。

「ジョー！一体何がどうなってるんだ!?!キバオウさんは？他のメンバーはどうしたんだ!?!」

「た、大量のモンスターが発生して撤退していたんすけど、逃げ切れなくて軽装備で一番早い自分が救援を呼びに」

ジョーは息を荒げながら入り口の塞がった迷宮区を指差す。

「まだキバオウさん達は中で戦っているのか!?!」

再び何人かが入り口を塞いでいる木の根へとソードスキルを叩きつけるが、一本や二本切れるが複雑に絡み合った木の根は断ち切れなかった。

「そんな、このままじゃ……」

ビクともしないのを見てプレイヤー達は絶望したように空気が重く押し掛かった。「そこを退きなさい」

その声は重く押し掛かっていた空気を切り裂き、聞いた者は全て従ってしまうほどの覇気が溢れていた。

「え、あ・・アンタはビーターのっ!？」

そんな男の言葉は顔の横を通過したレイピアによって止まった。

「退きなさい」

振られたレイピアはバツサリと木の根を切り裂いていた。

「ひやあつい!!」

日に当たりキラキラと輝く深い黄金色のロングヘヤーが躍る様に激しく動き出す。動きに合わせてリズムよくレイピアが振られていき入り口を塞いでいた木の根がズタズタに引き裂かれた。

「はあっ!!」

一拍溜めて放たれたソードスキルの突きにより引き裂かれた木の根がバラバラになつて弾け飛んだ。

「アレね」

奥でソードスキルの燐光を見つけると同時に凄まじい勢いで駆け出した。

「へ？」

自分達の背後から消えた筈の外の光が戻った事に驚いたプレイヤーが振り向くと、その横を凄まじい勢いの何かが通り過ぎ、呆けた声が出てしまった。

通り過ぎた何かを追うように視線を戻すと近づいていた三体のゾンビが一瞬でポリゴンの欠片に変わっていた。

「全員無事？」

その凜とした声と姿に見惚れていたプレイヤー達。その中で一番会った回数が多いエギルが一番先に我へと帰った。

「あ、アスナ？」

しかし、今までの雰囲気とは明らかに異なっていた。年相応の女の子らしさを微塵も感じさせない姿。

言葉にするのなら

薄暗い迷宮区の中でも輝きを放つ髪が躍るたびにゾンビ達がポリゴンへと変わっていく。

「攻略の鬼」

その言葉は誰にも届かなかったが、全員の頭の中に浮かんでいた言葉。

「なんだ、この程度なのね。いや、この武器があればこそ……か」
少なくとも五十はいた筈のゾンビ達は五分も掛らない内に全て倒され、アスナは足りないと言わんばかりにため息を吐いた。

「入り口を塞いでいた木の根は切り払っておいたわ。今の内に撤退しなさい」

「あ、ありがとう。アスナ君には礼を「いらないわ」ど、どうして……!?!」

リンドの言葉にアスナは直ぐに拒絶した。

「必要無いからよ。何か返したいと言うのなら一刻も早く攻略を続けて。ソレ以外何もいらないから」

一方的に宣告した後、アスナは振り向きもせず奥へと歩を進め始めた。

「ひ、一人で行く気かい!?!相方のブラツキーはどないしてん!?!」

キバオウの言葉にアスナはピクリと反応したが、それ以上の反応は無かった。

「コンビは解消したの。その方が効率がいいから」

「な、なおさら一人じゃ危ない僕達と一緒に「必要無いわ」なっ!?!」

リンドの誘いにアスナは首だけを向け

「私より弱い人に隣や上に立たれたら邪魔で仕方ないから」

誰もが見惚れる笑みと共に放たれた言葉は、何処かで聞いた覚えのあるモノだった。

「それじゃボス攻略会議で会いましょう」

そう言つてアスナは奥へと進んでいった。
もう誰にも止められなかった。

「——ということが、あつたらしいのサ」

細かく刻んだ肉と野菜を一緒に炊いた飯物、野菜などを薄い皮で巻いて焼き上げられた物、肉と野菜を薄い皮で包んで茹で上げ皿に並べた煮物、茹でたエビのようなザリガニのようなモノを生地で包んで焼き上げた物、冷たいスープに茹でた麺を入れた汁物と色鮮やかな料理がテーブルに並んでいた。

並んでいたのだ。

それらは一人によって凄まじい勢いで食べられ無くなつていき、手にした飯物が入つていた皿を置いた時にはテーブルの上は空の皿だけになつていた。

「色々とズレている気がしたけど、圏外にいる時の食い物に比べたら天と地ほどの差があるな。やつぱり調味料が塩の一つもないとなると厳しいか」

食い終わつて食後のお茶を啜りながら今後の事について真剣に考えていた。

「久しぶりの飯だつて事は理解しているが、オイラの話はちゃんと聞いていたか？」

金褐色の髪の女性プレイヤーが呆れながらお茶を啜っているプレイヤーを見た。

「うーん、お茶も何か違和感を感じるな。何だコレは？ほうじ茶でもないし玄米茶でもないし、何で微かにウーロン茶の味もするんだよ？」

「聞いているのかフワっち!!アーちゃんが心配じゃないの力!」

女性プレイヤーは呑気にお茶の事で首を傾げているフワに腹を立て、テーブルを強く叩いた。

「あ、はい。中々おいしかったですよアルゴさん」

キョトンという擬音が似合う顔をしてフワがアルゴへと向き直りながら見当違いな事を口にした。

「ちいがあうう!!フロントランナー達が逃げ帰って来た迷宮区に1人で入っていったアーちゃんが心配じゃないの力!?!って聞いているんだ!!」

ぜーぜーと息を荒げながらアルゴはフワを問い詰める。

「ああ、その事ですか。大丈夫なんじゃないですかね、アレは見境なくプレイヤーを襲う訳じゃなさそうですし」

言い終えたフワは再び怪訝な目で手にしたお茶を見る。

「アレ……って事は!」

話を一瞬だけ切ってフワのお茶を無理やり奪い

「中に入ったプレイヤー達が見た化け物を、フワっちは知ってるという事だな」

真剣な面持ちで情報のやり取りを求めた。

「まあ知つてると言えば知つてますけど、知らないと言えば知らないですね」

どっちとも取れないフワの答えにアルゴは怒りの四つ角が立ちかけた。

「情報は出来る限り正確に、その違いで誰かが死んでしまう。コレはフワっちの言葉だったよな」

「そういえば言つてましたね。なら、だからこそつて部分もあります」

フワの言葉にアルゴは考えるように目を閉じて一呼吸置いてから口を開いた。

「フワっちが自分の利益の為に情報の独占をするとは考えづらいナ。どういう事か教えてくれないか？」

『つい最近、自分の為にだけにホントの事を話さなかった事があつたけど……黙つていよう』

アルゴの真摯な眼差しで見られた事により、フワは悪戯がバレていない子供の様な心境になった。

「ソードスキルを使わず圧倒的膂力に任せて剣を振り回すか、武器を捨てて獣のように爪等で襲いかかつて来るのどちらかなんですけど……」

フワは右頬を掻きながら気まずそうな振りをして目を逸らした。

「なんですけど?」

そんなフワの仕草が演技だと見破れなかったアルゴはフワが何かミスをしたと感じて声を掛けた。

「二度完膚なきまで叩きのめしているんですよ。その後、クエストの関係で取り逃がしてしまっていて……次からは戦い方を変えて来るのではないかなあと、例えばソードスキルを使ったり……とか」

その言葉にアルゴは納得したように頷いた。

「確かに中途半端な情報はかえって危険になるかもナ……なら戦ってみて何か弱点とかは無かったか?」

「あー、フルプレート装備をして高速移動するモノだと考えて下さい。生半可な攻撃は全て無意味です。やるなら斬撃系よりも打撃系の攻撃の方が有効だと思います」

これくらいですかね。とフワは話し終えて近くにあった湯呑を取り中身を啜った。

「あ……!?!ソレはオイラの……」

小さく悲鳴を上げたアルゴは何かを抗議するように小さく呟いた。

「はい? ああ、これ……」

フワはアルゴの様子を見て自分が何をしたか理解した。

「失礼、また何かで返しますから勘弁して下さい」

飲み切ったフワは食事代を払って席を立った。

「……乙女の唇は高いんだぞ。覚悟しとくんだナ」

そんなフワの様子を見て、アルゴは不満気に頬を膨らませて批難するように呟いた。「怖や怖や、何を要求されるか分かったモノじゃないですね」

フワは笑みを浮かべながらアルゴの非難めいた視線から逃げるように店を後にした。「どうなるかはフワっちの態度次第だナ」

そう言いながらアルゴはフワの横に並んだ。

「とりあえず、アルゴさんから防具屋の情報でも買わせて貰おうかな」

コレぐらいで足りませんか。と言わんばかりにフワはコルが提示された画面をアルゴの前に出した。

「むー、これほどの額を提示されたらアフターサービスもしなくてはいけなくなるナ」「はい。よろしくお願ひしますよ」

フワとアルゴは2人横に並んで街中を歩いて行く。

こんなトコロで

2023年2月6日

日が傾き、視界がオレンジ色に染まり、またゲームの中で日が過ぎていく、そんな感傷を破る報告が上がった。

《第九層のボス部屋を発見!!今日の午後5時からルートオプトウリーの中央広場にて攻略会議が開催!!》

新聞の号外のように複数のプレイヤー達が配っている《アルゴの攻略本》に記載されていた内容。

その内容を見たプレイヤー達の反応は様々だった。

死の恐怖に怯える者達は少しでも早く解放されるかもと喜び、早く解放されたいと期待をする。

攻略組といかないまでも自分達のレベルを上げ、いつかは攻略組の一員にと考えている者達は攻略スピードに焦り、自分達の前を走っているプレイヤー達に憧れを抱く。

そして現実を知っている攻略組の者達は顔を青ざめていた。

対策をキチンと取れば進めるが、それでも攻略組の中でも精鋭中の精鋭達が全滅しかけた迷宮区。

ソレをたつた1人で、僅か一日と少しで突破した

攻略の鬼

誰が広めた訳でもないが、既に攻略組の中で知らないものは居らず、実際に見た者も見なかった者も全員が恐怖を感じていた。

「言つてた通り、問題無かつたでしょ」

《アルゴの攻略本》を配り終えたフワは、同じように配り終えて一息吐いているアルゴへと苦笑した。

「その通りだったナ。それにしても急ぎ過ぎな気もするんだガ……」

タダでマップ情報を渡す代わりに今日中に攻略会議を開いて欲しいと告げた《攻略の鬼》と呼ばれている女性プレイヤー。

以前会った時と余りにも変わった彼女の姿を頭に浮かべたアルゴは心配そうに溜め息を吐いた。

「何であんなに変わってしまったんだ？教えてくれないか？」

隣に座っているフワへとアルゴは問い掛けた。

「確信してる言い方ですね。普通ならキリトに聞くんじゃないんですか？」

普通ならカルマ浄化クエストをしていたフワに、アスナやキリトと接点があるとは考えずらい。フワは確信しているアルゴに疑問を抱いた。

「簡単な事だ。アーちゃん自身が言ったんだヨ」「フワさんとフレンド登録してましたよね。この事を知らせて貰ってもいいですか?」ってナ。号外を配るのを手伝ってくレ、なんて送ったけど誰よりも先に教えたのはアーちゃんが言ったからサ」

アルゴの話を聞いたフワはクスリと小さく笑った。

「……まったく、褒められるのを待つ犬みたいな事を」

何処か呆れながらフワは呟いた。

「もちろん聞いた話を売ったりなんかない。ただ、友達とも呼べる存在が人が変わったかのように変わってしまった。知らないでなんか居たくないんだ」

頼む、とアルゴは言いながらフワへと縋りつくように言った。

「簡単な話です。現実世界とゲーム世界の区別を付けただけですよ」

——ほら、簡単な話でしょう?——

そう言いながらアルゴへと微笑んだフワの顔にアルゴは鳥肌が立った。

男だと理解しているが、その微笑みは余りにも完璧に作り上げられていて性別を忘れて見惚れるモノであり

「どうもアスナはリアルに対して思う所があるみたいで、リアルに対して思う所がある

分、この世界に思う所がある。だから変わったのだと思いますよ」

人の心を弄ぶ悪魔の様な微笑みだったから。

「さてと、配り終えた事だし宿に戻りますね」

大きく伸びをしながらフワはアルゴに言った。

「え？こ、攻略会議に出ないのか？」

そんなアルゴへとフワは顔だけを向け口を開け

「あれ？情報屋ともあろうう人が知らないなんて言わせませんよ。第一層のボスを倒した

後、俺が何をしたかを・・・」

何かを思い出しながら薄ら笑いを浮かべたフワにアルゴは背筋を凍らせた。

「という訳です。まさかアレが攻略組を率いるリーダーの1人になってるなんて世も

末ですね。ま、世と言つてもゲームの世界なんですけど」

可笑しなモノを見るようにフワは薄ら笑いを浮かべたまま宿へと向かい出すが、ふと

何かを思い出したように足を止めてアルゴへと向き直った。

「そうそう、アスナに伝えといて貰っていいですか？」

「な、何をダ？」

いつの間にかフワの笑みは何処か優しきを感じる親の様な微笑みに変わっており、アルゴは何とか平静を取り戻した。

「新しい得物に振り回されるなよって」

アルゴの頭では《攻略の鬼》としての情報が巡っていた。

「ああ、分かった」

「これで1000コル分の情報は渡せましたか？」

情報の整理で固まっているアルゴを見て、フワはからかう様に言ってから今度こそ宿へと向けて歩き出した。

午後5時になり、何処か緊張した面持ちのプレイヤー達が中央広場に集まっていた。

「……予定していた時刻になったようだね。始めて貰ってもいいかな？」

リンドが遠慮がちに口を開いてアスナに開催を促した。

「……………」

アスナは無言のまま周囲に目を配っており、周囲のプレイヤー達は何かを警戒しているように見えていた。

「……はあ、とりあえず場所を移動しましょうか」

周囲の確認を終えたアスナは唐突にそう言った。

「はあ？ 此処に集めるとして始める前に場所を変えるやとお？」

その言葉にイライラしていたキバオウは文句を言いだした。

「ホントに……あの人の言っていた通りね……」

その反応にアスナは呆れた様に額に手を当てながら、小さく呟いた。

「何を言っとんねん？しつかり話さんかい」

「口を開かないで貰えますか？オレンジを仲間にしていたALSさん。つい先日そのオレンジが何をしたのか忘れたんですか？」

容赦のないアスナの言葉にキバオウは何も言えずに視線を逸らした。

「最近、オレンジ達の活動が活発になっています。その為、不測の事態に陥りやすいボス攻略、その会議は本当に選ばれた人達しか参加できない様にしたのです。何も犯罪者達と情報の共有をする必要はないですよね？」

疑問口調に話しているが、そこには自身の確信と誰にも反論できない絶対の意見だった。

「と言う訳で、各リーダーは絶対に信用できる者を3人まで選んで来てください。その後で場所を変えて攻略会議を始めたいと思います」

リンドとキバオウは急いで戻り、仲間達に説明をして誰を連れていくか決め始めた。

「アスナ……」

《攻略の鬼》に相応しい姿のアスナを見てキリトは不安そうに呟くとアスナがキリトを

見つけて近づいた。

「君は私と一緒に入って貰うわ。後は知識量があるアルゴさんともう1人……」
アスナはそう言いながらアルゴにメッセージを送ると、すぐに返事が返ってきた。

「……アルゴさんは立场上仕方がないとしても……」

返事の内容を見たアスナが露骨に機嫌を悪くした。

「……フワのことか？」

アスナの様子を見て察したキリトはアスナに問い掛けた。

「ええ、彼の理由も仕方がないと言えば仕方がないけど……」

そう言いながらアスナはリンドの居る方を睨みつけた。

「あの人達と彼、どちらの方が有能かしら。私は問う必要性を感じないのだけど」

「そ、ソレは流石に駄目だつて！いくらフワでも1人なんだし、今回のボス攻略は人数が必要なかもしれない、此処で露骨に敵を作らない方がいい」

そんなキリトをジロつと見たアスナはため息を吐いた。

「まあ、協力しないとは書かれてないし。いざとなつたら無理やり引つ張ってくればいいか。その時は君も協力しなさいよ」

キリトは安堵しながら首を縦に振った。

「どうやら決まったみたいね。アルゴさんに紹介された店で始めましょうか」

此方に近づいてくる人達を見てアスナは動き始めた。

質素な作りだが、二階をまるまる貸し出され大きなテーブルを囲むようにプレイヤー達が集まった。

「それで偵察はどないすんねん？」

まだ不機嫌そうな顔をしたキバオウがボス部屋を見つけたアスナへと問い掛けた。

「既に私と隣の彼はボス部屋に入ったわ」

その言葉に周囲がざわざわと騒ぎ出した。

「またラストアタック・ボーンスを独り占めする気やったんか？」

その反応を代表するかのようキバオウが批難を始めた。

「今の私にはどうでもいいモノね。そんなにアレが欲しかったら自分達だけで挑んだら？」

アスナは心底どうでもいい風にながら逆に挑発をした。

「そ、それよりも！ボス部屋に入ったが、ボスが出てこなかった。部屋の中は大部分を占領するように大きな木が立っているだけだった」

「ボスがいらない？その大きな木がボスでは無かったのかい？」

キリトの言葉を確認するようにリンドが問い掛けた。

「ああ、HPバーも無ければカーソルもなかった。オブジェクトの一種かと思ったんだが……」

その内、リンドに連れられたプレイヤーの1人が口を開いた。

「我々が受けたクエスト関連でボスに関する情報は今のところ上がっていませんでした」

話を聞いていたALSのプレイヤーの1人も首を横に振った。

「私達の方でもボスに関する情報は無いですね」

「クエストって言ったらアンタ等が受けていたキャンペーンクエストはどないやねん」

思い出したようにキバオウが訝しげな目を向けながら2人に向けた。

「オレンジ達の襲撃を受けて滅茶苦茶になった。まあ、ある人の協力を受けて何とか丸く治められたから心配ないわ」

事もなげにアスナが言い放ち、誰も二の句を告げられなくなってしまった。

「化け物に渡されたっていう《紅蓮の秘鍵》が文字通り鍵になってるんじゃないでしょうね」

ジョーを逃がしたキバオウをアスナが何処か批難するように見た。

「いや、ソレはないと思う。アレは持っている者に本来の持ち主が力を与えるモノだから」

らアレ自体が鍵にはならない」

「そんなこと一体誰に聞いたのよ」

その場にいた誰よりも早く隣にいたアスナがキリトへと問い掛けた。

「あの化け物本人が話してたのを聞いたのさ」

気絶していたアスナはその時の事を思い出して悔しそうに眉を顰めた。

「そういえば、あの時も直接攻撃はしてこなかった・・・」

あるプレイヤーがジョーに《紅蓮の秘鍵》を渡してきた時の事を思い出して呟いた。

「ボス部屋に入る人数が関係するとか他に何か条件があるのかもしれない」

「それなんだがよ。迷宮区前のフィールドボスを倒した時のラストアタック・ボーナスで出たアイテムを見てくれ」

そう言って手を上げたエギルに全員の視線が集まるとエギルはストレージから《ブランチ》を取り出した。

「アイテムの説明欄に聖樹（PT）と書かれているんだが、そのボス部屋にあった大きな木が聖樹じゃないのか？」

キリトとアスナは少し忌々しく思いながら、あの場所を思い出していた。

「アレも聖樹の一部だったりするのさ？ そうならパーティーだけで攻略をすることに・・・」

「それならβテスト時のボスは何やったか確認した方がエエンちゃうんけ？」

そんなキバオウの言葉にキリトが答えた。

「βテスト時は《スアクティ・ザ・リザード》リビングデッドで巨大なワニみたいな奴だったよ」

「強さはどれくらいだったのかな？」

リンドがキリトに確認するように問い掛けた。

「強さ自体は大した事はない。けど状態異常にする攻撃が厄介だ、解毒ポーションの用意と使用タイミングさえ打ち合わせしていればパーティー一つでも問題ないと思うけど……」

キリトがエギルに目をやるとエギルは察したのか

「パーティ全員のストレージに《ブランチ》が入っていた。おそらくフィールドボスを倒した時のパーティだけが手に入れられるんだろう」

「エギルのパーティは4人、4人で攻略……」

キリトは顔を青ざめさせてエギル達を見回した。

「βテストの時はそんなに強くなかったんだろ？明らかにβテスト時よりも倍以上のレベルがあるんだ。そんなに問題じゃないだろう」

青ざめたキリトを安心させるようにエギルは自身の胸を叩いた。

「そんな心配ならβテスト時のボスの挙動とか色々教えてくれ、絶対に大丈夫なくらいによ」

「……分かった。後でじっくり教えるが、βテスト時と違う挙動が必ずあると思う。動きは遅いから十分見極めてから対応してくれ」

説明を始めたキリトを見てリンドとエギルも互いに話し始めた。

「今回ばかりは互いに協力してエギルさん達のバックアップをしないか？」

「まあ、しゃあないな。あん時に助けて貰った礼がまだ済んでないしな」

リンドが差し出した手を握ってキバオウは、エギル達が自分達だけなら助かったのに助けに来てくれた事を思い出していた。

「ならボス部屋までのマップとルートは私が提供するわ。どうせタダで公開する予定だったし別にいいわよ」

近くにアスナが寄って来て2人に告げた。

「それとボス部屋までの露払いもするわ。貴方達も対策くらい出来てると思うけど、万が一があればエギルさん達にも影響が出かねないもの」

誰よりも早く、深く潜り込んでいたアスナの言葉にリンドとキバオウは頷くしかなかった。

「こんな所でモタモタしてられないのよ。」

こんな世界で・・・」

アスナは黙って窓へと近づき、窓から見える景色を視界に映してはいるが、見てはいなかった。

犯罪者だ

2023年2月7日

松明のゆらゆらと揺れる光に照らされている大きな扉の前で、プレイヤー達は何処か緊張した面持ちで集まっていた。

「おいおい、本当にこんな良い装備貰っちゃまっていいのか?」

その中で頭一つ大きなエギルは自分の身につけている装備を見ながら目の前にいるリンドとキバオウに遠慮がちに言った。

「まあ、前に助けてもらった貸しがあつたからな。これで貸し借りなしや、何としてもクリアしてくれな困るで」

「もちろんクリアするつもりだが、何せパーティ全員分もあると・・・」

エギルの視線の先には同じように新しい装備に目を輝かせているパーティメンバーが居た。

「助けてくれたのは君達。パーティ全員だからね。それにクリアしてもらわないと困るのは僕達でもあるんだ。この支援くらい当り前さ」

リンドは笑顔のままエギル達に期待を寄せた。

「装備の重量は大丈夫か？ 思った様に動けなくて攻撃を受けた、とか言うなよ」

目を輝かせているエギルのパーティを見て、キリトは苦笑しながら言った。

「ああ、分かっているってお前さんから教えられたボスの状態異常攻撃だけは喰らわないようにするからよ」

エギルは苦笑しているキリトに向かってサムズアップした。

「分かっているとと思うが、ヤバいと思つたら直ぐに撤退するんだ。たとえボス戦に挑めるのが《ブランチ》を持ったプレイヤーだけだとしても、出てくれば多くのプレイヤーがいる。情報さえあれば攻略法なんていくらでも思い付く筈だ」

そんなキリトの言葉にリンドだけでなく、キバオウまでもが深く頷いた。

「心配なさんなって、死ぬ事だけはないようにするからよ」

エギルとパーティメンバーは円陣を組むように集まった。

「ウルフギヤング、ローバツカ、ナイジヤン。見た目通り、俺は常にトツプを走って皆を引つ張る主人公ってガラじゃねえ」

「違うないわい、そんなウルフギヤングの言葉にクスクスとメンバーが笑い合う。

「でもさ、俺……俺達にはやりたい事がある」

その言葉に全員が頷いた。

「それは全員バラバラで纏まりがない様に見えるだろうが、今は同じだ。誰も死なず死なせず此処を突破するぞ！」

応!!と、エギルの咆哮に続く様にパーティ全員が吠えた。

「行くぞ!!」

大きな扉を押し開けてエギル達は入っていくと、扉が大きな音を立てて勝手に閉まった。

「扉は開きそうにないな。条件を満たしたからなんだろうが、内側から開けるんだろうか?」

リンドは閉まった扉に手をやりながら心配そうに呟いた。

「分からない。一度エギル達と一緒にボス部屋に入ったが何も起きなかった所を見ると、やはり《ブランチ》がどうしても必要なんだろう」

此処で待つ事しか出来ない事への悔しさを紛らわせるようにボス部屋の扉から視線を外すと、

鬼と呼ぶに相応しい形相をした女の子がいた。

「つあ、アスナさん? 一体どうしたんですか?」

悔しさとか一瞬で吹き飛ぶほどの恐怖により、キリトは凍りついてしまった。

「……来ないのよ……!」

怒りを押し込めているが、漏れ出ている怒気が顔に表れている。

松明の明かりだけで薄暗く見えづらいのが幸いだ。こんな貌を女の子が誰かに見られてはいけない。

「え？でもアルゴからフワにも来れない理由があるって言ってたよな？」

「ええ、実際に多くのプレイヤーが集まっている所に彼が行くのは問題があるでしょう。でも、今は別よ。此処にいるプレイヤーは最低限だし何とでもなるわ。それに……今回だけはどうしても必要なモノを持っているって聞いたのよ」

そんなアスナの言葉にキリトは理解したが、思考が追い付かず、確認の為に口を開いた。

「必要なモノって……まさか……」

「ええ、そのまさかよ。攻略会議の後、情報をアルゴさんに渡したら彼が話したクエストの報酬に同じ単語が出てたって聞いたのよ」

今や恐怖は既に驚愕に変わっており、キリトもアスナと同じように周囲を見回した。

「れ、連絡は取ったのか!?来るって言ってたのか?」

「彼とはフレンド登録してないのよ。こんな事になるならフレンド登録くらいしとけばよかった……私のバカ!」

アスナは親指の爪を食い千切るくらい力強く噛みしめながら周囲に目をやっていた。

「なんで昨日の内に教えてくれなかったんだ!? 前から俺とフワは知り合いだった事は知ってる筈だろ!」

「昨日はエギルさん達にボスの事をレクチャーしてたでしょ。邪魔するような事言える訳ないじゃない。アルゴさんから連絡を入れるようお願いしたわ」

言葉に詰まったキリトはフレンドの登録一覧からフワへとダイレクトコールを送った。

「頼む出てくれ……!」

キリトの耳に入る長く感じるコール音、何故かコール音がエギル達の命の危機を表すコールサインみたいに感じた。

「つたく、こんな事ならダイレクトコールの音も切つとけばよかった」

聞こえてきた声は耳元と少し遅れて来る声で二重になっていた。

「それで、どうしたんだ?」

隣に居るアスナの目が一点を見つめており、強い光が宿っていた。

「キリト」

音が一つになった時には松明に照らされた場所にフワが出てきた。

巨大なワニみたいなボスが尻尾を大きく引絞った。

「引け！薙ぎ払いが来るぞ！」

エギルの声を聞いてメンバーが大きく範囲外へと下がった。

「ツゲアアアア……！」

かすれた咆哮を上げながらボスは周囲を薙ぎ払う様に身体を回転させた。

「腐った身体の一部に注意しろよ！踏めば足を滑らせるぞ！」

ボスが大きく動いたたびに撒き散らされる腐った身体の一部は踏み込めば足を滑らせた。

「キリトの説明ではなかったな。コレもβテスト時との違いか厄介ではあるんだが……」

回転していると足がもつれてボスが転倒した。

「今だ！」

そんなメンバーの声と共に全員がソードスキルを転倒したボスへと叩きつけた。

「起き上がりに暴れるぞ！一旦引くぞ！」

指示に従い全員がエギルの元を集まった。

「話に聞いてたよりも余裕だな！HPバーも赤になったし後少しだぞ！」

両手槌を肩に担いだナイジャンが言葉通り余裕そうに言った。

「思った以上に早く終わりそうじゃな。こりや楽でいい」

両手剣を杖のように地面に刺して杖のようにもたれていたウルフギヤングが嬉しうに呟いた。

「ホントにじじいみたいな事を言うんじゃないよ」

エギルと同じ両手斧を持ったローバツカは笑いながらウルフギヤングに突っ込みを入れた。

その中でエギルだけが嫌な予感が拭えないのかボスへと警戒の眼差しを向けていた。

「まあ、気持ちは分からんでもないが、少し肩の力を抜け。警戒していても力が入りすぎると身体が動かんぞ」

ウルフギヤングの言葉にエギルは大きく息を吐き、強張っていた身体の力を抜いた。

「それで、アレの何をそんなに警戒しておるんじや?」

落ち着いたエギルを見てウルフギヤングは、大して移動もせずのにた打ち回る様に暴れているボスを指差した。

「あまりに簡単過ぎるとは思わないか? いくらβテスト時と違うと言ってもコレは簡単過ぎる。今までのボス戦から考えてみる」

エギルの言葉に今までの階層ボスを思い出して苦い顔をした。

「楽なモノもあったが、此処まで簡単なモノがあるとは到底考えなれない。今回も何か

あると考えた方がいい」

暴れていたボスが再び足をもつれさせて転倒した。

「おそらく、アレを倒してから何かが起こると考えている。倒しても気を抜くなよ」

エギルはそう言いながら両手斧を構え、他のメンバーも気を引き締めた様子で各々の獲物を構えた。

「起き上がった瞬間を狙うぞ！」

手足をゆつくりと動かして起き上がろうとしているボスへと駆け出した。

「前足はオレとローバツカ、ウルフギヤングは頭を切り上げろ！とどめはナイジャン切り上げられた頭を叩きつぶすんだ！」

エギルは指示を出しながら左脇に両手斧を構えてソードスキルを発動させ、その横を走るローバツカも右脇に構えて同じソードスキルを発動させた。

その後ろを走るウルフギヤングは両手剣の切っ先を下に構えてソードスキルの発動させ。

そして最後を走るナイジャンは両手槌を肩へと掛けて振りかぶりながらソードスキルを発動させた。

「ぬ・・・おおおっ!!」

エギルとローバツカは互いに交差するように走り抜けて、エギルは左足にローバツカ

は右足に向けて同時にソードスキルを放った。

「そりゃあつ!!」

前足を同時に攻撃されたボスは前のめりに倒れようとした瞬間、ウルフギャングの両手剣が下顎に添えられるように近づいて一気に打ち上げた。

「どっ・・せええええい!!」

ソードスキルにより跳躍したナイジンは反り返るほど振りかぶった両手槌を打ち上がった頭めがけて振り下ろした。

槌と共に地面に叩きつけられた頭は鈍い音と共に何かが砕ける様な音が鳴り響き、一拍置いてポリゴンの欠片へと爆散した。

《Congratulation》が出てこない!まだ終わってないぞ!」

全員が周囲を気にし始めた瞬間、部屋全体が動いた様な気がした。

「これは・・・まさか・・・」

此処にいる全員が死を覚悟した出来事、その切っ掛けとなった現象に非常に似ていた。

「・・・どうするんじや?今すぐ撤退するか?」

若干顔を青くさせたウルフギャングはエギルへと尋ねた。

「そうしよう。だが、せめて何が起きるのか確認してから扉から出るといのはどうだ

？」

ウルフギヤングだけでなく他のメンバーも頷き、エギル達は入って来た扉へと向かって走り出した。

「なっ?!扉が既に!?!」

扉へと近づいたエギル達は驚愕の声を上げた。ボス部屋の扉が上から下に掛けて大きな木の枝が塞いでいたから。

「俺達が戦っている間に塞いだのか?」

「くそっ!枝が邪魔で扉が開かねえ!!」

ナイジヤンが扉を引き開けようとするが、ビクともしなかった。

「全員周囲の警戒と共に貰った盾を取り出して密集しろ!」

エギルの指示のもとにメンバーはキバオウとリンドから貰った盾をストレージから取り出して扉を背にして密集形態をとった。

「オオオオオオオオオオ」

「やっぱりアレが動き出すってことだよな……」

エギルの視線の先にはボス部屋の大半を占領している聖樹と思われる木が風が鳴くような声を上げていた。

「来るぞ!まずは動きと攻撃を見極める!互いに助け合え!絶対に生き残るんだ!」

絶望的な状況。それでも4人は誰も諦めていなかった。
必ず突破口がある筈、そう信じていた。

明るみに出た事により、姿が現れたフワにより1人の男が狂ったように声を上げた。

「おま、おま、お前はあつ?!」

あの時の痛みを思い出したのか、蹴りを喰らった顔を押しさえながらリンドは喚き散らした。

「で、何の用なんだ?」

そんなリンドを無視してフワはキリトへと問い掛けた。

「随分と遅かったわね。重役出勤のつもりかしら?」

リンドの反応が気になるキリトの代わりにアスナが皮肉を投げかけた。

「寝てた。久しぶりに味わう人間社会だったから惰眠を貪ろうとしたんだが、色々あつて叩き起こされた」

フワはダルそうに欠伸をしながらアスナへと答えた。

「ずいぶんと眠そうね。此処に来るまでにモンスターと出会わなかったの?」

「ああ、出会ったけど弱いし眠気覚ましにもならなかった」

フワは眠そうに瞼を擦りながらつまらなさそうに呟いた。

「……そうこなくっちゃ、それじゃ本題に入るわ「ちよつと待った!!」何か用ですか
リンドさん」

アスナはウンザリした顔で騒ぎ立てるリンドへ視線を向けた。

「どうして《オリジン》の彼が此処に居るんだ!? いや、そもそも君達が言いだした事なのに犯罪者に連絡を取っているんだ!」

リンドはフワとキリトを交互に指差してまくし立てる。

「それで本題って何?」

視界にすら入らないのか、フワはアスナに話の続きを求めた。

「え……まあいっか。貴方《ランチ》を持っていてるそうね」

アスナの質問にフワは訝しげな顔をしたままストレージを開いた。

「ああ、あるな。何の意味も無かったアイテムだが、コレが……ボスに関係するの
か?」

フワはボス部屋の扉を見た後、何かを察したように確認した。

「そうだけど、アルゴさんから何も聞いてないの?」

アスナは呆れたようにフワに聞いた。

「それよりも早く行けって怒鳴られたことしか覚えてない」

フワを起こす為に寝ていなかったのか、目の下にクマを作り鬼気迫る勢いだったアルゴを思い出してフワが目が醒めた。

「そう、それなら説明するわ。その《ブランチ》がボス戦に挑むのに必要なの。自分で挑むなり、嫌なら私に渡してくれないかしら？」

アスナが差し出した手にフワはストレージから取り出した《ブランチ》を置いた。

「あら、アツサリと渡してくれるのね。自分で戦おうと思わないの？」

拍子抜けした様子のアスナは手にした《ブランチ》を握りしめた。

「キリト」

唐突に呼ばれたキリトは戸惑いながらもフワへと向くと何かが投げられた。

「え？な、なんでコレが？」

手で受け止めた《ブランチ》を見て、キリトフワへと問い掛けた。

「なんでって一つあれば二つあるだろう。更に言えば、三つくらいあるモノだ」

そう言つてフワは再び《ブランチ》を取り出した。

「それで、誰が中に入ってるんだ？」

「エギル達が先に入っている」

フワの問いにキリトが早くと言わんばかりに答えた。

「……誰だっけ？」

「見た目が完全に黒人のプレイヤーよ」

フワの問いにレイピアを構えながらアスナが答えた。

「あー、第1層ボス戦の時に台替わりにした人か。あの時の礼がまだだったな、ちようどいいや」

そんな事を思い出しながらフワはボス部屋の扉へと向かった。

「ダメだ！ そんな犯罪者を中には入れられるか！ 今すぐ持つている『ブランチ』を渡せ！」

3人の前にリンドが立ち、連れていた仲間が3人の顔色を窺いながらリンドの後ろに立った。

「俺を示すカーソルを見てみる間抜け」

フワが面倒くさそうに自分の上を指差し、リンド達は釣られるように視線を上に向けるとフワを指し示すカーソルはグリーンだった。

「お前等の言う犯罪者じゃなくなつたんだ。理解したか？ なら今すぐ退け邪魔だ」

目の前を飛び回る小蠅を見る目をしながらフワはリンドに告げた。

「カルマ浄化クエスト……色が戻っただけで貴様の罪は消えない！ デイアベルさんを殺し——っ!？」

睨みつけていたフワの姿がブレた瞬間、見えるモノ全てが知覚出来ない早さで流れていき、止まった時には地面が目の前にあった。

「ああああああああ!!?!」

前回と全く同じ場所、そんな事すら自覚出来ず。リンドは顔を押しさえてのたうち回った。

「言ったら、何の力もない奴が俺に関わるなって」

間合いを詰めて右フックをリンドへと放ったフワは小蠅を払う様に手を払った。

「それで、でいなんちゃらって誰だっけ？」

フワはキョトンとした顔でリンドの連れていたプレイヤー達に尋ねた。

「ひっ?! えっ……ああ」

そんな様子を見たフワは苦笑した。

「あー悪いな、やっぱいい。どうせ死んでる奴だろ? 興味ないし、どうせ覚えられないから」

そう言いながら気にするな、と言う様に手を振った。

「……アンタは多少マシになったみたいだな」

フワが視線を横に移動させるとキバオウが苦虫を噛んだような顔で目を逸らした。

「お、おいフワ……またカーソルの色が……」

震えた声でキリトがフワのカーソルを指差した。

「またオレンジになったんだろ。気にするな、それより早くボス部屋に入らなくていいの？」

痛みで呻き声を上げるリンドを無視してフワは扉の前に立った。

「その通りね。今は遊んでる場合じゃないわ」

アスナが続いて扉の前に立って扉を押すように手を触れた。

「え……あ、ああ」

倒れているリンドに目をやりながらもキリトも扉の前に立った。

「それじゃ開くわよ」

扉に触れている手に力を込めたアスナは固まってしまった。

「……何してるんだ？パントマイムか？」

固まったアスナにフワは眉を顰めて尋ねた。

「そんな訳ないでしょ！少し動くだけで開かないのよ!!」

アスナはレイピアを腰に直して両手で押したが、何かが扉をつつかえているのか開かなかった。

「そうか、少し離れてくれ」

フワは腰を落として構えを取りながらアスナへと言った。

「何……を？」

構えを取ったフワの雰囲気が変わり、その事に気が付いたアスナは無意識の内に扉だけでなくフワからも離れた。

「っ——！」

腰を落とした状態でフワは扉との間合いを詰める為に左足を力強く踏み込み、腰を廻して反動を付けた右足の横蹴りを扉の中央へと放った。

衝撃音と何かが千切れ跳ぶ音が重なりながら、石で出来た扉が壊れそうなほどの勢いで開いた。

「「「おおおおおう!」」」

開くと同時に複数の野太い男の声があり、フワの視線が声のする方に向くと此方にケツを向けながら倒れている男達の姿があった。

「……気持ち悪いモノを見た……」

思わず零してしまったフワは悪くないだろう。

邪魔をするな

「な、何が起きつつ扉が開いた!?!」

エギル達は驚きながら後ろへと視線を向けると大きく開かれた扉と中央に立つフワを見て更に驚いた。

「あの時は悪かった。礼をしに来た」

そう言いながらフワはボス部屋へと足を踏み入れた。

「扉が閉まろうとしてるわ。入るなら早くしな」「無事かエギル! 一体何が起こっているんだ!?!」

再び閉まろうとしている扉を見てアスナが横のキリトに声を掛けたが、キリトは既の中へと入ってエギル達の元へと駆け寄っていた。

「き、キリト……一体どうして?」

駆け寄ったキリトに戸惑いながらエギルは疑問を口にした。

「フワが《ブランチ》を複数持っていたんだ。他のメンバーも無事みたいだな」

キリトが周囲を見回すとエギル達は全員HPが黄色になっているが、誰一人欠けてい

なかった。

「ああ、それよりも一回撤退しよう。ボスがβテスト時と余りに違いすぎ」
話しているエギルの右足を地面を這いずってきた木の根が絡み付いた。

「しまっ——!?!」

自分の失態を自覚した声を出す事もままならず、エギルは凄まじい勢いで部屋の内へ
と引きづり込まれた。

「エギル!?!」

引きづり込まれたエギルを助けようとキリトが剣を握って駆け出そうとした。

「どわあああああああ!! 「マジかよ……」」

駆け出そうとしたキリトの足を重なる二つの声が止めた。

「つたく、勘弁してくれ……!」

キリトが見たのは、空中に跳躍していたフワ目掛けて捉えられていたエギルが投げつ
けられ、フワは空中でエギルを受け止めた勢いで横へと吹き飛んだが、何とか受け身を
取って地面を転がった。

「2人とも無事か!?!」

フワは上に乗っていたエギルを横へと退けていた。

「くっ、すまねえ。迷惑掛けちゃった」

目を回したエギルが受け止めてくれたフワへと謝罪した。

「いいから。また何本か来てるぞ、次からは自分達で対処してくれ」

溜息を吐きながらフワは立ち上がり忍び寄って来た根や枝を切り落とした。

「《Confiscated The Saint Arbour》取り上げられた？ 聖樹はそのままの意味ね。君は早くエギルさんを連れて下がりなさい」

エギルとキリトへと迫る枝を切り払ったアスナがキリトに命令した。

「待ってくれ、撤退しないのか？このままじゃエギル達が・・・」

「だから、エギルさん達を纏めて下がりなさい。撤退するなり何なり好きにすればいいから」

話を聞いてなかったフワは再び聖樹へと走り出した。

「それじゃ宜しくね」

ソレを見たアスナは短く会話を切ってフワの後を追いかけた。

「何か用か？」

突き出された枝を避けながら走っていたフワは後ろからアスナが来ているのを確認し、走るのを止めて全て切り払い始めた。

「せつかく捉えた獲物を使ってまでボスは貴方を攻撃した。さつき貴方は何を攻撃するつもりだったの？」

背を合わせるように密着したアスナは自分の考えをフワへと問い掛けた。

「・・・何でキリトと一緒に下がらなかつた？ 枝や根を攻撃するだけでダメージは入ってる。無理に前に出る必要はないだろ」

逆に質問で返しながらフワは自分達を取り囲もうとしている枝へと駆け出して切り払い、跳ね返る様に戻り絡み付こうとしている根から離れた。

「その言葉そっくりそのまま返すわ。何で貴方は下がらないの？」

アスナは舞う様に回転しながら周囲を見回して迫りくる枝を切り払い、根が無い所を足場にしていた。

「この程度じゃ脅威にならないから」

フワは面倒くさそうに蠢いている根を切り払って足場を作り、突き出された枝を避けながら切り落とした。

「っ！そう、ならせめて貴方の背中が見える位置で剣を振るうわ」

アスナは対応しきれず、フワが作った足場に逃げた。

何故？ フワは眉を顰めながら囲もうとしている枝を切り払い、絡み付く根を無理やり引き千切りながら問い掛けた。

強くなる為によ。アスナは正面から突き出される枝を切り払いながら答えた。

好きにすればいい。フワは答えながらアスナへと手を伸ばして触れ――

「邪魔」

その姿から聞こえた声は簡潔なモノだった。

「キリト、呆けているであろうアスナを連れて下がれ」

「そんな！見捨てて逃げろって言うのか!？」

アスナは声にならない声を出しながらフワのいる方へ手を伸ばして涙を流していた。その姿はとて《攻略の鬼》と呼べるモノではなく、か弱い女の子の姿だった。

「ま、待つて「聞こえなかったのか？邪魔だと言ったんだ」

そんな小さな声は誰にも届かず、代わりに聖樹から何か悲鳴を上げているかのような音が聞こえ出していた。

「お前達も邪魔なんだ。今すぐそこから離れて貰っていいか？」

優しい口調ながらも聞こえてくる音が尋常じゃないくらい大きくなり、何かを察したキリトは顔を青ざめた。

「まさ…か、全員ここから離れるんだ!!」

座り込んでいるアスナを抱えながらキリトは大声を出した。

「あ、ああ分かった!」

キリト達を守るために枝や根を切り払っていたエギル達は面を喰らい戸惑いながらも下がり出した。

「そ、そんな……」

隙間から見えるフワから離れながらも、無意識の内にアスナは手を伸ばしていた。

「おいおい、一体何の音だ？まだ何か起こるってのか？」

聖樹から聞こえる風が唸るような咆哮と、何か悲鳴を上げているような音が重なって部屋全体を震わし、エギルは冷や汗を浮かべながら眩いた。

「いいからフワから距離を取るんだ！」

キリトは一刻でも早くフワから距離を取ろうとしていた。

「フワって……アイツが何かするの？」

エギルは枝やら根で出来た繭を見て、キリトの言葉が信じられない様に疑問を口にした。

「……ここまで来れば……！」

ボス部屋の入り口が見える位置まで下がって、キリトは音のする方へ振り返った。

「穴が塞がっていくぞ。もうこれじゃ……」

キリト達の攻撃で繭に開いた穴が他の枝や根で塞ぎながら更に厚く強固に修復されていった。

エギル組が見ていられないと目を逸らしていたが、アスナとキリトは目を逸らさなかつた。

アスナは茫然と、キリトはフワへの警戒で、目を逸らせなかった。

「っ!?!」

アスナとキリトは同時に息を呑んだ。

繭の下の方からフワの右腕の突き出して石で出来た床に触れた。

「ま、まだ!!」

それを見たアスナは正気を取り戻したようにフワの居る所へと駆け出したが、途中でキリトに取り押さえられた。

「ダメだ!近づくんじやない!」

「離しなさい!まだ、まだ間に合う筈よ!彼はまだ生きてる!!」

暴れながら離せと叫ぶアスナの視線はフワの方を向いて動かなかった。

「死にたいのか!」

暴れるアスナを抑えつけながらキリトは問い掛けた。

「死んでもいいわ!!このまま私の所為で彼が死ぬくらいなら!私も一緒に死んでやる!!」

アスナは何とか右腕を動かしてレイピアをキリトへと突き付けた。

「離しなさい!どうせ死ぬのよ!今さらオレンジや犯罪者になつても「フワに殺される

として何か?」——「なっ……何を?」

アスナの言葉を遮りながら言ったキリトの言葉にアスナは固まってしまった。

「指穿」

繭から零れた小さな声は誰にも届かず消えた瞬間、触れていた床に指が穿った。

そんな小さな変化は誰も気が付かず、一拍置いて鳴り続けていた音が消えた。

「な、何が起ころんだ……?」

音が消えた。それが何かが起ころる前兆だと思ったエギルは手にした得物を強く握った。

「くっ、間に合わない! すまない!!」

キリトは謝罪を口にしながらアスナへと覆いかぶさって身を伏せた。

最初の一つは本当に小さな音だった。

細い糸が切れる様な音

次の音は切れた糸の本数が増えただけの様な音

次の音は小さな何かが割れた様な乾いた音

次の音は木の葉が擦り合った様な音

そして全てが爆発した。

ソレは正しく爆弾のように風を吠えさせ、人ではない聖樹に絶叫を上げさせ、一瞬にして奪い取った。

「な、なんだよコレ……?」

エギルの漠然とした感想は自分の周りにいた仲間が抱いた思いと同じモノ。

「一体何が起きたんだよ……?」

エギル達の目の前には引き千切られた枝や根が投げ捨てられた。

「一瞬、一瞬で」

言葉通り、一瞬で自分達の目の前には壁の様に凄まじい量の枝や根が視界を覆っていた。

「だ、大丈夫か?」

キリトは背に受けた爆風の所為で痛みを感じながらも、庇う様に覆っていたアスナへと声を掛けた。

「こ、コレは一体……?」

キリトに覆いかぶされていなくても理解できなかったであろう嵐とも呼べる衝撃、その惨状に茫然としたまま呟いた。

「フワだよ。だから俺達が邪魔だったんだ」

キリトは痛む背を無視して周囲の状況を確認すると、壁の様に積み重なっていたモノがポリゴンの欠片になって爆散した。

「あーあ、せつかくアルゴさんに見繕ってもらった防具が御釈迦になった。直撃は避け

てただけだな」

ポリゴンが晴れると初期装備のインナーに布切れを羽織っているだけのフワの姿があった。

「フワは大丈夫なのか？」

その姿を見つけたキリトがフワへと問い掛けた。

「無事も何も見ろよこの姿。買ったばかりの防具が——なくなった」

言葉の途中で布切れになっていたフワの防具がポリゴンの欠片へとなった。

「それより何でこんな近くに居るんだ？ 離れろって言ったよな」

思った以上に近くに居たキリトとアスナに呆れながら告げた。

「別にいいじゃないか、無事だったんだし。それよりHPが真つ赤だ、ポーションくらい飲めって」

キリトも呆れながらフワにポーションを差し出した。

「お、サンキュ。……それでアレはまだ何かするのか？」

ポーションを飲みながらフワの視線の先にはHPバーは尽きた聖樹の姿があった。

「分からない。βテスト時のボスとはあまりに違いすぎる」

ふーん、とフワは感慨なく飲み終えたポーションを捨てながら、動かなくなった聖樹へと歩を進めようとした。

「ま、待って。一体何をしたの?」

何が起きたか理解できていないアスナはフワへと問い掛けた。

「何って見りや分かるだろ、纏めて引き千切っただけだ」

何を当たり前の事を聞いてくるんだコイツはという目でフワはアスナを見た。

「分かる訳ないでしょ! 一体どうやって引き千切ったのよ!」

「ソレはアスナだけでなく、俺もあそこに居るエギル達も分らないと思うぞ」

キリトの言葉を聞いてフワは諦めたようにため息を吐いて口を開いた。

「足と地面を掴んだ右手を支点として思いっきり引き千切った。ただそれだけだ」

納得いかないのかエギル達が首を傾げる中、回復していくフワのHPを見てアスナが

罰を悪そうに目を逸らした。

「私の所為で「謝罪なんてどうでもいい」

謝罪を口にしようとしたアスナをフワは制した。

「せめて自分の力がどれくらいかは把握してくれ。それともう一度だけ言う」

俺の邪魔をするな

簡潔ながらも完全な拒絶

第一層で言った言葉通り、フワにとって戦いの中で弱者は邪魔な存在であり。

たとえソレが自身の知人や親友や親類はては自身までも、彼の中で区別なく戦いにお

いて弱者は価値無き存在なのだ。

「……いくら待っても変化は起きないな。何が起こるにしろ近づいて調べないといけなさそうだな」

そう告げたフワは動かなくなつた聖樹へと歩を進めた。

「アスナ……」ほつておいて、私は弱い。今回はその弱さを自覚してなかつた私の自業自得。慰めなんて要らないわ」

キリトの慰めの言葉を遮つてアスナは強く手を握つた。

「私は止まらない。この世界に負ける事だけはしないわ」

アスナはそう言つてフワの後を追う様に歩き出した。

「キリト……」

心配するようにキリトとアスナの両者を見ていたエギルがキリトに声を掛けた。

「まだ気を抜かない方がいい。まだボス戦は終わつてないのかもしれない」

キリトも気にした風はなく、エギル達と共に警戒しながら聖樹へと歩を進めた。

「やつぱコレが鍵なのか？」

一番初めに空中へと跳んで攻撃しようとしたモノを見上げながらフワは呟いた。

「アレは……ロザリオ？」

フワの視線を追う様に見上げたアスナは聖樹の中心に埋まっている銀色の光沢を

放っているロザリオを見つけた。

「弱点かと思つて攻撃しようとしたけど、必要無かつたな」

フワはそう言いながら聖樹に登る為に触れると、まるで花が咲く様に聖樹が開き始めてロザリオのあつた所から下半身が木の女の子が出てきた。

「《ドリアード》？」

触れれば壊れてしまいそうなほど可憐で儂い姿にキリトは思わず零してしまつた。

「綺麗」

アスナも思わず眩いてしまうほど、その光景は神秘的であり、その姿は美しかった。

「我が子、我を超えた強者達よ。貴公等は何を望む」

ドリアードが面を上げ自身の両手を開き、誘惑するかの様に囁いた。

「既に我には何も無い。貴公等が望むモノがあるのなら好きにするがよい」

その誘いに導かれるようにフワはドリアードの胸の中へと入つた。

「代わりに貴公を頂くぞ」

ドリアードの周囲から開かれた聖樹がフワ達を包み込もうと下からそびえ立つた。

「っ?!?!退きなさい!!」

異変に気が付いたアスナがフワを避けながらもドリアードを切り付けるが直ぐに再

生した。

「HPバーが無い！一体――「それじゃ俺も頂こうか」――フワ？」

キリトの視線がドリアードに取り込まれかけているフワへと向くと、フワは何かを掴んで右腕を引きずり出した。

「やはり無駄であったか――」

フワは引きずり出したソレを握りつぶした。

「――全てを壊す者め、貴様は必ず滅ぶだろう――」

右手から銀色の破片が零れ落ちて地に着く前にポリゴンの欠片へと変わっていった。

「なんだ、やっぱコレが弱点だったのか」

包み込もうとしていた聖樹もポリゴンの欠片へと変わっていき、次の階への道が開かれた。

「案外つまんなかったが、次は期待してもいいか？」

そんなフワの問いにキリトは心苦しそうに答えた。

「βテストの時は第十層のボス戦まで行けなかったんだ。だから「知ってるよ、キリトに聞いた訳じゃないんだけど」――え？」

一体誰に、そんな言葉が出る前に暗がりから化け物が現れ息を忘れてしまった。

「――流石だ化け物よ――」

「鏡見た事あるか？見た目だけで言えばお前の方が化け物臭いぞ」

そんな会話で化け物達の口には笑みが浮かんでいた。

「それでどうなんだ？1つの区切りとなる階層だが、期待してもいいのか？」

「――今までと変わりないだろう。しかし我を見逃せば話は別だ」――

その答えにフワは握っていた拳を解いて、殺気を向けるのを止めた。

「へえ、ならいいよ。こいつ等を気にしながら戦うのも嫌だったし」

近くに居るキリト達に目をやりながらフワは道を譲った。

「次に会う時はどんな姿をしてるか楽しみだよ。名も知らぬ化け物さん」

そう言いながらフワ達を飛び越えて上へと向かっていく化け物を、フワは笑みを浮か

べながら見送った。